
W 魔法と記憶の織り成す物語

秋永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W 魔法と記憶の織り成す物語

【Nコード】

N9510I

【作者名】

秋永

【あらすじ】

塩の香り漂う街、【海鳴市】

今ここで、魔法と記憶のカケラが織り成す物語が始まる 秋永ラ
イダーシリーズ第一期

プロローグ 始まりのF/狙われた星の記憶(前書き)

m ごめんなさい、短編と連載間違えて載せちゃいました(m――)

なので、改めて、『W 魔法と記憶が織り成す物語』をお楽しみ下さい。

プロローグ 始まりのFノ狙われた星の記憶

皆は転生を信じますか？

俺は現在進行系で信じているっていうか
体験といますか第二の人生を歩んでます。

「どうした、気が散ってるようだぞ！」

「がつ?!」

現在、義理の兄に扱われています…

W 魔法と記憶が織り成す物語

「うう、脇腹が…キツイ…」

「鍛練中にスキを見せるからからだ…精進するんだな。」

「はい…」

「恭ちゃんも少しは優しくしたらいいのに…まだ、8才だよ?」

「何を言っている、美由紀…いくら8才でも既にそういった連中に
目を付けられてるんだぞ。コイツは、鍛えられる内に鍛えないと、命
が幾つあっても足りはしないさ。」

「…もっともで…」

「ほら、美由紀…タイが曲がってるぞ。」

「もう、士郎さんったらあ。」

もう…慣れた、ごめん未だに無理。

四年前に引き取られたが未だにコレだけはキツイ物がある…ほら、なのはが若干引いてるぞって

「ほらなのは、寝癖ちゃんと取れてないぞ…」

「ふえっ?!　ユウくん、いきなりはやめてえ〜」

これが高町家の毎朝の風景…なんとも、言えない家族だねえ…全くもって。

Side 時の庭園

「もう少しで着くね、お母さん。」

「そうね、フエイト…やっぱり、向こうの生活は楽しみ?」

「うん!　おばあちゃんとも住めるし同い年の子が沢山いるんでしょ?」

友達出来るかな…」

「大丈夫よ…何てったって私の自慢の娘だもの。」

母…プレシア・テストロッサは歳…

あの母に年齢なんて無いと思うが、その娘である私、アリシア・テストロツサは今、第97管理外世界…【地球】に向かっている。

理由は、フェイトの教育もあるし、母の病気はリンカーコア関係のもので

魔力素が薄い所のほうが治療しやすいのだ。

そして、何より…

「お母さん、【サイクロン】達と話していい？」

「構わないけど、スイッチは押しちゃダメよ。活性化したら危ないからね？」

「うん！ 気をつけるねえ」

【ガイアメモリ】…世界が、寿命尽きる時に世界が生きた証として、残したされるロストロギア。

ガイアメモリは【世界の記憶】ともいわれており、その中に私や母の専門である新エネルギー開発について記されている可能性があるのだ。

管理局からの許可があるので私達は合計6本のガイアメモリの所持を許されている。

その研究に魔力素が薄い土地でのデータは大変貴重だ。

ガイアメモリは本来、魔道士のリンカーコアに融合させて使う【ユニゾンデバイス】と

似た性質がある。

故に魔力素を吸収し、蓄える性質があるのだが

「アリシア、そろそろ到着します。」

「ありがとう、リニス。 フェイト達を呼び戻してくるわ。」

ドゥーン！！

「これは…攻撃?!」

「第六区画が損害…そんな、フェイト達がいるエリアです!!」

「そんな、フェイト達はっ?!」

「今確認…そんな、シグナルロスト…フェイトとアルフも、ガイアメモリも消えてしまいました…」

「そんな、すぐに探してっ!! 待っててね…フェイト!」

あの人の忘れ形見を失うわけにはいかない!!

Side 海鳴公園

「ふっ…ふっ…ふっ…」

時間は午後7時。

いつも、走る形を意識して走る事で、自分の体を思うように動かす鍛練も兼ねている。

普段なら、これで終わるんだけどなあ…不幸だあ…

「さあ、それをこっちに渡してもらおうか…お嬢ちゃん。」

「いやっ！、サイクロン達は渡さない！！」

これはおばあちゃんとお母さんの大事な物なんだから！」

「そうだった！ 近づくんじやないよっ！」

何、この修羅場？ 片や、アルミのアタッシユケースを持つ

た金髪の女の子と

犬耳な女性…

「いい加減、渡してほしいなあ…おじさん、短気だからさあ…！」

【M a g m a】

「何…これ…」

メモリを手に差し込んだと思ったら悪い人はまるで魔法生物みたいになってしまった…これが母さんが言っていた…

「ドーパント…」「こいつ、ランクがC-がA+ぐらいになってる？！」

『そうだあ！ さあ、そいつをわたs』

クソツ、間に合えっ！！

「うるせえ！ 近所迷惑だつてあつう?!」

『く、何だ…今の攻撃は…変身した私の頭が軽く揺さぶられたぞ。』

何物だ小僧！！」

「改めて言う…五月蠅いんだよ、オッサン。

あんたが知ってる【ミュージアム】について全部はいてもらうぞ。
やるぞ、ファンゲっ！！」

『いいだろ…コピーメモリごときに遅れをとるなよ？』

【F a n g】

白い、恐竜のような意匠のメモリをお腹に挿した少年は全身トゲだらけの真っ白な

怪人になってしまいました…

『さあ、お前の罪を数えろっ！！』

満月の下、炎の怪人と白い小さな怪人の戦いが、今、始まる…

プロローグ 始まりのF/狙われた星の記憶(後書き)

正直、学園キャハハウフフは、別の小説でしたいなあと考えているのです。

マヴラブ×ACfAのクロス物も書いていて、そちらも見えてくれると嬉しいなあ…
勿論、ちよつとしたクロスもあります。
ディケイド風にしようかなあ？

b ちよつと、雰囲気が違うリリなのもお楽しみ下さいな)・(

第一話 噛み砕くF / 始まりの夜 (前書き)

タイトルはビギンズナイト風だけどね…内容が不安なんだよな。

用語解説

・ガイアメモリ

【星の記憶】を封じ込めたロストログア。基本的に寿命が尽きた星がそこにいた証として作り出す物。その星を象徴とする概念を持つ。

種類は以下の二つ

+ コピーメモリ

ガイアメモリでも比較的に使われているコピー品である。オリジナルの物より力は「遙か」に劣るがその力は魔導士ランクBだった者がA程になるほど。

AIを積んでそれで制御を行う事が多い

+ オリジナルメモリ

天然物のガイアメモリ。

自我を持つ物は【オリジンメモリ】と呼ばれ、畏怖される。ファンゲメモリのように未だに未確認のメモリも多い。

第一話 噛み砕くFノ始まりの夜

『くそ、何なんだ!! この餓鬼は!!』

『戦闘中におしゃべりとは、よゆうだ、なっ!!』

<噛み砕くFノ彼の意思>

白い怪人【ファンゴドーパント】と赤い怪人【マグマドーパント】の戦いは
ほぼ互角であった。

マグマドーパントが火球を撃ち出せば腕の刃で引き裂き、辺りごと
と焼き払おうと

すると全身の刃から真空波を飛ばし地面を吹き飛ばして鎮火する。

正に、一進一退の攻防である。

「フェイト、アイツはいつたい…」

「ミュージアムが、どうか言っていたけど、とにかく逃げなきゃ
」!

『逃がすかつ!! 封時結界!!』

反転する世界、変わる風景…辺りは結界で包まれる

『こいつ、魔道士でもあるのか…』

『そうだった!! つまり、お前よりはるかに魔力制御が上手いんだ
よ!!…くらえっ!!…』

『おっと、無駄だよっ！』

フアングドーパントが結界に手をかざしそのまま殴り壊す

『なっ?! 結界を部分的に砕いただと!』

彼のやったことは魔導士において高等技術と言える事だ…結界の部分破壊など無駄に魔力を食う割に効果が余り宜しくない産廃技術でもあるが

『とりあえず、邪魔だからここから逃げろ…
後、話を聞きたいから、どこか近くで
待ってもらえると有り難いな。』

「う、うん。 じゃあ、またね!」

『ああ、またな…』

白い怪人…否、白き戦士は振り返り、敵に対峙する。

そして、白き刃が赤い皮膚を削り、赤い炎が白い鎧を削り会っ…

『こいつ、コピーメモリのくせに強い…まさか、何らかの改造を?』

『うう…ウガアーーーーー!!!』

『ぐわっ?!』

いきなり、全身から赤い炎を撒き散らしながら、マグマドーパ

ントは
突然、苦しみ出す。その姿はまるで…

『泣いているのか…悪人っぽいかと思っていたがまあいい、ファング、【メモリブレイク】だっ…!!』

『いいだろう、断罪の時間だ…』

辺りがしん…と静まり返り、いつの間にやらマグマドーパントの周りに無数の白い刺があり、拘束していた。

『グウ…タスケ…アツイ…イタイイ…』

『安心しろ…今、助けてやる…はっ…!!』

白い体が天を舞い、それを満月が美しく映す…フェイトとアルフは結界の外からその幻想的光景に見入っていた。

『『【ファングデストラクション】っ…!!』』

ファングドーパントの飛び蹴りが決まり、地面に巨大な竜が敵をかみ砕いた後
のような跡が刻まれる…それは断罪の刻印、悪き記憶を破壊した証である。

「ふう…やっぱり、駄目か…」

そこに残されたのは一人の少年と小さな白い物体…

「あの、あなた達は…」

「そつだよっ！！ アンタ達、何物だい！！」

「全く、他人に名前を聞くときは、まずは、自分からだと親に教わらなかつたか？」

『全くだ…まあ、ガイアメモリを6本も抱えた魔導士がまともな人間だとは思えんがな…』

ウウ~~~~！！

「サイレンの音…逃げるぞ…！！」

「う、うん！ あ、待つてよ…?!」

Area - 公園のはずれ

「えっと、その…私の名前はフェイト、フェイト・テストロッサつていいです。

こっちは…」

「アルフだよ…フェイトの使い魔さ。」

「ご丁寧にどうも、俺の名前は高町 雄理。

で、コイツが相棒の…」

『ガイアメモリの【ファンク】だ。

先ほど見ての通り、俺は【噛み砕く】概念に特化したガイアメモリ

だ。』

そこにいたのは少年のお腹から出てきた白いガイアメモリ【だった】物：

今は、小さな恐竜のような姿でいる。

「未確認のガイアメモリが一人で立って…しかも、ちゃんと喋ってる…」

「フェ、フェイト?! 落ち着いて! こんな時は、えっと…そうだ!

『理論がなくても「現象は起こる…か?」』
そう…当たり前」

「え? なんで、ユウリがその言葉を知っているの?

確か、私のおばあちゃんの言葉なのに…ユウリは多分、この世界の人間だよな?

リンカーコアが無いのにガイアメモリを使っていたみたいだけど…」

自分でも話せる話題と尊敬する祖母の言葉を知っている少年に少なくとも興味と懐疑を抱くフェイト…しょうがないか。

「ああ、なんとなく合いそうな言葉だし、それに俺を助けてくれた人の言葉が良く似ているんだ。

【たとえ、信じられなくてもそこにある以上は信じるしかない】
つてな。

同じようなこと考える奴は何処にでもいるものだね。」

『すまないが雄理…私は疲れた。先に休ませてもらうぞ。』

「ああ、おい…で…」

『ウミム…』

「見た目に反して可愛い寝息だね…」

「ほんと、こっつしてみると可愛い？かもしれないね…」

「…はれ？」

ドサツ…

「え？」

「ちょっと、大丈夫かい？」

「なんだ…これ、体が?! うがぁ…あぁ!」

「なに…これ、人の体が黒くなっていく?!」

『フェイト、彼にダブルドライバーを!! 急いで、彼が死んでしまっ!』

「サイクロン?! わかった、任せてっ! アルフ、手伝って!」

「わかった、メモリの入ったケースは、私が持ってくるから、フェイトはそいつを見ててっ!」

「わかったっ！」

怒鳴り声に聞こえるのは、お互いを鼓舞するため、つい先ほど助けてもらった相手に死なれると目覚めが悪いと言わんばかりに行動する二人であった

「これで…いいの？」

『構わない、本来はガイアメモリの使用で失われた魔力を補完するだけだ。』

それにコイツには少なからず、ガイアメモリを扱う才能がある。』

『じゃあ、はじめよ』

【Cyclone】 【Joker】

腰に装着された【ガイアドライバー・G2】…通称、ダブルドライバーから制御された二本のガイアメモリの情報が雄理の体に流れ込む…

『これは…予想を超える凄まじさだな…』

『彼はこんな物を使っていたのか…これはまさか、オリジンメモリっ？！…』

【オリジンメモリ】…ガイアメモリでも後に珍しい物で与えられたAIではなく、本当に自我を持つメモリである。

基本的に古い概念のメモリに多いがそれでも五分五分を切っている程の確率である。

『第一工程完了…凄い、もう僕らの力に
順応してる?!』

『本格的に、人間やめた奴だな…まあ、お陰で修復と制御が楽だが
…』

普通、ガイアメモリはとてつもない魔力の塊である。
それを何度も酷使用する事はガラスのリンカーコアを破砕機で吹き飛
ばすような事に等しい…

「サイクロン…ジョーカー、彼は？」

『概ね、修復完了。 成長期故に壊れるのも早いけど回復はもっ
と早いね…』

『体も中々硬く、柔軟だな…普段からそついった訓練を受けてるの
だろう。』

「ガイアメモリを扱う訓練？」

『いや、戦う訓練だ。 それもかなり高度な物のね…頭のリミッ
ターとか外し安くする訓練なんか普通やらないよ。』

『ああ、ここまで来るとジョーカーたる俺の領分だな。 道理で
相性言い訳だ。』

これなら二、三日寝るだけで回復するよ。』

呆れ果てる二人（二本？）、少年の容態が安定したので完全に油
断をしていた

「そこで、家の大切な次男坊に何をしているだい？」

『『『「っ？！」』』』

優しげ…だが、底冷えするような殺気を感じるそんな声を出す男性がいた

「その様子だと、彼の中のガイアメモリが狙いかな？　済まないが…手加減できると思わないでくれ。」

「ま、待つてくださいますか？！　誤解です！私達は、ただ彼を助きたいだけなんです！」

「そ、そうだよ。　こいつがドーパントになって助けてくれなかつたら今頃私達は…」

『残念ながら、事実だ士郎…』

「フアングか…しかし。」

『安心しろ、彼らの言った事は事実だ。またこいつが、無茶をしただけだ…』

「わかったよ、ここ寒いから家においで」

「えっと、大丈夫なんですか？」

「構わないよ、妻と末っ子以外は基本的に関係者だから。　それにこの子を助けてくれたお礼をしなければね。」

「ありがとうございます…！」

「助かったよ…」

時期は真冬、後のPT事件と呼ばれる【筈】だった事件の約半年前である。

第一話 噛み砕くFノ始まりの夜（後書き）

前書き長いとだめかな？

個人的に。ちゃんと考えてのアリシア生存なので、石を投げないで

誤字と流れがたまにおかしいときがある…

おのれ、デイケイド！！（違っ

- 次回予告 -

「お父さん、その子は？」

「私はフェイト・テストロッサ。」

「全く…面倒な事になったな」

「いくぞ、フェイト」

「変身」

次回、【重なるWノ戦う相手はお母さん？】

これで…決まりだ！

第二話 重なるW / 戦う相手はお母さん? (前書き)

映画：よかったです。

G4ミサイル的な意味合いで(違っ

第二話 重なるW／戦う相手はお母さん？

「家の子を助けて頂き、本当にありがとうございますっ！」

「」「」「ありがとうございます。」

なにこのカオス…

第二話 【重なるW／戦い相手はお母さん？】

俺は、丸一日寝ていたらしい。

しかし、その日は学校が休みの日なので、特には問題はないらしい…俺の行動を除いて

「さて…これより、高町家家族会議を開始します。」

そう、高町家、最強の存在、高町桃子が宣言した…

「議題は、うちの次男の容態と状況の整理…そして、刑の内容の吟味です。」

あ、もう何かしらの、刑執行は確定なんですか…

「まず、今回の証人を紹介します。アリシア・テストロッサさんとその娘さんのフェイト・テストロッサちゃんです。」

ああ、そんな悪ノリに、他の家族を巻き込むなよ…みゆ姉…orz

「はじめまして、明日、隣に引っ越す予定のアリシア・テストロツサです。娘共々よろしく願います。」

「お、おねがいしますっ!」

「あら、偉いわね。ほら、なのはも。」

「はじめまして、高町 なのはといいます。兄がごめいわくかけました。」

「さて、俺は助けたんだぞ！」

「あら、布団糞虫が、何を言っても、解らないわよ？そこで猛省なさい、雄理。」

「言い付けを破った罰だ。そこで反省している。」

「はい、すみません…」

『すまない、今回ばかりは庇えない』

お前の同情が逆に痛い…

「とりあえず、罰にウェイト5kgは固いな…」

「後、その状態でお店の手伝いね。」

「ねえ、何がどうなってるの、お兄ちゃん?」

「ああ、新しく引っ越してくるお隣さんが、危ない所をその糞虫

雄理が助けたんだけど、助け方が良くなかったんだ。」

「ふうん、ねえ！ フェイトちゃんと遊んできていい?? 今日、アリサちゃん達と遊ぶよていなっ」

「あら、ケーキ持っていく?」

「うんっ!」

「じゃあ、二人でショートケーキのデコレーションしましょうか。フェイトちゃんもやってみる?」

「え、えっと」

「行つてきなさい。 こういうのは第一印象が肝心よ。」

「うん、行つてきます!」

「はい、いつてらっしやい。」

トテトテ…

「さて、真実を聞こうか…ファングが何の考えも無しに、雄理に力を貸す筈がない。」

『それなら簡単だ…アイツが初めてドーパントに対し、復讐心では無く、助けたいという気持ちを抱いたからだ。』

「そんな事、わかるのか?」

『元々、アイツと俺は一つだった。 なら、答えは一つ。』

「常に繋がっている…」

「それって一体…そもそも、何故、彼とガイアメモリである貴方が、彼と繋がっているのですか？」

『残念ながら、それは解らない…気付いたら繋がっていた、それだけだ…』

「そんなアバウトな…。 あの、失礼を承知で聞くのですが、彼と貴方達家族は血縁者なのですか？」

「何故、そのような事を？」

「いえ、他意は無いのですが、何となく違和感のような物が拭えなくて…」

「ほう？ 面白いことを話しているな？」

「っ?! おやっさんっ！」

「あの…どちら様で…」

「すまなかつたな…俺の名前は【鳴海 壮吉】という、いや、何と無く、小僧に会いたくなつてな…」

「雄理ならそこで反省中ですよ。」

「見事なまでの布団蓑虫だ…借りてくぞ。」

「ど、どうぞ。」

「すまん、後で土産話をするから勘弁してくれ。それではレディ、失礼しました。」

「い、いえ…それでは、後で」

「はは、中々凄い人でしょう？鳴海さんは。前の仕事の時、よくお世話になった人なんです。」

「そうですか…では、話をまとめましょう。」

「お願いします。」

Side 布団蓑虫

「にしても…でかくなつたなあ、小僧。」

「小僧じゃない…雄理だ。」

「悪かったな、雄理。何、帽子の似合う若者にあつてな…そしてら、急にお前に会いたくなつてな。」

「帽子が似合う若者？」

「そうだ、まだまだ熟してないが、いい目をしていた。今のお前

のようにな。」

「え？」

「フアングから聞いたぞ…ドーパントを助けたそうじゃないか。」

「別に、ドーパントを助けたんじゃないくて、襲われた人を助けたくてやったんだ。」

「ふ、まだまだガキだな。素直に喜べ。」

「わっ、やめろっ！頭をぐりぐりすんなあ〜！」

「あ、なるみのおじさんっ！」

「おや？なのはちゃんか。それに未来のレディー達も」

「こんにちは、おじ様。」

「こんにちは、おじさん。また、話を聞かせてください。」

「む？、その君は…」

「は、はじめまして、フエイト・テストロツサっていいいます。」

「はじめまして、鳴海探偵事務所の鳴海 壮吉という。」

そういって、さりげなく名刺を渡す姿が決まっていた。

「さて、馬鹿弟子もいる事だし、話をしようか…これは私が…」

語り出したのは前の仕事を抽象的にした物。

なんでも、依頼で悪の秘密結社を追っていたが既に倒された後だったらしい。

その時に、【帽子が似合う若者】に会って、何故か俺に会いたくなつたようだ。

「すごいなあ、その人。 鳴海おじさんに認められるなんて…」

「本当にそうね…おじ様に認められるなんて生半可な事じゃないわ。 雄理もがんばんなさい。」

「おっつ。」

「ねえねえ、その悪の秘密結社ってなんて名前なの？」

「私も気になる。」

「そうだな…確か、【スーパーショッカー】と名乗っていたらしい。 まあ、滅んでしまったがね…お、もうこんな時間か…次の仕事か…待っている…またな。 精進しろよ、弟子三号。」

「また、お話聞かせてください。」

「体…気をつけるよ…」

「全く、言うようになつたな…小僧。 次、会う時には、帽子の似合う男になれるように精進しろよ。」

「…はい、師匠。」

「宜しい、じゃなあな。」

「さよーならー」

「お元気でー」

皆、口々に別れの言葉を紡いでいた…また会うために…

「じゃ、ユウ君…うち帰ったら刑を執行ね。」

「殺生なーっ!!」

ハードボイルドには…まだまだ遠そうだ。

・次回予告・

「彼のメモリ適応率は97%なんです。」

「それでも、私達の息子です。」

「いくぞ、フエイト。」

「うんっ」

「変身ッ!」

次回、「巡り合うW／心の行方」

第二話 重なるW / 戦う相手はお母さん？（後書き）

重なったのは、劇場版W。

お母さんとは不戦敗でした。

鳴海さんはちょっと喋らせ過ぎだろうか…

そこだけが不安です。

高町家ヒエラルキー

高町桃子⇨高町なのは>高町士郎>高町恭也>高町雄理⇨高町美由紀

こんな感じ、雄理はよく無茶をするので底辺です。

美由紀さんは弄られる的意味合いで底辺です。

雄理のステータス

名前：高町 雄理

年齢：8歳

性別：男

性格：最近、誰かを助けたいと思えるようになってきた。

しかし、未だに無茶をする問題児。

座右の銘：【男は強くなければ生きていけない…しかし、優しくな

ければ生きる資格が無い】by 鳴海 壮吉

憧れの人：鳴海 壮吉

夢：帽子が似合う男になる事

人生目標：【ミュージアムへの復讐】

境遇

過去は不明。

ある日、突然鳴海が高町家に預けた子供でそのまま、養子にした。

異常とも言えるドーパントやミュージアムへの復讐心がネックだったが最近薄れて来た。
キーワードは、転生者である事、とファンゲメモリだけを所持していた事。

そのうち…StSかA・S後半で雄理のビギンズナイトを語りた
い…

第三話 巡り会うW／心の行方（前書き）

始めに言つしごめん

第三話 巡り会うW / 心の行方

「「「いってきまーす。」」」

全然、似ていないけど挨拶は同じテンション…幼少高町兄弟に対する周りの評価はそんなものだ。

第四話 巡り会うW / 心の行方

「おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん。」

「おはよう、二人とも…」

「おはよう、なのは、ユウリ…ユウリは相変わらず、テンション低いわね。何とかならない？」

「おはよう、なのはちゃん、雄理君。雄理君は、顔色良くないね？大丈夫？」

「ああ、ちょっとばかり、5kgのウェイトを詰んでるだけだから…ありがとう、すずか。」

「そ、そうなんだ…頑張ってるね。」

「ああ、頑張る。」

普通、小学生で5kgも載せられたら厳しい物だと思っがまあ、

しょうがない…それだけの事をしたのだ。

「そろそろ着くみたいね。」

「うん、アリサちゃん、すずかちゃん、行くっ！」

「そうね…じゃあ、雄理、また後で。」

「またね。」

「また後で…」

高町 雄理の学校に対する評価は【友達とだべるところ】だ。純粹に探偵を目指している…人の話を聞くのは純粹に楽しいし、なにより、子供とは何処で何を見ているかわからない…楽しい場所を探すという意味合いではぴか一なのだ。

おまけに大卒までの知識がある雄理には小学生の勉強など見戲しすぎなかった…しかし、未だに死因が思い出せないのが謎だが。

「今日は何を作ろうかなあ〜」

おもしろいNo.1のスポット、【幽霊ビル】…海鳴市のビル街に、未だそびえ立つその姿は、来る物を威圧する。

何故、幽霊ビルかというと、都市伝説で【ビル街にある廃墟ビルには幽霊が住んでいる】という噂があったが、実際は、隙間風がなっていたという残念な仕様だった。

現在は雄理を含む聖祥男子精鋭の秘密基地になっていた。

「さて、まずは整理をすべきかね…」

「廃墟である秘密基地は台風に対する防御力は紙以下なのでよく汚れるのだ。」

「今日は俺だけかって…そういうば、そうだったな。」

「まだ、肉体的には痴呆にならない筈だがと落ち込んでいると…」

「おい、さつさと運べ…見つかるはずいぞ。」

「わかってるから、急かすなよ。」

「不幸はいつも向こうからやってくる…とりあえず、父と兄に秘密基地にて事件発生とのメールを送った。
後は…」

「このビルはもはや、俺の庭だ…ある程度はいける…筈。」

「相手は人間…守る御神に敵は無しっ！」

「とりあえず、聖祥男子有志による外道トラップ8号をかますぜ！」

「く、放しなさいっ…！」

「放してっ…！」

「くく、やはり、抵抗されるといいねえ…雰囲気が出て来るねえ…」

「全くだ…これなら【コレ】も使う必要もなさそうだ。」

背の高い男の手には危険な雰囲気をする箱：【ガイアメモリ】が握れていた。

ガイアメモリには大文字で【T】と刻印されている。

「さて、今からコイツで、君らの保護者に脅迫テープ作るから、おじさん…協力して欲しいなあ…」

「断るわっ！！ 誰がアンタ達みたいなガスにつ「調子に乗ってんじゃねえ！！」「きゃ！」

「てめえらはそのガスに捕まったっていう意味がわかってんのか？」

「そうだ…最悪、後戻りっ！ いてえ！」

「なんだ、これ？…焼鳥の串…だと…何処からっ？！」

アリスの髪を掴もうとした片割れの男の手に串が突き刺さる…ホントは串に着いた油含ませたタコ糸を引っ掛けるだけのつもりだったのに…因果応報だな。

ロリペドは所詮、淘汰される存在なのさ…

「く、此処は危険だっ！ 場所を変えるぞ！」

「駄目だ…扉があかねえ？！」

「な、ガキ達もいねえだと？！」

此処は男の…俺達の庭だ。

自重を知らない子供はとにかく、忍者屋敷よろしくなんでも仕込んだ…

例えば、天井を一部ぶち抜いて隠し出口にしたりとか

「く、完全に閉じ込められたのか…一体何者だ…」

「どうする、コイツを使えば助かるかも…」

「そうだっ！ そいつを貸せっ！」

「ほら、気をつけるよ…」

誰も…誰も気がつかなかったが、手渡した男の顔は愉快そうに歪んでいた…

【T r e x】

メモリから出たガイアウィスパーが部屋中に響き渡り、男は怪物にと変化する…【ティーレックス・ドーパント】へと…

『ウウオオオオオオ！！！！』

「なにっ?! この声っ！」

「怖い…」

「六十八計…逃げるに如かず！」

怖がる二人を担いで、走り出す…ガイアメモリがない自分では暴走しているドーパントには無力なのを痛感し、雄理は走り出した。

「雄理っ！」

「恭兄…二人を頼むよ。」

「…行くのか？」

「師匠がまだ、ホテルにいるっていうから…それに、守る御神は最強なんだろ？」

「確かに…せめて、こいつを持っていけ…力にはなるはずだ。」

「これ…飛針と鋼糸？」

「ないよりましだろう？ トランプだらけとはいえ、いずれはタイマンを張らなければならぬだろうしな…」

「有り難く、借りてくよー！」

「無茶するなっ！」

俺はの戦場に向かう…兄が二人を抱えて行ったから大丈夫だろう…

『グウオオオオオオ！！』

「やっぱり…泣いてるようにしか聞こえないな…く、大人しくしてくれ！俺はアンタの敵じゃない！」

先程から頭が死ぬほど痛い…このドーパントが出現した時からずつとそうだ。

まるで、コイツを助けると言わんばかりに…

『ガイガアアア！』

やはり、爆弾持ちとはいえ…兄のほう良かったかもしれない。しかし、自分は出来ると断言したのだ。今更、弱音など吐いてられないっ！！

『グオオオオオオ！！』

「く、うわあ?!」

ティーレックス・ドーパントの出した衝撃波により、体が吹き飛ばされるっ！

「おっと、よく頑張ったな…雄理。」

「し、師匠お…」

涙が出そうになる…かつこよすぎるよ…師匠

「さて、ビルの中で決着を付けないと危険だな…あまり使いなくなかったが…」

【SKULL】

「変身…」

【Skull】

ガイアウイスパーが処刑者の名を語ると辺りに重低音が響き、男性の体を燻し銀の鎧が覆う…

『さあ、

おまえの罪を数えろ…』

『グウオオオオオオ…』

おやつさんとドーパントが戦っていた…俺は、ただ、見ていることしか出来なかった。

『ガイガアアア!!』

『ほう…周りの金属で大きな体を作ったか…』

ティーレックス・ドーパントは頭だけしかなかったが、廃ビルの残骸を取り込むことで、正しく、恐竜のような姿になる。

『だが、これで終わりだ…』

【Skull Maximum Drive】

『スカル…フルバースト』

『グウオオオオオオ…ン』

師匠の持つ銃から放たれた5つの黒い光弾がティーレックス・ドーパントの偽りの体を貫き、メモリを破壊した…

「後は、警察の仕事か…しかし、派手にやっちまったな。」

「師匠…俺…」

「ふっ、半人前の割によくやったじゃねえか…偉いぞ。」

「え?」

「いくら自分の陣地とはいえ、普通なら諦めそうな状況下をよくあそこまで扱いこなしたな…やはり、士郎に預けたのは正解だったか…」

「し、師匠お…」

「しかし、まだまだ帽子は似合わないな…精進しろよ。」

「はいっ!」

「じゃなあな、早く帰らないと娘にどやされる。」

「さようならっ!」

「ああ…」

師匠はそういって、愛車の黒いバイクに乗って去っていった…

「さして、なんでまた君が此処にいるかわかるかな？」

「【偶然】、ビルの半壊事故に巻き込まれたからです…ジンさん。」

広いデコがトレードマークの若い刑事で名前は【刃野 幹夫】
少年課にいる若手の期待の人物で周りの人望も多い。

師匠が【後、十年位で燻し銀の男になれるだろう】といわしめた人物であり、よく事故や、ドーパント事件に会う俺の担当のような人だ。

「今月だけで、交通事故が3回、転落事故が1回、未確認体事件が今回含めてなんと2回…お祓いに行くべきだと僕は思うなあ。」

「知り合いの神社で、一度しましたが…不安になってきました…」

このように、事件現場の事情聴取をとるのだ。

未確認体とは警察側のドーパントの呼称で警察も手を焼いているのだ。

故に師匠は、倒した後のドーパントの後処理を警察に丸投げし、かわりにそれなりの情報を師匠に流すのだ。

「保護者の方が迎えに来たから、ここまでにしよう。未確認体を見かけたらいつもみたいにメールをしてくれよ。」

「助かります、ジンさん。」

「もうこない事を祈るよ…怪我に気をつけた前。」

「次会う時は、普通がいいですね。」

因みにどうでもいいが、未確認体四号はファング・ドーパント」と俺だったりする。

未確認体一号は、師匠のスカルだ。

「大体、合っている次回予告」

「はじめまして、プレシア・テストロツサ…フェイトの祖母よ。」

「俺は…それでも、守りたい物があるんだ…」

「ユウリ…私、迷わない。」

「これから、ガイドライバー2Gの実験をするわ…ユウリ、フェイト、準備はいい？」

「「変身っ!!!」」

次回、【落下するFノ戦いは始まる】

これで決まりだ…

第三話 巡り会うW/心の行方(後書き)

結局、変身出来なかった…

次回こそは、次回こそはっ！！

前話に引き続き、おやつさんの登場。素手でも強いみたいなので、暴走体ならスカル使えば瞬殺ではないかと思う…

雄理も変身出来ないなりに頑張った…秘密基地は倒壊したけど。

飛針や鋼糸で拘束したり善戦したからいいだろう…

串トラップは、射出 糸をばらまく 火を付ける 閉じこめる、どの道鬼畜コンボでした。むしろ、その後に自重を忘れたトラップが続くから運が良かったかもしれない…ズルズルトラップとか

どうでもいいが未確認体リスト

未確認体一号…スカル(おやつさん)

未確認体二号…???

未確認体三号…マグマ

未確認体四号…ファング(雄理)

未確認体五号…ティーレックス(誘拐犯)

今のうちにA'sやS'tsに向け、伏線ばらまくよっ！！

無印はドーパントはあまりでない予定。

基本、雄理は転生者以前の問題で人外です…全てはビギンズナイトでわかる。

第四話 落下するFノ戦いは始まる（前書き）

ここから原作時期に突入…

第四話 落下するFノ戦いは始まる

緑の民族衣装を纏う金髪の少年が、赤い球を持ち、魔法なような力で化け物と戦っていた…しかし、戦いに敗れた少年が助けを求めていた…

「まさしく、妄想乙、なゆめなの…」

ヒロイン願望でもあるのかと軽く落ち込んだが、今日は、日曜日…隣人の祖母がやってくると軽く祭気分のなのは夢を軽くスルーした。

第五話 【落下するFノ戦いは始まる】

フェイトが転入試験に無事合格し、学校生活に慣れだした春の寒空の下、プレシアさんの容態が安定したので、本格的にこちらで治療をするためにこちらに来るそうだ。

「おはよー、フェイトちゃん」

「おはよう、なのは。おばあちゃんは正午くらいに着くんだった」

なのはは、新しい親友の祖母に会うのを楽しみし、フェイトは、久しぶりに会う祖母を今か今かと待っていた…

そんな俺も、楽しみだったりする…俺の【体質】に対して、いち早く気付き、俺個人に、メールをいきなり送ってくるものだから焦

った…

アリシアさんは、プレシアさんの指示に従い、ガイドドライバー2G…ダブルドライバーを俺用に調整していた。

プレシアさんいわく、【あんたは、私の闇の一端よ…】だそうだ。意味不明だが、危険のは間違い無いだろう…

プレシアさんが来る次の日にダブルドライバーと俺のコネクション実験をするそうで、俺の保護者兩名には既に許可を取ってであると聞いた時は、さすがに戦慄した…

「早く来ないかなあ…おばあちゃん」

「楽しみだねえ…」

待ちぼうけをくらう二人に中々、癒されたのは内緒だ…

「はじめまして、フェイトの祖母でアリシアの母のプレシア・テストロツサよ。」

簡素だが、実にわかりやすい挨拶をしたのは、プレシア・テストロツサ（年齢：検閲に削除されました…）は、その年齢を感じさせない笑顔をみせた。

この人、ホントに病人？

「はじめまして、高町 雄理といます。よろしく。」

「はじめまして、高町　なのはといたします!」

「あら、はじめまして。よろしくね、なのはちゃん。貴方の噂は聞いているわ…奥で話をしましょうか。積もる話もあるから…」

「かまいません。」

「なのは、歓迎会のケーキを作りましたよ。」

「はい」

「なのはにはまだ少し早い…真実とはいつも良いものとは限らないから…」

「テストロツサ宅地下室は、魔導的研究・実験の為に地下室がある。ここは、そんな中の一室。」

「本題から入るわ…貴方はある計画において、要になる存在だったわ。」

「ある…計画?」

「そう…【プロジェクト・G】。ガイアメモリを完全に扱い切れる存在を作り出す計画…」

「俺が要?　こんなただのガキが?」

「そうよ、貴方はガイアメモリを【受け入れる力】が極めて高い事がこの第97管理外世界にて記録されたそうよ…まあ、受け入れるだけで制御出来るかはわからないけど。」

「ちよ、ちよっと待ってくれっ！　なんで、あんたがそんな事を知っているっ！」

「簡単よ、私も関わっていたからよ…かなり初期だけ、ガイアメモリの悪性影響を減らすガイアドライバーの開発を担当していたわ。もともと、プロトタイプが完成したら御払い箱で、しかも、ドーパント事件を追っていた管理局員の旦那は殺されたわ…私の作ったプロトドライバーによってね。しかも、同じく管理局員の娘の旦那もよ…」

私はただ夫の、そして娘の旦那の仇をとりたいたいだけ…貴方は力が欲しい、私は仇をとりたい。利害は一致するはずよ…」

「確かに、力は欲しい…だけどさ、俺は誰か泣いているのにそれを黙って見過ごせ無いだだけだ。それが、あんたであっても一緒だよ…」

「貴方…ホントに八歳児？」

「話が逸れたな、その【受け入れる力】とやらを教えてくれよ。」

転生した故に、ついつい精神年齢が高いから、子供らしくない覚悟が出来てしまう、高町家に来て、御神流門下生になってからは直の事だ…半人前だから逃げるときは逃げるけど。

「そ、そうね、それについてがまだだったわねっ？！」

簡単に言えば、『全てのガイアメモリに適合する事』の出来る力よ。」

「全ての…ガイアメモリ？」

「そう、ガイアメモリは本来、相性によって適合する者で無いと力の行使すら出来ない、欠陥だらけの代物よ…だけど、人の手によって作られた【コピーメモリ】はこれに該当はしないけど、代わりに【力の暴走】を引き起こすのだけだね。」

「大体わかったけど、暴走はコピーメモリだけなのか…ファングを使った時に本能的な戦いになってしまっただけ。」

「それは貴方特有の症状ね…普通ならオリジナルメモリは適合者以外扱える物じゃないのよ？ 最も、ファングメモリは原始的概念故に本能が活性化しているようだけどね…トリガーメモリなんかは比較的近代的概念だから威力以外は制御はしやすと思うわ。」

「そいつは楽しみだ…」

明日は、ドライバーの実験だ。

『二人とも、準備はいい？』

「大丈夫だよ、おばあちゃん。」

「同じく…だけど、なんでフェイトもいるだよ。」

「え？ 私が居ちゃダメなの、ユウリ？」

「そうじゃなくて、これって、ダブルドライバーの実験なんだろう？
フェイトがいたら危ないんじゃない？」

『大丈夫よ、フェイトはダブルドライバーの昨日の一つの【コアシンクロ機能】による貴方の変身のサポートを担当して貰うわ。』

「コア…シンクロ？」

「それについては、私が説明するね。コアシンクロ機能っていうのは、魔導士のリンカーコアをダブルドライバーで波長をシンクロさせて、意識をシンクロさせる機能なの。」

「それって、どんなメリットがあるんだよ…危険性がブンブンするんだが。」

『貴方は、確かにファンゲメモリに関しては、ギリギリ使えたみたいだけど、これから使うメモリ達は皆、魔導士としてのスキルを求められる物ばかり…だからフェイトは、魔導士として未熟な貴方をサポートするいわばパートナーみたいな感じよ。』

「その…よろしくね、ユウリ。」

赤面するじゃありませんフェイトさん…勘違いしそうだろうがっ！

「あ、ああ。よろしくな、フェイト…っ?!」

なんだ…この馬鹿でかい力…

『海鳴の病院にて未確認の大型魔力反応を感知っ！ ユウリ、ぶっつけになるけど初陣よっ！』

「わかった…フェイトは？」

「コアシンクロはどんなに離れていても平気だから此処にいるね。」

シンクロ中はサポート側は無防備になっちゃうから。

変身する時は、ドライバーを装着して、パートナー設定を私に合わせる。くれれば大丈夫だから。」

「了解、急いで行ってくるっ！」

「気をつけてねっ！」

『（これは、曾孫も拝めそうね…）』

私は今、不思議な声に導かれて動物病院に来ています。プレシアさんの歓迎会の次の日、アリサちゃんとずかずかちゃんと遊びに行ったのですが、その時、怪我をしたフェレットさん見つけて、みんなで慌てて近くの動物病院に運びました。

帰った後に、ユウくんは、フェイトちゃんの家泊まる事をお母さんから聞いたのですが、その時のお母さんの顔はちょっぴり怖かったです…

現実逃避はやめよう…だって…

「ヴウオオオオン!!」

「君っ！ 早く逃げてっ！」

フェレットさんと黒い検閲さんに削除されちゃいそうな化け物と戦ってるって誰と話しているの私はあゝ?!

「とにかく、フェレットさんっ！ 逃げるよっ！」

私は、ユウくんが万能を豪語せる、【逃げる】を選択しました。

「き、君、置いていかないでえ〜」

うるさいの、今は生き残りを優先するの。

「はあ…はあ…、くそっ！ 町を盛大に破壊しやがってっ!!」

病院に行く途中の道は、散々なものだった…電柱は折れ、アスファルトはえぐれていた…

《魔力反応の移動を確認、公園のほうだよっ!》

《了解っ!》

簡単な魔法は教わったので、念話は使える。 マルチタスク 複合思考はまだ、二つしかまともにリソースが使えないのが痛い…

「《見つけたって、なんだありゃ?》」

《多分、何かの魔法生物だと思う…サイクロンを使うから、ユウリはジョーカーをお願い。》

《わかった。》

ダブルドライバーを装着し、フェイトを強く意識する…

《いくよっ!》

《ああっ!》

【Cyclonic】

【Joker!】

《《変身っ!》》

【Cyclonic!】

【Joker!】

風と切り札の二重奏が森に響き渡る…あまりの超展開になのは付いていけないっ!

『さあ、お前の罪を数えろっ!』

変身した雄理の姿はまるでコスプレであった…頭にW字の飾りが付き、服装は、肩が若干膨らんだ感じの聖祥女子制服をW風にした

奴、下はこれまた左右非対象の色の長ズボンであった…

「ユウくんが変身するし、何がなんだがさっぱりなのー。私、こんな聞いてないのーっ!」

戦士と少女の叫びが深夜の森にこだまする。

大体合ってる次回予告

「お前は何者だっ!」

「こっちの台詞だ、このエロオコジョっ!」

「はっきり言って、貴方、無謀を通り越してただの道化よ…!」

「私は…それでも誰かを助けたい!」

【SetUp】

「全く…こんな筈じゃない事ばかりだ…!」

次回、【交差するU／彼の戦う理由】

これで…決まりだ…

第四話 落下するF／戦いは始まる（後書き）

ジュエルシードが落下する運命とパートナーのフェイトのFをかけてました。

今後こんな洒落が続くかも…

雄理は兄のエロゲ主人公気質を軽く受け継いでます。

ちなみにW原作とメモリの設定は変わります…じゃないと雄理が強すぎる。

ディケイドとかどうしよう…このライダー出してほしいとかリクエストあつたら言ってください。

善処します。

はたして、雄理の運命はいかに…

第五話 交差するU／彼が戦う理由（前書き）

怒涛の更新…いっちょ、気張っていくぜ！

第五話 交差するU / 彼が戦う理由

「くらえっ!」

「グギョヨー!?!」

ファングを使った時ほどじゃないが…このレベルの相手なら問題無いっ!

《ユウリ…相手、ドンドン再生してるっ!》

《問題無い…予想通りだ…》

相手は、非固体タイプで丸でカメラのようだ…節操無く再生するとあなるのは自明の理だ…確か、ガイアメモリにもあんなのがあったはず

「君は、一体…」

「く、触手がうざいつ!」

「無視するなっ!」

フェイトが今のところ制御している風が敵を切り裂いていく。当面の目標は、マルチタスクを使い、一人でダブルドライバーを使いこなすことだが…先程から、なんか五月蝍い小動物がいるが気にしない…胴長の小動物はエロい奴だと相場が決まっている…なのはを襲うあいつも小動物が関係している筈だっ!!

《ユウリ…そうなの?》

《ああ、大体合ってる筈…それより、何か良い方法は無いか…埒が
あかない。》

《おばあちゃんに聞いてみる……え、そうなの?……わかった。

Maximum-Driveで核になっている物に鎮静化の魔法
を叩き込めるって!》

《わかった、助かるっ!》

「くらえっ! 【徹】っ!!」

衝撃を表面ではなく、内部に直接響かせる技…【徹】^{とあし}
俺はまだ、衝撃を伝え切れないのが否めない…所詮、半人前か…精
進せねば。

《動きが止まったよっ!》

《よし、決めるぞっ!》

【Joker Maximum-Drive】

風が敵を包み込み、動きを封じる…そのまま、俺は風で天高く舞い

《《ジョーカーエクストリームっ!》》

暴走した化け物に力を叩き込むっ!!

「グオオオオオオン…」

化け物はそのまま、徐々に小さくなっていき、最後には小さな青い石になってしまった。

「こいつがあれの原因か…意外としよっぱいな…」

「それを…それを返してくださいっ！」

「ん？」

翠の光を微妙に立ち上らせたオコジヨもどきがいた…いまいち、頭の回らない奴らしい。

「積もる話もしたいが…なのは、逃げるぞっ！」

「ま、待ってよっ！」

遠くからサイレンの音が聞こえる…事故ならともかく、深夜徘徊で補導とか洒落にならない。俺はなのはを担いで走りだした…オコジヨ？俺が首持って走ってただけど？

「おかえり、ユウリ。」

「ただいま、件の関係者を連れて来たよ。」

「お、お邪魔します。」

そういつて俺は、オコジヨもどきの首を持ったまま、フエイトに見せる。

「く、首…首があ…」

「ああ、済まない。 胴長小動物を持つときの癖がつい。」

「フェレットさん…大丈夫？」

「はい、大丈夫だよ…君は優しいね。」

「おい、淫獣…うちの可愛い未っ子に何気安く接してやがる…」

「…ひっ?!」

辺りの空気がズドンと重くなる…俺の殺気と気付く頃にはなのは目を回していた…

「済まないなのは…大丈夫か…」

「そんな事より…ユウくん、なのはに隠し事とか酷いの…謝罪を請求するのっ!」

「う、まずはすまない…話に関しては父さんの了承があるんだ…すまない。」

「むっ…みんなひどいの…」

そのまま、プンスカとしたまま高町宅へとなのは帰っていた…
ごめん、この世界はなのはが思う以上に優しくないんだ。

「あの…そろそろいいかな？」

「ああ、構わないぞ淫獣…キリキリ何があつたかを吐け。」

「何があつたの…淫獣くん？」

「ぼ、僕はユーノ・スクライアだっ！」

「ユーノ…スクライア？」

「スクライアと言つたら、希代の盗掘集団じゃない…何？ 抗争に
巻き込まれた口？」

そういつて現れたのは、猫リニスを連れ添つたプレシアさんだっ
た…ん、盗掘？

「盗掘とは失礼なっ！ 僕らの立派な知的好奇心に基づく【発
掘】だっ！」

「騒がないでくれる？ 近所迷惑だし、弱く見えるわよ…坊や。
そうやって反論する奴ほど、えげつない事をやるのよね…無関係な
人間を巻き込むような無差別念話とか…ね。」

「くっ…」

うあ…流石プレシアさん。

その言葉に痺れる、憧れる…これだけ言えたら人生楽しいよなあ

「そんな事より、彼のあの力は何なんですか…見たことの無い魔法陣が発生していたけど…」

「あら、無謀で無鉄砲なスクワイアの割に着眼点はいいわね。あれは、ガイアメモリを応用した新エネルギー開発の延長よ…と、いつでも、脳みそまでカビたスクライアに言ってもわからないか…雄理、貴方、あれの仕様は大体頭に入っているわね？」

「ああ、自分が使うものだからな…当然だろ。」

「よろしい、ならその淫獣に説明お願い。フェイト、一緒に寝ましようか…アリシアもそろそろ帰ってくるから今日は川の字になって寝ましよう。あ、雄理もいるから後に一本多いか…」

「ああ、説明任された…体に触るから寝てくれ…しばらく、大人しくしたら治りそうなんだろう？」

「気使いありがとう…貴方、婿に来なさいよ…」

相変わらず、ぶっ飛んだ人だ…俺が誰かと結婚？ 恭兄のシスコンが収まる位ありえない…高町家全般に言えた話だけど

「意味わからん…さて、ユーノ・スクライア、着いてこい…後はうちの道場で話そう。」

「わかった…」

「つまり、二つのガイアメモリを使い、共鳴させて力を増幅させていたのか…だから、ジュエルシードも大人しく…ありえない、二つのガイアメモリを同時に行使するなんて。」

「そつだ、本来ガイアメモリは二本同時には使えない…しかし、俺の体質のせいで今の所、扱えているのが現状だ。これ以上は詳しく話せない…人の口に戸は立てられないからな。」

「む、君は僕がポンポンと人に他人の秘密を暴露すると思うのかい？」

こいつはまだ、自分の過ちと愚かさかわからないようだな…

「知的好奇心（笑）か？ やめておけ…ガイアメモリは人には過ぎた代物だ…」

「お前だつて人間だろうつ！ お前どうなんだよつ！」

「俺が人間？…笑わせる、本当に鈍いんだな、おまえ。」

「何が言いたいつ！ どう見ても人間だろうが！」

目で見えるものしか信じられんとは…本当にコイツ、スクライアの者なのか？

プレシアさんから聞いていたから期待していたのに…残念だ

「これを見ても同じ事が言えるか？ ファングっ！」

『いいだろっ』

【F a n g】

「変身…」

【F a n g】

激昂するユーノの頭を冷ますような光景が広がる…白い光が雄理を包み、

先ほどまで少年だった者は、白い悪魔のような姿になっていた

動揺した様子で俺を見上げる…当たり前だ、姿が変わりすぎているからな…

「何だよ…その姿…」

『沼に住む者…フェンリルをベースにファングのメモリでドーパント化した姿だ…』

その姿は、白銀の狼…純白の鬣を伸ばし、爪は鋭く触れただけで対象を切り裂くだろう…

ガイアメモリの制御を覚えて、本能的だった変化は、効率的かつ凶悪化した姿はまさしく神々の時代に黄昏を導いた獣のようだ

「君は…何者なんだ…」

『…それは、俺にもわからない…力自体は本能的に扱っていたし…ファングはだんまりだ…』

俺は変化を解き、姿勢を正し、真剣な表情で言う

「お前が知っている事を、全て吐けとは言わない。だが、この宝石については教えてくれ…」

「正直、踏み込んだら即、八つ裂かれかねない状況なのもわかった…でも、僕は…」

「一つ…聞いていいか？」

理解出来ない様子で雄理がたずねる

「え？ 何を？」

「なんで、そんな煮え切らないんだよ…まるで何かを受け入れられないみたい…」

「それは…」

「話せないならいい…やる気が無いなら失せろ…後で布団持って来るから…今日はここで寝ろ」

「…」

悔しそうな面持ちのユーノを置いて、雄理は布団を取りに行く…どこか冷めた表情をしながら。

「へ〜、じゃあ、ユーノくんって違う世界から来たの？」

「そういう事になるかな？」

初変身から特に何が…あつたか…

サッカー部の友人が不幸な俺に幸せがあるようにってジュエルシードをよこした…

ジュエルシードという名前は、プレシアさんのコネで調べてわかった名前だ。

あのオコジヨもどきは煮え切らない態度を崩さず、業を煮やしたプレシアさんがスクライアの友人に頼んで、仲間の元に戻る予定だ。

「僕の世界では、魔法と言う技術があるんだ…えっと、こんな感じだね。」

オコジヨもどきの掌に翠色の光球が出て来る。 中々、綺麗だ

「わあ、キレイ」

「私も出来るよ…ほら。」

フェイトの掌にも金色のような光球が生まれる…金色だよな？

「ユウくんは出来ないの？」

「残念ながら、俺は放出が致命的に駄目なんだ…圧縮は出来るのに…なんでだよ。」

何故か、俺は魔カスフィアを作れない…プレシアさんいわく、魔力放出がしづらいコアで、ダブルドライバーのようなガイアメモリ

を扱う物なら平気らしいが…納得出来るが感情が拒否している

「いいなあ…私も使ってみたいな…魔法」

「なのはも魔力とか問題無いんだけど…魔法少女とか想像してるなら余りオススメしないな…」

「ふえ？　なんで？」

「だって…ほら…」

神妙な面持ちで、フェイトがバルディッシュに保存してある映像を再生する…

「これは…ちょっとヤバイの…でもこれはこれで…」
再生された映像には、碧の髪の少女が極太レーザーのような魔力砲をぶっ放している様子が流れていた

「凄いな…そんな事より、フェイトちゃんの持つてる五角形の板は何？」

立体映像が流れる元になる板：バルディッシュを指差してなのはが質問する…なんで、そんな小動物的可愛さが残っているのだろうか…

「これは、デバイスって言って、魔導士の杖みたいなものなんだ。この子はバルディッシュって名前で、インテリジェンスデバイスっていうAIを積んだ私の大切な味方だよ。」

どこか、嬉しそうにフェイトは答える。　自分の相棒を紹介出来

て嬉しいのだろう

「じゃあ、今からバルディッシュをデバイスモードにするね…バルディッシュっ！」

【Yes Sir】

「バルディッシュ、セットアップっ！」

【Standby Ready Setup】

平淡な声が響き、フェイトを球状の金色の膜が覆い隠し、出て来たフェイトの姿は黒いレオタードだった

「フェイトちゃん凄い、いいあ〜」

ちょっと、照れた様子のフェイトが嬉しそうにしている。こちらをチラチラ見るのは野郎共の視線に慣れていないからだろう…頑張れ

「よければ、僕の持つてるやつで良いなら貸すよ？」

ユーノが首にかけていた紅玉をなのはに渡す

「これがそうなの？」

「そう、レイジングハートっていうらしいけど…コイツ、魔力燃費良くないから僕は上手く使えないんだ…貰い物だったけど貸すだけならいいよ。」

「本当っ！ じゃあ…えっと、どうしたらいいんだろ？」

「確か、起動パスワード【Standby Ready】ええ?!」

「ふえ?! きゃっ!」

「なのはっ!」

俺が踏み込んだ時には、なのはは桃色の膜に覆われていた…出て…来た…

「何だよ…その姿…」

そこにいたのは、聖祥女子の制服の上のをへそ出しにし、黒いアンダーシャツで隠しているって俺のパクリかい…それから、頭はツインテールがサイドポニーになり、星型の飾りが根本を飾っている…スカートは、無難に白のフレアスカートで全体的に言うと、白い魔法少女だった…なんでさ？

【いや、やつと十分な魔力を確保できました…このままじゃ魔力餓死寸前でしたよ…】

「えっと…まさか、レイジングハート…さん？」

【はい、私の名前はレイジングハート…祈願型魔力行使演算装置です。

さんはいませんよ、マスター】

「ま、マスターって私？」

【そうです、そのオコジヨもどきではまともに起動できずに、激しく退屈でした…しかし、起動出来る今、マスターは貴女で、私は全力で貴女を守る義務があります。あ、兄上殿もよろしくお願いします。】

「あ、ああ…よろしく…」

ようやく出番だからかテンションが高めなレイジングハート…ユニノを含め、皆ドン引きである。

そんな、ほんわかしそうでしない空気の時…

「…っ?!」

「どづしたの…ユウくん?」

「腹…痛てえ…トイレ行ってくるっ!」

「ちょ、ちよっとお?!」

俺は走り出した…ジュエルシードの気配はしないが、メモリの気配はする…俺が行かねば誰が行くっ!

長身の男が、神社で座り込んでいた…掌に三つの石を転がしながら

「目的の物は、必要量手に入った…後は帰るだけなんだが…」

「見つけたぞっ! いつかの誘拐犯っ!」

「やはり…君は、雄理君は鋭いなあ…なんでわかつたんだい？」

「お前、なんで俺の名前…まあ、いいか。あんた…ガイアメモリを持ってるだろ？」

いくら、あんたが気配を断つても、その概念の塊は、あからさまにわかるんだよ…」

「それでも、それは専用の設備が必要な筈だけど…おっと、こんな時間か…依頼人にどやされてしまう。

久しぶりに遊ばせて貰ったし…運命の子にも会えたし、今回はこれで手打ちかなっ！」

男の手にしている石を神社の石段の前に向かって放る…

「それでは、アデユ〜」

「おい待てっ！」

男は、赤色の魔法陣の中に消えていく…その口の微笑を見せながら俺がその様子にほづけていると…

「きゃあっ?!」

「な、しまった！」

ちょうど、散歩コースに重なったのだろうか…気絶している女性の側にいる怪物…多分犬だろうが

「めっちゃ、こっち見てる…しゃあねえ」

【Cyclone!】 【Joker!】

「変身っ!」

【Cyclone!】 【Joker!】

風と切り札の二重奏が神社に響き渡る…風と黒い膜から出た姿は左右非対象の色の髪の毛にWの飾り、非対象の色のへそ出し服にその下は黒いぴっちりとしたアンダーシャツ、

下は同じく非対象のハーフパンツであり両手足は軽いが鎧のような装甲が覆う…これが、魔導士Wの姿であり。

所詮シヨタだ…需要のある姿はするさ…（作者談）

「く、やっぱり辛い…一人は辛いな…」

プレシアさんは、大丈夫だろうと言ったが、やはりまだ辛い…風によるサポートは使えないだろう

「グオオ!!」

「く、固え…実体があるところも違うのか…」

化け物犬は、素早い動きで俺を翻弄し…反撃の隙を与えない

「ガアアッ!」

「アクセル…シューターっ!」

「ぎゅ、ぎゅん」

「可愛い声を出しても無駄なの…見た目が怖いからっ！」

桃色の閃光が、化け物を吹き飛ばし、誰かが俺の前に来る…

「な、なのは…なんでっ?!」

「助けに来たよ、ユウくん…みんな、ユウくんの事みんなお父さんに聞いたよ…ごめんね、今まで、守ってくれていたんだよね？」

「うるせえ…そんな事より、オコジヨもどき…なんでてめえがいる。」

「感動な場面だいなしなのぉ!!」

黒い斧…バルディッシュを持ったレオタード姿のフェイトに慰められてるなのはいるが…気にしない

「僕は…ただ…」

「覚悟は固まったか？ 部屋の隅でガタガタ震えず、戦う覚悟はできたのか？」

「当たり前だっ！ あれは…僕が見つけた物だ…僕が責任を持って戦う義務と責任があるんだっ!!」

「よろしい…なら、悪魔と相乗りする覚悟もあるか？」

「…え？」

ダブルドライバーから、メモリを引き抜き、変身を解除した俺はサイクロンをユーノに渡す

「そこまで、覚悟が決まったら、最後まで突き抜けてみないか…相棒？」

「相棒…いいね、気に入ったっ！」

【Cyclone】

【Joker】

「変身っ！」「」

【Cyclone!】【Joker!】

風と切り札の二重奏が再び神社に響き渡る…現れた姿が大して変わらないが、ただ一つ変わったのは、右目の色がユーノのようになった事か

「さあ、お前の罪を数えろっ！」「」

俺は、俺達は敵に向けて走り出す…

おまけ…うそ、続き

「ねえ、レイジングハート…私、空気なの…空気読まないで入り込

めないの…」

【兄上殿が主人公をやっているので無理ですよ…オコジヨもどきと友情が芽生えて二人で変身とか王道過ぎますよ…】

「くう」

「あ、くうちゃん…ユーノくんを引きずって来たんだね、偉い偉い」

「くうくん」

「あ、可愛い…なのは、触っても平気？」

「人見知りする子なんだけど…ユウくと仲良い人は普通に触らせて貰えるはず…ほらっ」

くうちゃん…久遠は綺麗な尻尾をフェイトの前でフリフリする…
やべえ作者だけど…もふ殺…され…た

「可愛い…可愛いよくうちゃんっ！」

【魔法少女には付き物の小動物ですか…あのオコジヨもどきが寝とられたからちょうどいいかも…】

ユーノと雄理が怪物と戦う中、後ろの方はすばらしい萌え空間が広がっていた…後悔しない…反省はするがね

「ジョーカー・エクストリームっ！」

「あ、終わったみたいだよ…なのは」

「本当だ…行こうっ！ フェイトちゃん」

「うんっ」

シリアスもへったくれも無いまま…戦うは終わった…戦いはいつも虚しいだけだ

大体合ってる次回予告

「くうちゃん可愛いよっ」

「久遠…おいで」

「くう〜Vv」

「ああ、ユウくんっ！ 狡いっ！」

「おやすみ…もう疲れた…」

「ねるなあ〜!!」

次回、【場所はP/俺達の聖戦】

「全く関係無いのーっ!」

「くうくスピスピ…」

「か、可愛い…」

その日、なのはは雄理と添い寝している久遠を眠くなるまで視
…観察していた

第五話 交差するU / 彼が戦う理由（後書き）

おかしい… 久遠を出したら、俺はもふ殺（もふもふした尻尾、体毛でもふもふするが、あまりの気持ち良さに対象の可愛さに鼻血を噴出し失血死してしまう事）していた… 何を話しているかわからないだろうが… 三次元だとか… モニター越しの恋人だとかそんなとは別問題だ…

もつと… もつと恐ろしい萌えを感じたぜ

冗談は置いといて、なんかそれっぽい敵が出ましたね…

【俺の妄・想・が・加・速・するっ！】

第六話 場所はP/俺達の聖戦(前書き)

後、二〜三話で無印は終了のお知らせ。

余り長いと飽きるし、なにより俺が飽きるし…その分空白期でやりたい放題やりそうだし…

後半はダチとプロットを組んでいるのでしっかりめになるよ。

ところで皆さん…リリなのメンバーでは誰と雄理がくっついて欲しいですか？

以下の数名からお決めください

もはやヒロインっ！

《フェイト・テスタロッサ》

妹…いいえ、義妹ですっ！

《高町 なのは》

雄理的にタイプ…だよ？

《月村 すすか》

ツンデレはステータス…

《アリサ・バニングス》

第一回は以上の四名でやりたいです。

特に意味なくね…？ あせるなよ…人気によっては、エンディングが変わるしよっだぜ？

じゃあ、本編スタートっ！

第六話 場所はP / 俺達の聖戦

雄理とユーノ…野郎二人でうなだなれた様子で眩しい光景を見守る

「なんで、俺達…こんな場所にいるんだらうなあ…」

「全くだよ…生活の事とか、考えなくても良くなって楽にはなったけど…野郎には、辛い環境には変わりないね…正直、雄理には尊敬しかないね…今は。」

俺達は、プールに来ていた…

季節は真夏になっていた…ジュエルシードは意外と大人しいようで、半年たつても21個ある内の約半数である11個しか確認出来ておらず、内二個は謎の男に持って行かれたままだ…

ユーノが言うには、船をいきなり攻撃されたようだ…犯人と特定はおるか、集団犯行か個人犯行さえわからない…ジンさんには、気をつけるようには言ったが…期待は出来ないだろう。

え？ それなのに何故、野郎二人だけが落ち込んでるのかだつて？ 何故なら…

「ユウくん、こつちおいでよあ！」

「流れるプール楽しいよー！」

アリサ、すずかを含めた女子組とプールに来ているからだ

第六話 場所はP / 俺達の聖戦

気まぐれで、付かなかつたりします。

「うるせえ、俺は125m遠泳で忙しいんだあっ！」

「おなじくうっ！」

このプールは恭兄がバイトをしているところで、ついだと団体割引券をくれた訳だが、俺達野郎二人は恭兄に鍛錬の為に遠泳させられているだ…回想終わりっ！

金パツンデレのアリサはつまんなそうにしながら

「つままないわねえ…雄理とユーノを弄って遊び倒そうと思ったのに…」

「アリサちゃん、流石に二人に悪いと思うよ…」

さすががそんなアリサにツッコミを入れる…なんだかんだで仲が良い二人だが、アリサはすずかを虐めてたようだ…が、なのはが激怒し、俺が本気で止めに入らなければ大惨事になっていただろう…俺今…遠泳…が、終…わり、死んでいる…

「でも…小学生に125mはきついと思うなあ…恭也ってば…夜も（検閲…作者が自主規制しました）」

忍さんは惚気てる…元引きこもりとは思えないテンションだ

「カユ…ウマ…」

ユーノは死にそうか…今来たらやばそうだなあ…でも、そんなt…

ズグンっ…?!

「キヤーっ！」

「何、あの怪物っ！」

「…不幸だっ！」

最悪だ…人前で変身とかありえん…とりあえず

「みんな、逃げろっ！」

みんなを逃がすために頑張ろう

恭兄や俺が非難誘導を頑張っている頃…なのは達は大変な事にな
っていた…

「なのはっ！ 早く逃げるわよっ！」

「ア、アリサちゃんっ?! そんな引っ張ったら…イタッ、痛いっ

?!」

「アリサちゃん…焦るのはいいけど、非難し終わる前になのはちゃん死んじゃう…」

「な、なのは…大丈夫?」

「うう、怪物にやられる前にアリサちゃんにやられるの…」

「あんたら、逃げる気あんの?!!」

漫才をしているアリサ達に怪物…海坊主みたいな奴の触手が迫る
っ!

「え? きゃっ!!」

「『アリサちゃん?!!』」

海坊主の触手にアリサが吊り上げられアリサは余裕が無くり…

「き、きゃあ~~~~っ?!!」

【S t a g e】

黒い影が水の触手を切り裂くっ!

「大丈夫か…アリサ?」

「う、うん…(ありがとう)(ボソッ」

「ユウくんっ！」

「なのはっ！ アリサ達を頼む…ユーノっ…！」

「全く…そいつは紳士ですら無いね…良いよ、雄理っ！」

雄理のユーノの二人は横に並び、ガイアメモリを構える…二人の腰には、ダブルドライバーが装着されている

【Cyclone】

【Joker】

「変身っ」

【Cyclone!】 【Joker!】

風と切り札の二重奏がプールサイドに響き渡る…気絶したユーノをまた久遠が連れていく…君、那美さんはどうしたの…？

「さあ、お前の罪を数えろっ！」

「何よ…その姿…」

「バルディッシュっ！」

【Yes Sir Standby Ready】

「セットアップっ！」

フェイトも金色の膜に包まれ、出て来たら黒のレオタードに包まれた姿を現す

「何がなんだか…もう…」

「アリサちゃん、逃げようっ!」

「でも、二人を置いて逃げるなんてっ!」

「よく、わからないけど…私達がいるだけでも、私達がいるだけで二人の邪魔になると思っうな…」

「う…」

「ああもう、二人共っ! 逃げないなら実力行使なのっ!」

【Set Up】

なのはを桃色の膜が覆い隠し、膜が割れるといかにも魔法少女な格好のなのが現れる

「な…なのはまで…」

「ほら、ささっさと逃げるよ!」

【Flyer Finn】

「ちょ、ちよっとっ?!!」

「なのはちゃんっ?!!」

「いつくよお〜…」

【Let's Go】

「うあ〜ああっ?!」「」

少女三人は空を舞う…絶叫をしながら

「く…やはり、サイクロンじゃ、大質量の水相手には無理か…」

《雄理…試したい事があるんだ…いいかい?》

「俺もフェイトも限界が近い…フェイトに至っては、スタミナが原因突破している…多少の無茶はやるぞっ!」

《じゃ、行くよっ!》

【Heat】

「へ?」

【Heat! Joker!】

情熱と切り札の二重奏が響き渡る…雄理のバリアジャケットの右側が焰のように朱く染まる…

「く…こいつは熱いな、一気に片付けるっ! フェイトっ!封印は

任せたっ！」

「任せてっ！」

【Joker Maximum-Drive】

「《ジョーカー・グレネイドっ！》」

雄理の右手は赤い炎を…左手は紫の炎を噴出し、天高く飛び出すっ！

「《これで、決まりだっ！》」

左右の拳を水の塊にぶつける…あまりの高熱に水のは水蒸気爆発を起こしたが、その余波でコアであるジュエルシードは露出する

「バルディッシュ…シーリングモードっ！」

【YesSir Change-CeilingMode】

バルディッシュは、普通の斧のような姿から、上限限界ギリギリモード…シーリングモードになる

「ジュエルシード…リアルX?…封印っ！」

【JewelSeed SerialX?…Ceiling】

バルディッシュから伸びる金色の光がジュエルシードを包み…封印する

「終わった…か」

《魔力反応もないね…お疲れ様》

「おう、フェイトもお疲れ様。」

「お疲れ様、ユウリ、ユーノ。」

「それにしても…早くもばれたな…覚悟していなかった訳ではないが。」

しかし、Heatはまだ早かったな…体がまだほてってる…」

「大丈夫…?」

《ごめん…》

「ああ、大丈夫だ…ユーノはあやまんなよ…ああしなければ、勝てなかったさ。」

フェイトは、不安そうな顔になり、考えを語り出す…

「それにしても…なんで、ジュエルシードがいきなり…」

「わからない…今度からは慎重に行こう。なのにも伝えないとな。」

「じゃあ、行こうっ」

ジョーカー・グレネイドのダメージが引いているのか、雄理は辛そうにいう…

「こいつ…幽霊みただっ！」

「君をロストログア不法使用の現行犯で逮捕するっ！」

「ふ、覚悟はあるか？」

次回、【現れるK/あいつは空気を読めない】

これで、決まりだっ！

第六話 場所はP / 俺達の聖戦（後書き）

新たな敵の予感：果たして、敵の正体はっ？！

まあ、感のいい人は解るか…

第七話 現れるK/あいつは空気を読めない(前書き)

最近、友人とプロットを考えるから、負荷が少なく、なおかつ、書いてる方も楽しいです。

第七話 現れるKノあいつは空気を読めない

ズモモモヤドドドドといった効果音が似合いそうな雰囲気でありサとすずかが笑いかける

「さて、説明をしてもらおうわよ…四人共」

「ちゃんと、説明してね…してくれなきゃ、やだよ？」

金色のケモノと紫の子悪魔がいる…金色のケモノに関しては出る作品を間違えていると思う…紫の小悪魔は、ごめん破壊力ありすぎ

現れるKノあいつは空気を読めない

「つまり、フェイトとユーノは異世界の人間で、雄理に至っては何物すら不明…と」

「大体、そんな感じ。あ、実験がてらにこれでも…」

【Stagg】

【Spider】

【Bat】

腕時計がスパイダーショックに、デジカメがバットショットに、携帯電話がスタックフォンになる…皆、ギジメモリで起動する…のだが、特に命令を与えた訳ではないので、皆、思い思いの行動をしている

皆で、その様子を観察していたら、遠くから爆音と共に何かが走ってくる！

「なにこれっ?! かわいいっ?!」

「忍っ! 落ち着けっ!」

メカオタクである忍姉がやってきた…何故わかった…

「さつきよ! ねえ、この子達は一体誰が…教えて、雄・理・くんっ」

拒否は認めないと肩を砕かんばかりに握り、キラキラと子供のような眼差しをぶつける…

「お姉ちゃん…肩、雄理くんの肩があ!」

「なによすずか…これほどの物を見て、私が興奮しないと思っ?」

「…なのは、フェイト、まあ大体わかったわ。」

「うっ…!」
「うっ…!」
「うっ…!」
「うっ…!」

「うっ…!」
「うっ…!」
「うっ…!」
「うっ…!」

「別にいいわ…話してくれば御の字だったし、なにより、二人の事が聞けただけいいわ。」

「ありがとうっ！」

「うっ…アリサぁ…」

「ちょ、二人共、泣きながらこっちくんなんっ！い…イヤア…?!?!?!
！鼻水つけんなっ！」

「雄理っ！さっさと答えなさいっ！」

「イヤア…?!?!?!」

「お姉ちゃん、雄理くん死んじやうよお…?!?!?!」

断末魔が月村宅に響く…そんな中、恭也は感じた…今日も平和である

「ふふふ、やはりこれくらい無いと憎きライダー共には対抗できないよなぁ」

男は、昔工場だった廃屋の中で鉄屑に青い石を二個放り込む…

「さあ、復活しろ…カメレオン男！人々の恐怖を吸い…暴走しろっ！そして、次元世界を破壊し、ライダー共を根絶やしにしろっ

「！」

「キーーーーッ！」

カメレオン男は闇夜を飛ぶ…

その先には、大きな建物、【私立聖祥大学付属小学校】があった…

「…神隠し？」

「そう、最近この学年の子も犠牲になったって噂だよ。雄理くん、聞いてなかったの？」

「ごめん、寝てた…」

「まったく、もう…」

朝のホームルームを終え、俺は珍しくすずかと話をしていた。普段はなのは達と話していることが多いのだが…

「それより、すずかと俺と話しているって、珍しくないか？」

「確かに…今日はなのはちゃんとアリサちゃんが、委員会で呼び出されていたから…」

「ああそうか…あいつら、図書委員だったけ？」

噂をすれば影、アリサとすずかが帰ってくる
なにやら、暗いが…

「どうした、おまえら…なんか、暗いぞ？」

「実はね、ユウくん…図書室の利用がしばらく禁止になったんだって…」

「…禁止？　なんで？」

「なんでも、図書室に遅くまで残っていた生徒が、『神隠し』にあっているからって…」

「むう…」

突如、雄理に電流が走るっ！？

「ユウくん…まさかっ?!」

「フェ、フェイト…不意打ちは、反則だ…電気は…マズイ」

「隙ありっ　詳しくは、家で話そうっ」

「…うん…」

コイツ…最近、大胆になってきたな…

しかし、学校に来てからの違和感は半端無いな。

『何か』かが確実にいるな…招かれざる客が…な

大学生ほどの男性二人組が、いかにも人相が悪い男の写真を持つて、聞き込みしていた…

「すみません、この男に見覚えはありませんか？」

「しらんなあ…ごめんな、おっちゃん…」

「お、おっちゃん…いや、ありがとう。」

「いえいえ、では…」

「君も帰り道に気をつけてくれ。」

車椅子の少女を見送った男の片割れが、見送った男に慌てた様子で近づく

「本郷っ！ 大変だっ！」

「どうした、一文字っ！」

気さくそうな男性…一文字は、聡明そうな男性…本郷に大変だとわかった事を慌てて伝える

「アイツの情報では

ないが、大変だっ！」

「何がわかった？」

「最近、聖祥小学校を中心に、子供を狙った神隠しがあるらしい…

手口もカメレオン男のそれに近い、もしかしたら…」

「聖祥小学校…まさか、敵の狙いはっ！」

「雄理が危ないっ！」

男達は、慌てた様子で駆け出す…敵の組織から助け出した少年を守る為に…

学校で神隠しが起こっている…なら、証言で犯人がいるだろう図書室に俺達…俺、なのは、フェイトは、集まっている。

「早速だが、話を整理しよう…」

怯え気味になのはが挙手をして、話始める

「確か、先生の話では、図書室を中心に、神隠しが起こっているみたいだよ。」

納得できないとフェイトは挙手し、なのはに質問する

「その証拠…なぜ、図書室が中心なのかわかったの？」

「そ、それは…」

「先生が…図書室に入って出てこないが発端らしい…まあ、証拠は他にもあったがな…」

「どっぴいっ事…?」

「…これは、バットショットで録っておいた写真だよ…ほら、これだ。」

写真には、本棚に付いたある跡が写っていた

「…これは?」

「こいつは、壁や本棚に付いた何らかの強い握力で握られた跡だ…指の並びからいって…ちょうど…そうだな、カメレオンのようなものだな。」

「ユウリ、こんな大きなカメレオンはいないと思うな…私。」

「いや…今居るだろう? ほら、ここに…」

「ふえっ?! 何処?どこっ?!」

【マスター、落ち着いて…】

雄理の一言で変わる空気…辺りは恐怖と戸惑いに包まれる

「さて、いい加減…茶番をするのは飽きたよ…」

【Luna Maximum Drive】

「照らせ…バットショットっ!」

「…っ?!」

幻想の記憶、【ルナメモリ】をバットショットに差し込むことでおこせる特別なマキシマムドライブにより、フェイト…の偽物は、その正体を表す

「いいくややああ〜?!?!」

なのはの絶叫が図書室に響く…既に、外のユーノにより、封時結界により、既に中に居る者達は、外に逃げられない…

「さあ、なのは…戦闘体勢になっておけ…生半可な敵じゃないぞ…」

フェイトだった者は、醜い…緑の肌を晒し、ギョロギョロとした大きな目で辺りを見渡す…【怪人カメレオン男】…才能豊かな子供をさらい、さらった子供達を怪人に改造しようという計画の中核を担っていた存在だ。

『よく、わかったなあ…坊主、流石は、運命の子と言われるだけはある。』

…こいつもか、こいつも俺をつ!

「掠った子供達を何処にやったつ!」

俺の反応が嬉しいのか、愉快そうに顔を歪ませてカメレオン男は答える

『簡単さ…図書室の司書室の冷蔵庫だ。私はお前に会いたいだけだからなあ…ああ、会いたかったよ…運命の子よ。』

「その名で俺を呼ぶなっ！ユーノっ！」

【Cyclone】

【Joker】

「《変身っ！》」

【Cyclone! Joker!】

風と切り札の旋律が重なり合う…

「《さあ、お前の罪を数えろっ！》」

ユーノから激しい怒りを感じる…カメレオン男の所業に同じ年の奴が被害にあってるからな…俺も憎い…俺を狙われていて、それで誰かが傷つくのが許せないっ?!

「俺に何のようだっ！」

『ふふ、何…少し話しをしたかっただけさ…』

「貴様…何のために皆をっ！」

『人間の振りをして、生きるのは楽しいか?』

「っ?!!」

何を言っている…こいつ、俺が人間じゃないだと?

『貴様は、その身に宿す【本棚への鍵】で大分苦労してるよなあ？』

【Divine Buster】

『じゃあっ?!』

若干、いらついた表情のなのはが、レイジングハートを突きつけながら語る…

「ごちゃごちゃ五月蠅いの…あなたの中のジュエルシードを寄越せば万事解決…それで、おしまいなの。」

「なのは…」

やばい、かつこいい…男前だな、女の子だけど…

【さすが、マスター…男前です。】

《うん、かつこよすぎだよ…うん》

『く、あと少しで、大きな隙ができそうだったのに…くそっ』

先ほどのデイバインバスターで結界に空いた穴から、カメレオン男が逃げていく

「まてっ?!」

校庭から外に出ようとしたカメレオン男を二つの影が捕らえるっ

!

「「ライダー…ダブルキックッ!!」」

『なにい?! グアアアアアア!!!!』』

マフラーを風になびかせ、二人の歴戦の戦士が爆煙の中から姿を現す…

『やれやれ、カメレオン男か…姿を消されたら危なかった…それより、大丈夫かつ?! 雄理っ!!』』

『んん? 何だ…その姿、コスプレか?』』

「え? 本郷さんに一文字さんっ!なんで、いるの?!」

「おじさん達、ちょっと、そこ退いてっ! レイジングハート…シリリングモードっ!」

【OkMaster CeilingMord Standby】

「シューーーーーーッ!」

「「うをっ!?!」」

桃色の閃光を仮面の男二人は飛び前転で避ける…伊達に長年戦ってきている事はある…

「これは…蒼い石?」

「凄まじい力を感じたが…破壊は逆に危険だな。」

俺は、久々の再会に喜んだ…仮面ライダー一号・二号、シヨツカ
―二人共により改造された人間…【改造人間】だ。
そして、俺の先輩でもあり、先生でもある。

「本郷さん、一文字さん！」

「久しぶりでーす！！」

「ああ、久しぶりだな。二人共、大きくなったな。」

「まあ、無事でよかったよ。」

俺達は、積もる話はなしを置いて、俺達の家へと帰っていった

・そのころのフェイトさん・

「ねえ、アルフ…皆、帰ってこないね。」

「そう、だねえ…（怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い…）」

部屋には、瘴気が満ちていた。

フェイトの偽者を発見した雄理により、フェイトは、今回戦力外通告されたのだ…

そのせいで、フェイトはとても機嫌がよろしくないのだ…

pr r . . . pr r

「はい、あ、ユウリ?!」

電話：スタッグフォンにかかってきたの相手は、雄理であった。

「え？ 封印できた？ 詳しく、話したいから家に来るんだね？
うん、わかった。待ってるね」

機嫌がマイナスからプラスに一気に傾いたフェイトは身だしなみを整えに洗面台に向かった…

「我ながら…現金な孫に育ったわね。」

「フェイトにとって、ユウリは王子様だから…あら、もうこんな時間。病院に戻らないと…」

「頑張るのもいいけど、ほどほどにしときなさい。フェイトも言わないだけで寂しがってわよ…」

「うん、だけどこれははじめでもあるの。それに、今知り合いが下半身不随の女の子抱えてて大変なの。しかも、魔導的症狀に近いの…ランクもまだ、フェイトとS-まであるのよ？ それなのに、常に、魔力エンプティの症状なんておかしい…」

「確かに、それより時間はいいの?」

「いけない?! じゃあ、行ってきます!」

「気をつけてね…」

バタン…

「常時、魔力エンプティね…まさか、ね…」

思い当たる事があるのか、研究室におもむくが…

「おばあちゃん！ 今からユウリが来るんだ。 後、お客さんも来るってっ！」

「あら、リニスはお茶の準備を、アルフは認識阻害の結界を張ってちょうだい。」

「わかりました。」「まかせなっ！」

「これは…忙しくなるわね。」

今から来る来客に思いをはせ…プレシアは準備をする

・大体合ってる次回予告・

「終わりは、いつもやってくるものさ…」

「おのれ、仮面ライダー！！ またしても、お前らか…！」

「貴様の思い通りにはさせないぞ…！」

「」「」「《変身っ！》」「」「」

次回…最終回、【終焉のF/すべてを噛み砕く男…雄理】

これで…決まりだっ！！

第七話 現れるK/あいつは空気を読めない(後書き)

次回：無印最終話、運命のサイコロは投げられた…

雄理の使うアイテム紹介（前書き）

あまりにも独自設定すぎて、ついていけない人が多いだろうと思うので、書いてみました。

雄理の使うアイテム紹介

・ガイアメモリ

死んでいった星達の記憶のかけら。単に【メモリ】と略する場合が多い。

とてつもない力を秘めているが、ガイアメモリとのシンクロ率が高くないとガイアメモリとの融合も行えない。

星の記憶から生まれたメモリは、【オリジナルメモリ】と呼ばれ、死んだ星の象徴する【概念】が刻まれる。

犯罪で使われているメモリは、通称、コピーメモリと呼ばれるもので、何故か発見されているオリジナルメモリより多く、専門家達では日夜、議論がされている。

コピーメモリは、シンクロ率に依存しない融合が可能だが、代わりに十中八九、暴走する。

・PG

プロジェクト・ガイアメモリの略。

ガイアメモリを完全に制御しきる固体の製作が最終目標…らしい。

ガイアドライバー開発もこれの一端で、プレシア・テストロッサは当時の若手研究員でも郡を抜いていた為、白羽の矢が立った。

テストロッサ家の祖母と母の両名の旦那は、この案件を追っていたが、何者かの手により殺された。

プレシアさんが調べた情報によると、雄理も関わっていたようだが、関わっていたとだけしかわかっていない。

雄理は何かを隠しているようだが…

・ガイアドライバー2G

ガイアドライバー・セカンド・ジェネレーション、通称、ダブルドライバー。

プロジェクトから追い出されたプレシアさんが開発した、ストレージデバイス。

二本のガイアメモリの情報を制御、抑制する事で本来の性能とは一線を越えた性能を叩き出すが、使用者に力の制御を丸投げしている為、マルチタスクに長けたものでないと使いこなせない。

おまけに、使用を想定している、6本のメモリともある程度のシンクロ率は必要の為、半ば産廃デバイスと化していた。

使用メモリは、

ソウルメモリ

風の記憶【Cyclone】：風を付加し、速力を上げる。

熱き記憶【Heat】：炎を付加し、力を上げるが、制御が難しい。

幻想の記憶【Luna】：幻想を付加し、攻撃を曲げたりできる。

ボディメモリ

切り札の切り札【Joker】：全体的身体能力を強化する。

闘士の記憶【Metal】：防御力と腕力の強化する。現在、調整中。

銃撃士の記憶【Trigger】：遠距離攻撃が可能になり、三つのボディメモリ中、一番攻撃力が高いが、その分、制御が難しい。

現在、調整中。

の六本。

現在、ボディメモリを雄理、ソウルメモリをユーノが所持している。現在、まともに実践運用が可能なメモリは、CycloneとLunaとJokerのみで、他は制御が本体である雄理の処理能力の関係で自爆してしまっ為、調整中。

現在のジュエルシード処理に関しては、雄理のCyclone Jokerで敵の外殻を砕き、なのはかフェイトが封印をしている状態。

外殻がなければ、雄理でも封印が可能。

現在、雄理が使用している状態は、非殺傷設定が可能である【ウ

イザードモード】である。

見た目は、色が左右非対象のバリアジャケットを着たような感じ。

早い話がロクンズXのモルズ。

他にも、ガイアメモリ本来の力を引き出した、「ドーパントモード」も存在する。見た目はまんまWで、現在、負荷が大きすぎる為に封印中。

・運命の子

雄理の別称で、物語の鍵を握る言葉である。

雄理の使うアイテム紹介（後書き）

独自設定過ぎて書いている自分でも笑ってしまった…orz

無印最終話 終焉のFノ全てを噛み砕く者…雄理（前書き）

書いてる自分がテンション上がりまくった…年内に無印終わって
よかった…ガクッ

無印最終話 終焉のF / 全てを噛み砕く者…雄理

「ふ、実験は成功か…しかし、あの封印の力には滅法弱いのか…ならっ！」

男は、古い洞窟の中で11個の蒼い石を弄っていた…石からは膨大なエネルギーがあふれ出し…

「蘇れ…キングダークっ！ 我を…アポロガイストを寄り代に復活せよっ！」

グオオオオオオン…

その日、山の方で大きな人影を見たという情報があったという…大抵、夜勤上げの人ばかりで信用されなかったが

最終話 終焉のF / 全てを噛み砕く男…雄理

「…」

きれいなまでに快晴…清しいくらいだ。しかし、あの事が無ければ…だが…

『会いたかったよ…運命の子よ』

運命の子…やはり、俺の力の事だよな、きっと。

「雄理、久しぶりに組み手をしないか？」

俺が悩んでいたに気づいた本郷さんが、提案してきた…しばらく、全力の組み手なんてしてないしな。

「お願いしますっ！」

「来いっ！」

始まりの合図はいらない…ただ、自分の思っがままに攻めるだけだっ！

「ふっ！！」

「ほう、徹をもうそこまで物にしたか…まともに防いでいたら手が危なかったよ。」

覚えたての徹を中心に攻め立てる…身体強化なんていない。俺は唯、思っがままに攻める事しか無いのだっ！

「いつ…けえええっ！！」

「むおっ?!」

俺の拳が本郷さんのガードを抜いて腹に全力の徹が通る…これっ
て、まさか…

いつの間にやらいした父さんが驚いた様子で今の現象を教えてください

「偶然だろうが…今のは間違いなく、貫だったね…驚いたな、大丈夫ですか？ 本郷さん。」

「ああ、鍛えいるからな…しかし、打った本人が本人が泡食ってどうする…」

「あらら、雄理、大丈夫…な訳無いか…ソファーに運んでおきますね。」

「頼む、カウンターが綺麗に入っていたから不安だが…」

「自慢の次男ですし…普段はもっと酷くやられていますから。」

「ああ、恭也君か…確かに彼なら、容赦無くやるだろうな…」

腹に打ち込んだは良いが、代わりに自分の腹に本郷の膝が綺麗に入り、意識を刈り取られていた雄理であった…

一方、こちらは、一文字とプレシア、リニス、ユーノが、プレシアの研究室で話していた…

「成る程、ドーパントに襲撃されたのか…」

「ええ、当事者では無いけど…デバイスの撮った画像を解析したら間違いなくマグマのドーパントと白いドーパントが戦っていたわ…フェイトの証言が正しければ、白いのは雄理で間違い無いみたいだけど。」

「…使うなど、あれほど言い聞かせたのにな…雄理は、暴走はしたのか？」

「？ いえ、敵方のドーパントは暴走したみたいだけど、雄理はしてないわ…敵方のドーパントは今、違う部屋で意識不明の真っ最中…」

「そうか…ありがとう。なら、俺から言つべき事は無いな。」

「そう…なら、最後に質問されてもらうわ…雄理は、彼は何者なの？ やらせておいて難だけど、普通、七本のメモリとの適正を持つ人間なんてありえないわ…」

「…本人は何も言っていないんだな？」

「？ ええ、何も語ろうしないわ…」

「なら、俺からは言つべき内容では無いな…あいつの出目は俺達でも限られた奴しか知らない。言い換えれば、それだけ危険なんだ…」

「それっていったい…っ?!」

緊張感の広がる部屋に、浚にとてつもない圧力のようなプレッシャーがかかる

「この威圧感…まさかっ!？」

「待ちなさいっ!…行っちゃった…」

計器を弄っていたリニスがプレシアに焦った様子でわかった事を伝える。

「海鳴臨海公園の沿岸部において、大規模の結界を確認…内部にて複数の魔法生物が暴れているようです…皆、A+はあるようです…」

「なによ、それ…でたためでしょう。具体的な数は？」

「現在、サーチャーにて探索中…っ?!中に雄理君がいるようですっ!」

「嘘っ?! ソファアで寝てたでしょう!」

「原因はわかりません…しかし、事実です。」

「全く、何がなんだか…」

「ウォーッ!」

体が、勝手に動く…コイツらを滅ぼせと、拳を奮つ…

『フハハハ、やはりきたか…運命の子よ…グワッ、いきなり石を即死級の速度で投げるなっ!』

「死ね…それ以外は言わんぞ? ユーノ…」

《全く、我が儘何だから…似た者兄妹め…》

【Cyclone】

【Joker】

「《変身っ！》」

【Cyclone！ Joker！】

風と切り札の二重奏が復讐の狂想曲を奏でる…

「《さあ、お前の罪を数えろっ！！》」

『ふん、このアポロガイスト…小僧に負ける程落ちぶれてないわっ
』！』

復讐者と悪の幹部は拳と剣を交じり合わせる…どちらか死ぬ迄続
く円舞を踊るために…

「くそ、雄理は中にいるのに、俺達はっ！」

「落ち着け一文字…しかし、どうやって中に雄理は入ったんだ…」

焦った様子で、本郷と一文字は公園の前にいる。

魔力はないが、改造人間である彼等の目には、はっきりと魔力の壁
が見えている…

しかし、見えているだけで魔力の無い彼等には、中に入る事すら出
来ない…

「本郷おじさん、一文字おじさんっ!」

「「なのはちゃんっ!」」

困った二人の前に現れたのは、走って来たのか、息の切れたな
はだった。

「まさか、中に入るつもりじゃ…」

「中にユウくんがいるのん」駄目だっ!」「なんでっ!」

激昂するなのはを窘めながら、本郷は語る

「私の正体は知っているね?」

「はい、仮面ライダーでしょ?」

「そつだ、私達は仮面ライダーだ…命ある限り、戦い続ける事を宿
命付けられた改造人間だ…」

「でもっ!」

「しかし、一枚岩でない私達共通である事が共通認識になっている
事がある…」

「…なに?」

「『子供を戦いに巻き込むな』…だ。」

「なっ?!ユウくんだった子供だよっ!なんでっ!」

「なのはちゃんは…カメレオン男が言っていた事は、覚えているかな?」

「…うん、確か、運命がどうとか…」

「そう、雄理は戦うのが運命付けしてしまった『運命の子』なんだ…雄理の生みの親の消息は知っているかい?」

「…いえ」

「彼の両親は、彼の目の前で惨殺されたよ…彼の目の前で…ね。」

「…っ?!」

「なんで、こんな話を話すのかって顔だね…雄理の事だ、こんな辛い話…全然しないだろう?」

「…はい。」

「まったく、何処までも壮吉に似てしまって…あいつも辛い話はないからな…」

「確かに…鳴海おじさんも楽しい話しかしてない…」

苦笑いしながら一文字が、二人に告げる

「さて、ボチボチ突入しないと雄理が持ちそうも無いぞ…二人共。」

「そうだな…よし、試しに殴ってみるかな…」

なのはが、決意を固めたような表情で二人の歴戦の戦士に告げる

「待ってください…私が、道を開きます…」

「出来るのかい？」

「はい、一度だけ出来ました…今度は確実に開けて見せますっ！」

「いいだろう…しかしs「私も行きますっ！」駄目だっ！」

「もう、家族が知らない所で傷つくのを黙ってみていたくないんですっ！」

「…」

なのはは、雄理が来る前に父親が裏の仕事で大怪我をして死にかけている…

兄である恭也は修業のし過ぎで膝を一度壊している…

二人は知っているだけに反論出来ずにいた…

「相手は、情け容赦無いスーパーショッカーの幹部クラスだ…命の保証はしがたいぞ…」

「構いませんっ！ いざというときは、ユウくんを盾にします…」

「ああ、くそ…誓いを破るなんてしたくないのになっ…！」

「それじゃあっ！」

「良いだろう…結界の突破は任せるっ！」

「任せてくださいっ！ レイジンググハートっ！」

【気合い入れてきますよぉ〜】

「くたばれえ！！」

『ふん、喰らう物かつ！』

W雄理とアポロガイスト…互角には違いないが…何かが決定的に欠けていた

『もう、面倒だな…ならば、ウオオオオオオッ！』

「何だよ…これ、キング…ダークだと…」

『フハハハ、かつてのキングダークの比では無いわっ！ 七ツの石を使い、浚に力を得た言わば、スーパーキングダークだっ！』

姿を現したのは、悪魔のような角を生やした巨人…【キングダーク】

GODの最強の幹部であり、中に呪博士を搭載したサイボーグでもある。

物質をエネルギーに変換してしまう【RS装置】により、無敗ともいえる強さを誇る筈だった奴だ…
まさか…まさか…っ！！

「ユウリっ！ 気をつけてっ！ ソイツ、オーバーSはあるよっ！」

森の中から、バルディッシュを展開したフェイトが走ってくる…
ヤバイっ！

「駄目だっ！ フェイト、逃げろっ！！」

『ほう、あの時の小娘の片割れか…よかるっ…貴様から片付けてくれるっ！』

「なに、これ…キヤアアアアア！」

フェイトの体から、金色の光が漏れ出したと思ったら、爆発した…

「何だよ…これ、フェイト？ おい、起きろよ…起きてくれよ…なあ…おい…」

《落ち着くんだ、雄理っ！ 心音は？心音はする？》

「そっだ…心おん…」

心音がしない…なんで…簡単だ…なんせ…

『その娘なら死んだよ…魔力を内側から一気に抜いてやったからなっ！ アッハッハッハッ！ そっだ、その表情だよっ！ その表情だ、少年っ！』

「…るせえ…」

辺りに風が吹き出す…俺は、フェイトを木陰に横たえて、サイク
ロンのメモリに手をかける…

「テメエだけは…ゆるさねえ…死んでも殺す…ファングっ！ 来い
っ！」

『もういる…今こそ、盟約を果たす時だ…力を貸そう…雄理っ！』

《ちよ、雄理っ！ ぼk…》

【F a n n g】

【J o k e r】

「変…身…」

【F a n n g！ J o k e r！】

破壊と切り札の二重奏が、破滅への狂想曲を奏でる…ここにいる
のは復讐鬼…

「貴様の全てを噛み殺すっ！！」

悪魔と化した少年だった…

【A r m F a n n g】

「邪魔する奴は、皆切る…かかってきなっ！」

『『『『イツー…』』』』

スーパーキングダークの出現に伴い、ライダー達にはとてつもない緊張感が襲っていた…

「もう少し、もう少しなのに…邪魔をしないでっ！」

ライダー達を襲うショッカー戦闘員を蹴散らしている時に…

《大変だっ！ フェイトが敵につ！》

「ユーノくんっ?! フェイトちゃんがどうしたのっ！」

《敵に…殺されたかも…》

「っ?!」

友人が殺された…なのはに強いプレッシャーが掛かる

《雄理ともシンクロが切れたし…今、フェイトは、バルディッシュから送られるシグナルで生きてるのが確認されたけど…雄理が…》

「ユウくんがどうしたのっ！」

《ダブルドライバーからのシグナルが切れた…もしかしたら…》

「…そんな…」

友人が生きてる吉報の次は、兄弟の死亡説…なのはの心はメタメ
タだった

「もうすこしだ…く、ライダーア、パアアンチッ！」

「なに…これ…」

目の前には、戦闘員が惨殺された山が体を構成していた魔力が大
気に帰るのを待っていた…

戦場は悲しみにくれる暇すらくれず、若者達を追い立てるのだっ
た…

「ウウオラアッ！！」

手の白い刃が敵を切り伏せていく…体に溢れる力が告げている…
悪を滅ぼせと…哀しみを噛み砕けと…

『くう、なんだ…その力は…ガイアメモリ本来の力だといのか…
おのれえっ！その小娘がどうなっても…』

【Shoulder Fannig】

「かみ砕けっ！」

手の刃が引つ込むと、肩のパーツが刃のように延び、それを飛ばしてスーパーキングダークの角を細切りにする

『グオオオオ…おのれ…おのれえっ!!』

「こいつでトドメだ…」

フアングメモリから延びる角に手をかけた雄理が唐突に膝を折る

「なん…で…」

『アツハツハツハツ、ガス欠なんて格好悪いでは無いかっ！ このまま、踏み潰してくれるっ!』

スーパーキングダークの足が雄理に迫ったときっ!

【ディバイン…】

「バスターっ!」

『ぬおおおっ!!?!?!?』

桃色の奔流がキングダークの体勢を崩し…

「…ライダーアア、ダブルパリアンチッ!!!!!!」

ライダー達が渾身の一撃を入れて、キングダークの足を破壊する

…

『おおのおれえ!!…またしても、貴様らかつ!』

「貴様の好きにはさせんぞっ！ キングダーク…いや、アポロガイ
ストっ！」

『ちっ…』

「ユウくん…」

「く、まだだ…俺はまだ…」

雄理の周りに、透明の靄のようなものが纏わり付く…雄理の魔力
光は、【透明】であると、プレシア氏から聞いていたのは雄理
に近づき…

「大丈夫だよ…フェイトちゃんは生きてるよ…だから、頑張らなく
てもいいんだよ…」

「…ふえ？」

「一号さん…二号さん…あのデカブツの外殻は砕けますか？」

「いけるぞっ！」

「任せてもらおうっ！」

「俺も…後、一撃だが、行ける…」

「もう、ユウくんっつてば…」

【Leg Fanlog】

三回目のチャージ…肩から出ていた刃は引っ込み…

【Fang Maximum-Drive】

復讐鬼の刃は、再び、守る者の刃として足から延びるっ！！

「ライダーア…」

「ジョーカー…」

「ダブルキックっ！！」

「デイストラクションっ！！」

タイミングがズレた二つの必殺技は、一号と二号が胸部外殻を砕き、雄理が中のアポロガイストを破壊し…

「レイジングハートっ！！」

【Ceiling Mode】

「リリカルマジカル…シリアル多数っ！ 封印っ！！」

【Ceiling…！】

再び、桃色の奔流が、半壊したスーパーキングダークを包み、ジュエルシールドを封印した…

『おのれ…ディ…イ…の時のようには…いかないか…だが、我ら、

スーパーショッカーは…数多の世界にいる…グアアアッ！！！！』

残った残骸が、結界を吹き飛ばし、夕焼けのような空は青空に戻っていた…

「む…私…いつたい…」

「フェイトちゃんっ！！」

なのはが奇跡的に回復していたフェイトに抱き着いていた…レイジングハートは祈願成就型のデバイスである…回復する為の術式をプレシア氏から転送してもらい…デバイスで補助する形で成功させたのだ…相当、男らしい力技だが…

「そうだ、ユウリは？ ユウリは何処っ？」

「へ？ はれ??」

事件を解決した当事者一命が足りない事に気付いた二人は、雄理の姿を捜す…本郷と一文字はわかっているが、敢えて黙っていた…何故なら…

「ハハハハ…海は広いなあ…」

技の威力を消し切れず、海に落ちていたから…

「ユウリィ〜?!」

「ユウくんっ?! 風邪引いちゃうっ?!」

ほほえましいなあ、と見守っていた本郷と一文字であった…

木漏れ日が満ちる白い部屋…俗に言わなくても、病院の一室に雄理はいた…

あの後、病院で検索したら、肋骨が二本逝っていたのだ…不幸な事に、落下の途中で魔力エンブレでバリアジャケットが解けた為、生身で海面ダイブである…キックのスピードのまま…時速58kmはくだらない早さである…

「はい、あーん。」

「いや、普通に食べられるからね、フエイトさん?」

「あーんっ!」

「食べればいいんだろっつ!」

二週間の強制入院された雄理は、フエイトとなのはに介護もとい遊ばれていた…奇しくも、夏休みの始まりだった為、男友達と遊ぶ約束を二、三個断念せざるえなかったが…まあ、しゃあない…自分が悪いからな…

夏休みの宿題なんて量だけの俗物…
転生者たる雄理の敵ではなかった…

唯一、敵になりそうな読書感想文は、
図書友（図書館でのエンカウント率が異様に高い為、そう呼んでい
る）の

自称、美少女の子狸から本の差し入れがあった為、
問題なかった…ただし、【坊ちゃん】というセレクトの為、先生か
らは渋いとのひょうかであったが…

高町 雄理の夏休みはこうして始まった…

無印最終話 終焉のF / 全てを噛み砕く者：雄理（後書き）

The・座談界

ここは、都内某所の教祖様が治めるファーストフード店である…

「最終回はどうするのよ？」

彼は、友人A…勝手に監督やら提督と呼ばせてもらうが…提督だと、本編未登場の甘党提督とかと被る為、【監督】で決定

「…失礼なモノローグやめろ…」

「サーセン…いや、キングダーク出そうかと…やる事ないし…（温泉イベントとか在り来り過ぎてやる気でねえし…）」

「確かに…フェイトが敵で無い以上…やる事なんざ、作業的にジューエルシード集めるくらいだしな…」

「ねえ〜」

「このような、変なテンションでこの小説のプロットは出来ていません。」

…「ごめん…死ぬる…じゃあ…ねえ

（…）…zzz…」

次回からは、A'sの前に雄理達の夏休み書くから、監督よろしく丸投げ

夏休み編… 始まります (前書き)

これが年内最終更新だろうか… まあ、しょうがない…

夏休み編… 始まります

アブラゼミが喧しい季節になった… 本郷さんと一文字さんは、もう、次のシヨツカーとの戦場と旅立った…

キングダークの攻撃でフェイトは、コアから強制的に魔力を引き抜かれたシヨツクで仮死状態だったらしく、大事をとって実家で寝ていた。

プレシアさんは、病気が無ければ、アリシアの分も含めて、全開の一撃で破壊し尽くしてやったのにと舌打ちしていた…

まあ、皆、俺がいなくても良かったんではと考えてしまうが… なのはに言ったら泣くまでマウントポジション取られて殴られ続けた… 痛かった…

恭兄や皆は、殴られてると言いやがった… おまけに、ひとしきり殴り終えたなのはは、そのまま、もたれ掛かって寝てしまった… 肋骨が痛かったが、それ以上に心が痛かった… 心配かけたよな… 絶対。

「やつほー、生きとるかあ？ って、なんや… その顔、丸で妹にマウントポジションでタコ殴りされたような感じは…」

「やたら、具体的だな… 子狸め、何の用だ？」

「つれないなあ… 折角、見舞いに来て上げたのにい〜」

「なんだ、弄りに来たのなら、お前のホワイトはやて号のクッションの中身をブーブークッションに換装してやったのに…」

「なんで、そないな残念そうやねん… まあほら、お見舞いに本持つ

てきたで…ほら、夏のはやてセレクションやつ！」

「お、サンキュー。読書感想文以外、宿題全部終わってたから暇だったんだよ…」

「どないやねん…廃スペック過ぎやろ…」

「ぞまあww」

軽い…しかし、どこか心地良いテンションで話している相手は八神 はやて。

同じ年で、俺と同じく両親が死んでしまった…しかし、俺とは違って、『家族』のいない、本当に孤独な奴だ…父さんと母さんに話してみたが…

「その娘も引き取りましょう」って時に『ギル・グレアム』なる人物が出て来て、今では、月一でグレアムおじさんが来ているらしい…どうしても来れない時は、双子？のような女性が様子を見に来ている…てか、根本的解決になってねえ

「まあ、最初の一冊は『坊ちゃん』やつ！」

「渋っ!？」

まあ、この時間を楽しもう…楽しむのに楽しまないのは損だ…

『渋っ!?!?』

「…どういう、事かしら…これは…」

フェイトの祖母こと、プレシア・テストロッサが未来の婿の雄理の見舞いに来て、見知らぬ誰かと談笑しているのを感じていた私は、このままでは不審者の為、バットショットを使って、雄理の病室の盗さ…もとい、監視を試みたらあら大変、美少女と楽しそうに会話では無いか…

「まいったわね…流石、血は繋がらぬとも兄弟か…」

彼の兄、高町 恭也は、過去に複数の女性から同時に好意を持たれていたらしい…という事は、その因子が巡りに巡って弟の雄理に引き継がれた可能性は否定できない…

「ハーレム…か、案外、ありかもね…」

願わくば、フェイトが本妻になって欲しい物だが…

夏休み編…始まります(後書き)

雄理の夏休みに平和の二文字はありません…ハーレムEndは、希望者がいない限り、やりません。

まあ、こんなノリでやってきます…よいお年を()・・・()
シ

夏休み編 海水浴に行こう（前書き）

新年、明けましておめでとございます。

今年も、秋永をよろしく願います（m | | m

A, sの構成を練る為に始めた夏休み編…個人的には大好きです。
彼らの日常を、ほんの少しお楽しみください。

夏休み編 海水浴に行こう

「貴方達、海水浴にいくわよっ！」

フェイトの自由研究である、ACアンプの基盤を作るのを見ていた俺となのはは、とりあえず開いた口が塞がらなかった

夏休み編 海水浴に行こう

「ん〜やっぱり、海はキモチィ〜」

際どい、黒ビキニを着たプレシアさんは、大きく伸びをしたら、回りの男性客の視線を釘付けにしていた
年齢に喧嘩を売っている肌のハりは、果たして何をしたらああなるのか俺も気になる。

…あ、片割れの女の人に殴られてら
来ているメンツは、高町家、テストロッサ家、月村姉妹にアリサである。

高町の肝っ玉母…桃子さんは、黄色のビキニに、腰を布で隠したようなデザインである。

さつきから、父さんといちゃついでる。
テストロッサ家の母…アリシアさんは、黒のハイレグで、上にパーカーを来てパラソルの下で寝ている。
側にリニスさんもいるし大丈夫だろう。

月村の姉…忍さんは、暗い大人し目の紫のハイレグで、さつきから、

恭兄に胸を押し付けて遊んでる。

「何、虚空の彼方を見てんのよ…ユウユウ共。」

「男はな、強くなければ生きていけないけど、たまには現実逃避をしたくなるのさ…」

「同じく…たまには…ね。」

機嫌が悪そうなたツンd…いや、アリサは、二人して虚空を見つめるユウユウ…雄理とユーノを引っくるめた造語なのだが…を虐める一歩手前の勢いで話をしていた

しょうがないじゃない…朝の鍛練が今日は異様に辛かったんだもの因みにユーノもこちらにいる間は鍛練に参加するようだが、明日には帰る予定らしい、本人いわく…

「あまり居ても負担になるだけだし、部族の皆も、心配していると思うしね。」

だそうだ…スクライアの部族は、プレシアさんに聞いたが、皆家族のような体制らしいから、たしかに大変だろう。

目的の物も二個盗まれたものを除いて、回収出来たし、後は管理局に丸投げするらしい…鬼だな、ユーノ

「ところでさ、ユーノ…なのはに魔法教えたのお前？」

「無理無理、プレシアさんが教えているんだよ？ 僕に出る幕無しだよ。」

「じゃあ、結界破壊は誰が…プレシアさんは、教えた記憶が無いっ

て言っていたけど…」

「…まさかつ?!」

二人の頭に過ぎつたのは、祈祷型ならぬ、愉快型インテリジエンスデバイスであった。あれなら、教えなかない…いや、勝手に追加しかなない

そんな感じに二人がグダグダとなのはの男前情報を交換していたら、女の子から悲鳴が聞こえた。

「キヤーっ?!」

「な、水着を返しなさいよっ!!化け物っ!」

『はん、ロリの水着と言う宝、誰が返す物かつ!』

化け物…ドーパントの登場により、他の客は、脱兎の如く消えていた…足早過ぎだろう…

「これは…出番じゃない?」

「だな…悪いが、行くぞ…ユーノ。」

「筋肉痛がきついのに…動いたら治るといふ精神論を試す良い機会じゃない?」

「だな…」

【Cyclone】

【Joker】

「変身っ!」

【Cyclone、Joker!】

浜辺に、風と切り札の二重奏が木霊すり…風が、砂を巻き上げ、結界を作り上げる。

封時結界は、リニスさんが作っていた いい仕事するなあ…嫁に来たら、最強だろう

《雄理…》

「わかってる…リニスさんは、ユーノが狙ってるもんな…」

《わかれば良し。》

「さて、とりあえずは、アリサ達を助けに行くかな…」

そう言って、俺は…俺達は、人数分のタオルを持って走り出した。

「…」

「すずか…あの化け物…人の水着を盗むとか、どんな変態よ…」

『変態とは失礼な…たとえ変態でも、私は、変態と言っなの紳士で

すよ…誰も傷ついてないしな。』

「どう考えても変態でしょうがっ?!」

アリサは、両手で前を隠しながら、化け物：アノマロカリス・ド
ーパントと言い争っていた

彼女を支えていたのは、親友の恥態を晒す原因になった相手に対す
る怒りだけだった

因みに、なのはとフェイトは、デバイスが気を効かせて、バリアジ
ヤケットを展開していた。

それでも、謎の恐怖：貞操とかの恐怖で動けなくなっていた

「アリサっ！　　すずかっ！　　あ、なのはとフェイトは、大丈夫そう
…でも無いな…よしよし、早く二人を連れて逃げる。」

「「うん…」」

「ほら、アリサ、すずか…タオルを持ってきたから…巻いとけ…」

「…ありがとう(ボソッ)」

「ん？　どうした？」

「何でもないっ！　さっさとあんな変態を倒して警察に突き出して
よっ…!」

「??　ああ、わかった。」

《(これは…流石にないだろう。いや、あの兄あって、この弟あり
か?いや、でも血は繋がってないだろうし…まさか、空気感染みた

いな物なのか?」

『ああもつ、見せ付けてくれるなっ! ガキがあ…何物だっ!』

「…ふう、通りすがりの仮面ライダー見習いさ…覚えとけっ!」

『仮面ライダー…見習い…ふざけやがって、そんなもの、認めるかっ!』

アノマロカリス・ドーパントは、口から弾丸を発射するが…

「遅いつ! 恭兄の飛針より遅いつ!」

雄理はサイクロンの力で強化した速度で悠々と避けていく

『雄理、ジョーカーだと攻撃が届かない…トリガーに変更しようっ!』

「(だったら、ルナに30秒後に変更だ…サイクロンで弾幕を作って、ルナで陸にあげるっ!)」

『了解っ!』

【Trigger】

【Cyclone、Trigger!】

風と銃撃士の二重奏が響く、雄理の左半分のバリアジャケットは、切り札の黒から銃撃士の青へと変化する

「弾幕をくらいなっ！」

『弾幕など、避け馴れ…があ?!』

サイクロンで強化された、連射速度はアノマロカリスを追い詰め、顔面に弾丸を食い込ませ、隙を作り出す

【Luna】

【Luna、Trigger!】

今度は、幻想と銃撃士の二重奏が響き渡る…雄理の右半分のジャケットは、風の緑から、幻想の金へと変化する

「さて、水の中から出て来てもらおうか…」

『何だコレ…誘導弾だっ?!』

水中深く潜ろうとしたアノマロカリスを幻想の弾丸が追い回し、陸へと追い詰め…

「さて、お前の罪を数えろ。」

【Trigger Maximum Drive】

『く、なら、このガキも道連れにっ!』

「い、何でこっちに来るのよっ!」

『アリサたん…ハアハア』

「いやぁー」

「……アリス（ちゃん）っ！」「」

アノマロカリスは、満身創痍な体を押し、アリスに迫るが…

『な、なんだコレ…糸っ?!』

「悪いが…妹の友人だ…手出しはさせないぞ…」

「片手で悪いが…同じく。知らなかったか…片手でも、トリガーマグナムは打てるんだぞ？」

恭也と雄理の手には糸…綱糸が巻き付いており、アノマロカリスの足と手を拘束していた

「《トリガー…フルバーストっ!》」

『ぐ、うわぁー?!』

トリガーマグナムから、金の弾丸と青の弾丸が放たれ、アノマロカリスの体を貫く…そして、元の男に戻り、体から壊れたメモリが吐き出された

「う、ぐう…」

平和な浜辺は、変態のせいで一変し、戦場になってしまった…ドパーアントだった男は、児童の下着のみを狙う下着ドロであると後からジンさんが教えてくれた

ドーパントを倒して少したった後にすすかは、忍さんに抱きしめられ、なのはは母さん達に抱きしめられ、フェイトは、アリシアさんやプレシアさんに抱きしめられていたが、アリシアは…

「ああと…その、大丈夫…か？」

「大丈夫な訳ないでしょう…怖かったんだから…」

赤い目で一人泣いていた。今日は鮫島さんもない為、本当に一人だった

「その、ごめん、怖い思いさせたな…」

「なんで、あんたが謝るのよ…それより、いつもあんなの戦ってるの？」

「そう、本郷さんや師匠は、あんなのよりもっと怖い奴らといつも戦っているよ…ずっと、ずっと昔から…」

「そう…なら、私があんたを守ってあげる。」

「へ？」

アリサは、してやったりと言う顔で俺を見た

「力じゃ、あんたを守れないから…だから、少なくとも、あんたの

『日常』は私が、私達が守ってあげる。」

「は？ へ？」

「なのはやフェイトだと、どうせ、そっち側にどっぷりだろっから、私やすずかがせてものあんたの日常を守ってやるっていつてるのよっ！ わかったっ！」

「お、おう…サンキユな…」

「わかればいいのよ、わかれば…ほら、いくわよ。」

「ああ、今はプライベートビーチ状態だから結構無礼講でいけるぞ。」

「じゃ、あんたを波打ち際に顔だけ出して埋めますか。」

「なんでだよ?!」

こうして、彼らの日常は過ぎていく…楽しい時間は、これからである。

夏休み編 海水浴に行こう（後書き）

- 業務？連絡 -

A、Sの構成を…思い切って変えようか。
今のままだと、俺が死ねる。

夏休み編 はじめまして、夏祭りに行こう（前書き）

これで、夏休みはラスト…

ひぐらしの『You』とかのお祭りとか夏っぽいのをBGMに聞く
といいかも。

夏休み編 はじめまして、夏祭りに行こう

潮の香り漂う町にも、夏祭りは存在する…しかも、臨海公園を大きく使った大掛かりな物だ

夏休み編 夏祭りに行こう

夏祭りを前日に控えた日、翠屋も簡単な露店出す為に、準備をしていた

「フェイトちゃんって、夏祭りは初めて？」

「うん、前までいたところはお祭りとかなかったし…お祭り自体初めてかも…」

「なら、皆と一緒に楽しもう」

「うん」

「お前ら…はしゃぎ過ぎて遊べなくなってもしらんぞ…」

「「ハイ」」

わかってんのかな、コイツらは…

あ、ちなみにユーノは、夏祭りを楽しむ為に未だに滞在している。

時空管理局が来た時、プレシアさんは苦虫を口の中ですり潰したような顔になったところを見ると、中々黒い組織のようだ…俺の中の何か危険だと警報をガンガンに鳴らしていたし…

夏祭りに俺の様子を見に来たやってきた風見さんが、俺を庇うように立っていないければ、ファングが噛み付いていたとファング本人が豪語していた。

しかし、なんであんなに怖かったんだろうか…見た目は普通なのに、なんでだ？

「雄理い！ 電源の移動手伝ってくれっ！」

「はぁいつー！」

考えるのは、止めよう…材料が少ない以上、ミスリードにしかない…

「凄い怒られてしまいましたね…」

「あの子が固まったと思った瞬間に『この子に近づくなっ！』、ですもんね…」

ここは、時空巡航艦アースラのブリッジ、艦長の『リンディ・ハラウオン』とオペレーターの『エイミィ・リミエッタ』がモニターを見ながら会話をしていた

「質量生体兵器…ある意味、戦闘機人である、ライダー達をよく本局のお上方が許しましたね。」

「精度や力は雲泥の差だけどね…まあ、どちらかと言つと、三提督が認めさせた節があるのだけどね…行動の筋は通つてゐる訳だし。」

「それにしても『彼』、急に固まっちゃつてどうしたんでしょうね。」

「彼…もしかしたら…」

「どうしたんですか、艦長？」

「いや、もしかしたら…やっぱりっ！」

「え、これつて機密じゃ…」

「この子、二年前の管理局傘下の研究所襲撃事件で行方不明になっていた子…」

「あの襲撃事件で生き残つてたなんて…」

「被害総数は20万人、研究員は皆保護されたけど、施設は崩壊、崩壊した施設からは、大量のコピーメモリが発見されたそうよ。」

エイミィは、なにかを察したのか驚いた表情になり

「…まさかっ！」

「彼もまた、上層部の闇の一部つて訳ね…」

「管理局つて一体、何がしたいんですか…」

「私も…わからなくなってきたわ…」

二人の女性が、現状に嘆いている中、海鳴では祭りがはじまった祭囃子が夜空に響き渡る…

ドンドンドンドン…ドンドンドンドン…!

「すごい音…これがお祭り…」

「そうだよ、海鳴臨海公園で年に一度、夏のこの日しかやらないイベントだよ」

祭り特有の太鼓の音に圧倒されているフェイトに、夏祭りに一緒に行ける友達が増えて嬉しいのか、なのはがルンルンとしており、アリサとすずかが苦笑い気味ながらも、うれしそうに歩いていた

「にしても、なんで俺、はやての車椅子押してんだ…」

「ええやん 細かいことは、言いつこなしや」

「はやて、日本の祭りってこんな感じなの？」

「せやでユーノ君、いや…テンション上がったきたあ〜」

「くう〜」

明らかにテンションの低い俺に、その真逆のはやて、そして珍しいものを見る様な好奇心に満ちたユーノがおり、何故かはやての膝の上に久遠がいた…あ、那美さんがいた

「それにしても…クロノも来るのか？」

「別に、かまわないだろう…それとも、なにか不都合でもあるのかい？」

「別に…」

アースラから、何故かクロノ執務官が来ていた…ちゃんと浴衣着てやがるし

「それにしても、相変わらず妙な連中がいるな…」

エアガン射的に…ちよつと、放送できそうも無い屋台まである…精力増強スツポンかき氷とか罰ゲームだろ…

「雄理…あれは、なんだい？」

「ん？ ああ、イカ焼きだな。」

「なんかクロノ君、イカ焼き食べたことあらへんの？」

「あ、ああ…」

やはり、食べ物関係は興味深いのか、だんまりだったクロノが聞いてきて、はやては目ざとく反応してきた…おとなしくしている、この子狸

「イカ焼き三つまいどお！」

「あんがとよ、おっちゃん。」

「雄坊、八神の嬢ちゃん取られないようにな」

「な、うっせ?!」

「ハツハツハツ、コイツはオマケだ」

からかった詫びなのか、イカ焼きをさらに一本くれた、さて、誰に上げようか…

「わるい、ユーノ…子狸頼むわっ！」

「ちょ、ちょっと?!」

俺は走り出した、渡すならアイツしかいないな、うん、残されたのは、黒い瘴気を出すはやてと、任されたユーノだけであつた…クロノは結果がわかつたとたんに逃げた

「……………」

「あの…ハヤテサン？」

「雄理…あれは、絶対に女のところにいったな…」

「え?」

「おうでえ！！ ユーノ君っ！！！！！！」

「はいい？！」

はやて達は爆走した…盛り上がる祭囃子のなかを…

「フェイトっ！」

「雄理？！ どうしたの、息切れてるし…」

雄理が来たのは、なのは達の所であった…基本、マイペースである雄理が自分達に合流するとは思っていなかったか、四人娘の動揺は隠しきれていない
周りの大人も興味深くみている、なんだかんだで雄理が誰とくっ付くかで盛り上がってる連中だったりする

「フェイト、イカ焼き…やるよ…」

「…へ？」

雄理の手には、イカ焼きが…ホカホカの出来立てが握られており、その手はフェイトに向けられていた

「いや、食べたならいいけどさ…」

「うっん、ありがとう！」

周りの大人は、頭を抱える者、ガッツポーズを取る者…一喜一憂の反応であった、大穴過ぎだろうそれは、など不穏な台詞も聞こえ出した…

「じゃ、俺行くなっ！」

「あ…」

雄理は、祭囃子の中へと消えていく…

「行っちゃった…」

「よかったじゃない、フェイト、早く食べないと冷めるわよ？」

「え、うん…」

「どっつ？ おいしい？」

「かひゃい…」

「あらら…」

イカ焼きの堅さに苦戦するフェイトを見守るアリサとすずか、ちよつと、羨ましそうにみるのはであった

「あれは、反則やろ…男のツンデレが自然に見えるとかどんだけやねん…」

「……………」

屋台の影で、はやてと、人ごみを掻き分けるように走ったユーノは一部始終を見守っていた

「まさか、雄理の本命はフェイトちゃんなんやろうか……」

「それはありえんww」

もう、ユーノは笑うしかなかった…義理の妹に、助けた外人風の女の子、車椅子少女とかこのギャルゲだよ…と、しかも、ことごとくスルーするスキルは、もはや、レアスキル並だと祭囃子の夜空を仰ぎながら考えていた…そろそろ、戻ってくるみたいだから、空気を読んで退散するかなと考えながら、喧騒の中にユーノは消えていった…どこか黒い笑みを浮かべて

「あれ？ はやて一人か？」

「ぐすつ、うん…」

戻ってくるそこには、涙目のはやてがぼつんと残されていた…

「ユーノは？」

「うう…なんか、用事あるゆつて帰ってもったわ…」

「そうか…なら…」

「…なら？」

「祭りの間、ずっと一緒に居ようか…」

ぽかんとした顔で、はやてが俺を見上げている

「へ？」

「だから、放って行ったお詫びに、祭り間に一緒に居てやるって言うてるんだよ。」

「ええの？」

「ええの、決定事項だっ！　いくぞっ！」

「あ、待ってえなっ！」

祭囃子の中に、俺達は消えていった…

・オマケ・

「よくやったわ、ユーノ。」

「いえ、当然の事ですよ……」

薄暗い研究室にプレシアとユーノはいた……二人の前には、モニターが並んでいた

「八神つて子……雄理と仲が良いみたいだけど……何者？」

「雄理が海鳴に来て初めて出来た友達らしいです……これは、ポイント高いですよ。」

「幼馴染か……相変わらず、レベル高いわね……雄理。」

二人の影は黄昏ており、二人を見守るリニスはどこか儂げであった……

夏休み編 はじめまして、夏祭りに行こう（後書き）

A'sへの伏線を地味に残しつつの閑話でありました。
ビギンズナイトへの伏線も忘れないよっ！

一緒にこれのプロット書いてる友人が『監督提督』という名前で
これの三次創作してくれました。
下書きみただけかなりぶっ飛んでて楽しかったよ？

A' s 編・第一話 開幕はHノ戦いは、始まる(前書き)

導入が面d…難しいA' sでしたが、ここまで来れば大丈夫…

【追記】

謎の現象+一部修正…完全なミスでした、スイマセン(m| |)

m

A' S 編・第一話 開幕はHノ戦いは、始まる

「炎という力は、扱っただけでも危険が伴う…その事を忘れるなよ？」

「はい、気をつけます…」

風見さんとの修業の為に、海鳴にある山に来ている…ついでに、アポロガイストが潜伏していたであろう場所の特定も兼ねている…何か危険物を残しているのは、100%有り得るからだそうだ

「それにしても、【Heat】か…中々、お前らしいじゃないか…すぐに熱くなるしな。」

「もう、からかわないでくださいよ…」

ふて腐れてしまうよ…だってまだ、子供だもん
風見さんが何か見つけたのか、手招きしていた

「雄理…これが何かわかるか？」

風見さんの手には…V3の胸像のある…カード？ピンクの感じが
ナイスだ

「わかりません…裏にV3のレリーフがあるみたいですが…」

「これは、デイケイドが使うカードだな…本人にあつたら返してやるかな。」

「…デイケイド？」

風見さんは、どこか…遠くを見るような表情になった

「世界の破壊者…デイケイド、様々な世界が融合する原因『だった』者だ…」

「…だった？なんか、過去形ですね。」

「今じゃあ、世界を救って回っている優しい破壊者だよ。俺達ライダーが集まった原因でもあるんだけどな。」

「…なんか、凄そうですね。」

「確かに凄いけど、素直じゃないのが珠に傷か、まあ、些細な問題だけどな…危険物は見当たらないし、アポロガイストの物であろう物は大体回収したか…帰るか。」

「はいっ！！」

風見さんと俺は歩き出した…家に帰るために…

「ふえ…ふえ…、ちよ、ちよっときゅっけえ」

「なのはは、運動神経が切れてるからな…とりあえず、三分休憩な。」

雪が降りそうな12月…首に久遠を巻き付いて欲しいが、生憎、いない為、黄色のマフラーを巻いている

「雪、降りそうだなあ…」

「だねえ…」

「もう、二年か…早いもんだな…」

「ユウくん…」

ちよっぴり、悲しい気持ちだけど…俺は、腰のポーチからドライバーを取り出し、腰に巻き、赤と透明のメモリを取り出す…

「…ユウくん？」

【Heat】

【Metal】

「変…身…」

【Heat Metal!】

情熱と闘士の二重奏が響き渡り、体に赤と銀の服が包み込み、背には鉄棍が携えた姿となる…

夏と秋、風見さんとの地獄の特訓により、ヒートとファングを除く、ダブル全般をほぼ、物にした…ほぼだけどなっ…!!

ガアアアアッ!!

「今のに気付くか…」

「殺気そんだけ出してりゃなあ…不意打ちとは、粹な真似をするな、お姉さんっ！」

背中を狙ったみね打ちを鉄棍…メタルシャフトで受け止める、メタルの防御でも手が少し痺れた

「ラテーケン…」

「デイバインシューターっ！」

「うああっ?! あぶなっ?!」

赤い服の少女もやって来たが、デイバインシューターで牽制されたようだ…なるほど

「二対二か…嫌いじゃないぜ、この状況…」

白い服の女性は、どこか諦めに似た表情で語り出す

「敵で無ければ、良き友になれそうなのだけだな…」

「お前らの魔力…闇の書のか…」

「デイバイン…バスターーっ!!」

「最後まで言わせるよっ!!」

赤い服の少女は、台詞を最後まで言えないのがお気に召さないよ
うだ…

「まあ、あれだ…なのは、いくぞ？」

「うんっ！」

「お前の罪を数えろ（なの）っ！！」

「烈火の将、シグナム…」

「鉄槌の騎士、ヴィータ…」

「御神不破流門下生、高町 雄理…」

「ミッド式魔導士、高町 なのは…」

「……「圧して参る（なの）っ！！」……」

戦いは始まる、太古の騎士と現在の戦士の戦いが…

戦いは、熾烈を極めた…ヴィータとなのはは、なのはの情け容赦
ない弾幕を前に攻撃に出られないでいた

シグナムと雄理は…

「…お前、炎熱変換持ちか？」

「確実に違うねっ!」

雄理が、メタルシャフトを大きく振り、一度距離をとる

「仕切り直しか…」

「そついうこつた…」

「だが、距離を取ったのは迂闊だったな…レヴァンティンっ!」

【Ja Explosion Schlangeform】

「いくぞ…」

レヴァンティンの刃が蛇腹剣となり、雄理に迫るが…

「早計だったのはそつちだったなっ!」

「ぐふう?!」

何故か、シグナムの鳩尾にはメタルシャフトがめり込んでいた…

雄理は、御神流の奥義の一つ…【神速】の触りである【思考加速】により相手の攻撃を見極め、蛇腹剣を掴み、そのままこちらに引き寄せたのだ

ちなみに思考加速、かなり便利だが、自身の体が追いつかないとモどかしいし、やりすぎると頭が使いすぎで痛くなる、ある種の禁じ手でもある…緊急事態ゆえにしようがないが

「く…」

「チエツクだな…なっ?!」

何故か、雄理の胸から人の手が生えたように出ていた…透明の、硝子のような輝きを放つリンカーコアが露出する

「これは…やったのか…」

「が…アア…」

「安心しろ…死には…?」

苦しみ、もがく雄理の周りに白い、まるで光の板のような物が複数浮かんでいた…しかし、それはじょじょに黒く染まっていく

「これは、いつたい…」

顔に、黒い紋様が現れ、バリアジャケットが剥がれていく…

「おい、シヤマルっ! もう、やめろっ!」

《違いますっ! 蒐集が止まらないんですっ!》

「そんな…馬鹿な…」

【Fang…】

「あれはっ?!」

【Fang…Metal…】

破壊と闘士の二重奏が響き渡るが…それは、成功する事なくおわった…

《蒐集が…止まった…?》

「ヴィータ…撤退するぞ、目的は達したっ!」

《でも、コイツはっ!~!》

「いいから、逃げるぞっ!」

《く、了解…》

「待ってっ!~!」

「誰が持つもんかっ! 今度会ったら、ただじゃおかないぞ…高町にゃのはっ!」

「なのはっ! 高町 【なのは】っ!…ああもっ、それより…ユウくんは、…へ?」

そこにいたのは、壊れたダブルドライバーと壊れたように横たわった雄理であった…

「ウン…い、いや…いやあああああ?!!?!?!?」

少女の悲鳴が森に木霊する…悲しみは始まった

大体合ってる次回予告

「覚えてない？」

「ああ、昨日走り込みしたのは覚えてるんだけどな……」

「……」

「体、大丈夫なの？」

「大丈夫、それよりユート、遺跡の案内お願い。」

「任せてよっ！」

「遺跡が崩れるぞっ！」

「「変身っ！」」

【Heat Metal!】

次回、『爆炎のS/炎に包まれて』

これで……決まりだ……

A' S 編・第一話 開幕はHノ戦いは、始まる（後書き）

なのは無く、雄理が蒐集を受け…レイ八さん（もはや、別人）が壊れず、ダブルドライバーが壊れると言うオチ…

雄理の蒐集時に起きた現象の正体はっ？！

次回『爆炎のSノ炎に包まれて』…お楽しみに

第二話 爆炎のS/炎に包まれて(前書き)

ggdgdな展開になって来た…ASをスルーしたツケと破壊しま
くったツケがここに来たか…

第二話 爆炎のS / 炎に包まれて

「ん…ふああ…」

決して、爽やかだったり、穏やかな朝ではない…久しぶりに両親死ぬ事以外の悪夢を見た…んなことより

「くう…むきゅ…」

なんで、なのはが隣に寝てるんだ？

第二話 爆炎するS / 炎に包まれて

「もう…ほんとおおに、心配したんだよっ…！」

「悪かったって、だから、機嫌直してくれよ…二人共…」

起きて、朝食を食べた後に、フェイトがいきなり家に乱入して来て今に至る…ついでになのはも便乗してさあ大変

「聞いてるのっ…！」

「はい…すみません」

とりあえず、洗い物しながら微笑むのやめてくれ…母さん

「さて、明日は休日スクライア達が発掘した遺跡を見学する予定だったけど…あんたは、保護者付きね。」

「んなつ?!」

しこたま怒られた後、フェイトにプレシアさんが呼んでいるとの事でテストロッサ宅に来ている…なんでも、俺の体についてと、ダブルドライバーについてらしいが…

「まあ、先にドライバーについて話すわ…ドライバーは単に魔導抵抗といくつかのセーフティーが焼き切れただけに済んだわ、中枢のシンキングエンジンとガイアプロセスが生きてるから、明日は修理は可能…」

「凄いな…意外と早く済んだな…」

「外装より酷くはないし、その外装も研究用の強度無視のモックアップみたいな物だし…なにより、ドライブエグゾースト無かったから排熱が追いついていて助かったわね…下手したら、上半身と下半身が泣き別れよ?」

知らぬ間に 命の危機が 迫ってた
驚きすぎて一句詠んでしまった

「でも、本当の問題はここから…貴方が蒐集されたであろう時間…局地的な次元震が観測されたわ…それも、海鳴臨海公園にピンポイントにね…」

「…は？」

「ドライバーに残留したデータでは、貴方からコピーメモリ特有の悪性パルスに似たパルスを検知したわ…さあ、聞かせてもらおう…」

「むう…」

プレシアさんの表情がドライになる…あそこの大人と同じ顔だ…

「貴方は何者？ 人間の…魔導士の常識を覆し、尚且つ、憎むべき物に似たパルスを発した貴方は何者な訳？」

「それは…」

俺が聞かれたく無い事であり、この二年間逃げ続けた『問題』でもあった…

「わかった…全て話そう…全てをな。」

戦わなければいけない…忌まわしきあの『記憶』と、あの『過去』と…

「ユウリ…大丈夫かな、私…なんで、魔法を練習してたんだろ…」

「フェイトちゃん…」

フェイトは、悔しかった…友人を守れなかった事、自分が努力してきたを否定されたような気分なのだ

「なのは…私、強くなりたい…」

「フェイトちゃん…あの」

「私、決めたよ…なのはっ！」

「な、何をかな…フェイトちゃん？」

フェイトは、より決意を固めたような表情なり…

「私、管理局に入るっ！」

「そんな、プレシアさんは反対するよっ?!」

「おばあちゃんは説得してみせる…強くなくちゃ、守りたい物が守れないから…だから、管理局で力を付ける。」

「…」

友人が戦場に出たいと決意を固める姿を…なのは、ただ、見てい
るしか出来なかった…

「ああ…死にたい、昨日の自分を抹殺したい…」

雄理は、明日の準備を終え…自室のベットで横たわっていた…コ

アの痛みは無いが、大事を取れと言われてしまっただけは、強くは言えない…

【…雄理、少しいいか？】

「ああ、この声は…メタルか？」

【そつだ、ヒート…お前はどつする？】

【遠慮しておく…】

「普段、喋らないから驚いたよ…」

【すまん、では…昔話をしようか】

「昔話？」

銀色の箱がペカペカ光りながら声を出す光景はなんとも…シユールかつユニークであった

【時代は、古代ベルカという滅びた文明まで遡る…】

「いきなり、文明単位かよ…」

【私達、Cyclone、Heat、Luna、Joker、Metal、Triggerの六本は、ある一人の騎士に所有されていた。】

「えっと、それって、凄いことなのか？」

【当たり前だ、後にも先にもその騎士とお前だけだ…】

「…」

【続けるぞ…その騎士の名は『ストル・ヴォルケイン』…努力の騎士だった。】

「ストルって、魔剣レーヴァンティンで世界を焼き尽くした奴じゃん…」

【まあ、実質、中々愉快的騎士でな…勝つためなら何にでも手を出したよ。】

「まさか…」

【そうだ、世界の守護者の力たる『W』にでさえもな。】

「…Wは、昔からいるのか？」

【そうだ、アラヤが抑止の守護者を作るように、次元世界は、Wという守護者を作り出す。】

「…条件は？ 条件はなんだよ？」

【核心を突くな…Wの現れる条件…それは…】

「それは…」

手に汗が滲んでいることにも気がつかずに話を聴き入ってしまった…

【次元世界…ひいては、過去、未来、平行世界をも破壊し尽くすよ
うな存在へのカウンター…】

「それって、ディケイドに関係は？」

【皆無だ…これだけは、断言出来る。】

「ターゲットは、わからんと…」

【話が逸れたな…続けるぞ。】

「ああ、頼むよっ！」

その後、俺は騎士ストルについて延々と聞かされた…竜120体
もの大群を剣一本で押し返したなど、よくわからないけど凄い話ば
かりで、終わりに差し掛かった頃…

【ストルは、終わりの見えない戦争が続くある日、味方である聖王
を裏切ったのだ…】

「…裏切った？ なんで？」

【本人から聞いたわけでは無いが、きっと、不毛な戦争で誰かが傷
つくのか嫌だったんだろう…我らを神殿に封印して何処かに行って
しまったよ…】

「…終わり？」

【そう、馬鹿な騎士の話は終わりだ…明日は早いのだろうか？ 早く

寝てしまえ…】

「はい…」

やけに素直にいうことが聞けたなとか考えつつ、俺は…眠りに着いた

『ん…ぐっ?!』

気がつくと、何処まで白く、無限とも思えるような本棚のある空間に出ていた…なんとなく、夢だなと…そう冷静に判断している自分がいた

【お久しぶりね…我が愛し子、また会えてうれしいわ】

『お前はっ?!』

後ろに居たのは、悪意を塗り固めたような色の本を持った同い年くらいの少女だった…怖い、その子の目が…何も写さないような暗い目が怖かった

【まだ、早かったかしら…いえ、何かの縁よ、ねえ…貴方、こんな話知ってる?】

『…っ』

聞くものを魅了するような声につい、耳を傾けてしまった

【そいつの話を聞くなっ！ 雄理っ！】

『っ？！』

無骨な…どこかで見たような剣を持った、白い騎士が何処からか現れる、少女に切り掛かる

【ひっどおーい、後ちよつとだったのに…】

【大丈夫か…雄理】

『え、あ、ああ…』

話についていけない…しかし、今の話を聴き入ってしまったらと言う恐怖が俺を襲う…

【まあ、いいわ…会えたって事は、チャンスが増えるって事だし、また会いましょう…私の愛し子】

【待てっ！ 雄理…どんな闇であっても…光は必ず道を印す、忘れるなよ？】

『…うん』

何故か、初めて会ったのに素直に話が聞けた…人見知り治ったのかな？

【夢は覚める…もう、道を踏み外すなよ？】

『よくわからないけど…わかった。』

目覚める直前に思い出した…ここは忌むべき場所であると

魔法というものにファンタジー的なロマンを感じるなら信じられないだろう…俺は今、SF的な宇宙戦艦に乗っていた

「…」

「なんか、酔いそうな光景だね…次元航行って…」

「…」

「はうう…」

なのはと雄理は次元航行艦アースラの展望室にいた…雄理は、死んだような暗い目…ちょうど、二年前に来た時と同じような目であり、なのははそれに怯えていた…家族が、何処かに行ってしまったというで怖かったのだ…

「やあ、調子はどうだい…」

「あ、クロノくん…」

「…」

「次元震が、地球で観測されたと聞いて内心ヒヤヒヤしたんだよ…」

「…」

「なのとはもかく、雄理は悪そうだね…」

「…社交辞令は終わったかい？執務官さん？」

「…？」

「いや、ちょうど君が知りたがるような話を聞いたんだよ…」

「…それはなんだい？」

いつもの、どこか疲れたような態度とは違う…鋭く、濁った眼光をクロノは雄理から感じた…

「闇の書…だっけ？勿論、知ってるよなあ…『仇』だもんな？」

「ああ、勿論だ…怨んでない可と聞かれたら、嘘になるがもう整理は着いた…しかし、何処で聞いたんだ…何故、闇の書が『仇』だとしってるんだい…君は？」

「何、ちよつと小耳に挟んだんだよ…ちよつとな…」

「まあ、秘密主義な君に聞いても無駄か…で、本題は？」

「闇の書を破壊させる…簡単に言えば、完全なる『消滅』を指すがな…」

「へえ…やけに自信、あるんだな。」

「まあ、やりようはいくらでもある…簡単かつ、単刀直入に言うとして『協力』してやる…」

「…何？」

「別に、いらぬなら結構だ…勝手にやるだけ、だから…」

「君にしては、やけに面倒な事をするな…何を企んでいる？」

「別にクロノ…君の理由に比べたら対したことは無いんだけどね…人の封印したトラウマをえぐり出した馬鹿が敵さんにいるんでね…1000倍返しにしてやりたいだけだよ。」

とても…とても、良い笑顔であった…見るものを魅了するような明るい笑顔…しかし、クロノは、その眼光に潜む闇を見逃してしまっていた…

「願ったり…だけど、僕が決める事じゃ無いんだ…艦長を当たってくれ。」

「ありがとうございます」

「別に構わないよ…敵になるよりマシだろう。」

軽口をたたき合いながら二人は部屋を出た…赤面し、茹でタコのようになつたなのは置いて…

「二人とも…ようこそ、スクライアへっ」

「久しぶり、ユーノくん」

「久しぶりだな、ユーノ。」

「ホントに久しぶりだね、5ヶ月ぶりじゃない？…二人とも、元気だった？」

「私は変わりなく…かな。」

「俺は…まあ、特に変化といったら身長が3cm延びたのと蒐集された位…かね。」

「へえ、蒐集…は？」

「だから、リンカーコアをぶち抜かれたんだよ…緑の法衣みたいな袖だったのは、根性で覚えてる。」

「ああ、その人死んだね…」

「馬鹿野郎…あれは巨乳のお姉さんの手だったね、俺は紳士だから痛め付けるとかしねえし…慈悲で一瞬で蒸発させるよ。」

「なんで…いや、野暮ったい話は抜きにして、ほら、着いたよ。」

「お？話しながらだと早いもんだな…なあ、なの…は？」

そこにいたのは、頭に変な…白い狐をデフォルメしたような…理

想を塊にして二乗化したような素敵生物がいた

「ね、ね、かわいいよね、かわいいよねっ?!」

「ネエ」

「…グハツ」

「ちょ、雄理、鼻血が…鼻血が噴水みたいにい?!」

なんとも、しまらない三人組と臨時の一匹であった…

「では、次元震には雄理君が関係している?」

「ええそうよ…こんな話、管理局の人には言いたくないけど、闇の書は今回、最悪の出来になるわ。」

「…なんですって?」

「もう、雄理を蒐集しただけでかなり…400頁は固いわね…え、そんなにっ?!」

「ここからは、オフレコでお願いできるかしら?ブリッジで見てるだろう子には悪いけどね…」

「…エイミィ、もういいわ…ごめんなさいね。」

「さて、全てを話せる訳ではないけど、真実の断片を話すわ…聞い

たら、ライダー達が彼を守る理由も察しがつくわよ？」

「お願いします。」

宇宙戦艦なのに和室というアンバランスな場所にて、過去最悪の最悪について明かされた…破滅への引き金は既に引かれていたのだ…二年前に…

「トラップの心配はிரらないよ…目の着くところは無理が無いレベルで取り除いたし、取り除けなかったのは魔法でセーフティーかけであるし…よつと、ほらなのは、手を」

「うん、よつこいしょつと…ふいい…」

「よつと…魔力で強化しただけでこんなにも跳べるもんなんだな…」

「雄理は、放出は絶望的だけど強化は最高クラスだからね…ほら、ここが見せたかった場所…裏切りの騎士ストルの遺体が埋葬された部屋だよ…ちゃんと調査した後だから危険は…雄理？」

「ユウ君？…大丈夫？」

「何でもないよ…大丈夫…ファング、来いっ！」

何故か雄理は手元にファングメモリを呼び寄せる

【これまた…面妖な場所に呼んだって、こらっ！いきなりメモリモ

い加減にしるよな。」

「すまない、ヴィータ…この間から変な事を思い出してならないのだ…」

「…変な事？」

赤い服の少女…ヴィータは、怪訝そうな表情になる

「古代ベルカの騎士に…左右の騎士甲冑の色を変えて戦う騎士など…いたか？」

「ああ確か…あれ、思い出せねえな…確かに居たはずなのにな…」

二人とも、額を軽く押さえ、頭を振って懸念を振り払う

「私達は何か、重要な事を忘れているのかもしれない…」

「ま、そんな事より人命優先、蒐集に集中しようぜ。」

「そうだな…すまない、急ごう。」

「その前に、あの遺跡を見に行こうぜ…あんゆう場所には強力な魔法生物が守ってることが多いしな。」

「そうだな…無理をする必要は減ったが、早いに越した事は無い…急ごう。」

「ああ…」

二人は飛んでいく…深紅と緋色の閃光になって…
今思えば…これもまた因果の悪戯だったのかもしれない…

俺は…ここを知っている？

【雄理…】

「フアング…ここは、何処なんだ？」

【お前まさか…】

「道に迷ったみたいだね。」

【全く…】

物凄い…物凄い引き寄せられるような感覚に導かれ、ここまで来たけど…

「まるでラビリンス『迷宮』みたいだな…全く先が見えないぞ。」

【ホントにだ…スタッグ居なかったら暗闇に捕われていたところだ…】

「闇の中に…闇の中に居たとしても…光を見失ななければ…だってかな。」

【？】

「何でもない…ん、こっちな？」

【こら、そうやって方向音痴の感覚で進むと…】

「お、なんか明るい部屋に出た。」

【マジかっ?!】

自然光…木漏れ日のような光が部屋に満ちていた

中には水が流れ…さながら庭園のようであり、水が湧き出る所には…夢で出た白い鎧…ガイアメモリ【Nazca】のような鎧の騎士が、座りながら小鳥と戯れている石像があった

「凄い…なんだよコレ…はやくにもみしてやりてえな…」

「全くだ…主はやくにも見せてあげたいような庭園だ…」

「あんたら…この間の通り魔じゃん。」

「ん?…お前はっ?!」

「テメエ!あんときの奴の仲間かっ?!」

「仲間…勘違いしてくれるなよ、今ここにいるのはただの庭園に迷い込んだ奴だよ。」

白いの…シグナムだっけか?が、納得したような顔で問いかけて来た

「そうか…やる気は無いと。」

「此处を壊したくないし…それに、なんか懐かしいし…」

赤いの…ヴィータは、小動物的な安らかな顔で延びをする

「私もだ…平和な頃のベルカの匂いがする…私、ちょっと探検してくる。」

「気をつけるよ…ヴィータ。」

「ん」

ヴィータは、ハンマーを持って走り出した

「なあ、聞きたいことがあるんだけど…いいか？」

「ん？…なんだ、高町。」

知らぬ間に、苗字で呼ぶほど親しまれたようだ

「この間、人の胸部をぶち抜いた奴…緑の法衣の奴んだけどさ…」

「緑の法衣…シャマルがどうかしたのか？」

仲間の名前を平然と吐くとか…シャマル…記憶したぞ

「脱衣ポーカーのイカサマ位は覚悟しとけって言うつといて…アレのせいでトラウマの封印解けたんだしさ…」

表情の乏しい…否、感情の無い表情で答える…

「お前…何者だ？」

雄理は、否、雄理のような何かは答える

「流石に、烈火の将にはバレタか…早いものね…」

クスクスと…少女のようなおしとやかな笑みを零す

「まあ、なんにせよ…すぐに失せるわ…私の愛し子をよろしくね？」

「な…待てっ！」

シグナムが手を延ばしたが遅く…雄理のような何かは気を失い…
歳相応の寝顔をしていた

「全く…何がなんだか。」

「くびい〜…」

「ネエ〜…」

「頭の上の白狐の子…よく懐いているな…」

シグナムは…美由紀のような弟を見守る姉のような表情で雄理に
ひざ枕をしていた

「ここは…」

「気がついたようだな…」

「あなたは…シグナム。」

目が覚めたら…ひざ枕されていた…確か…

「なんか、記憶が飛ぶことが増えたな…確か、庭園で石像を見たところまでは覚え…」

「今、遺跡が崩壊し私達は生き埋め状態だ…」

「マジか…」

「マジだ。」

起きたら、美人にひざ枕されて…しかも生き埋めにされていた…
コレなんて鬱ゲー？

「両端の出入口は駄目か…」

【Stagg】

【Bad】

【Spider】

「とりあえず、壊すのは最終手段だな…他に出入り出来そうな道や穴を探そう。」

「そうだな…苦手とかいつてられないからな…」

シグナムの回りに魔力の球体が浮かぶ

「サーチャー…使えたんだ。」

「ふん、馬鹿にしてくれるな…それより、探すぞ…」

「そつちが集中してる間にスパイダー達が見つけたよ。」

「な…」

「とりあえずは、多少の破壊はしょうがないか…行こう。」

「ああ…」

ちよつと、落ち込んだ顔が可愛いなと思う雄理であった…

「…くそつ…打つ手無しか…」

バグ・ジツガの群が遺跡に群がっており、下手に手を出せば、被害を悪化させるだけであった…

「レイジングハートがあれば…」

「残念だけど…なのはちゃんに魔力に耐えられ無かつたんだから…」

あつても無駄よ…全く、最悪を絵に描いたような状況ね…」

原生生物バグ・ジツガ…サイを大きくしたのような体に、雷を操る力に、魔法を無力化する磁場を発生させる魔導士殺しな生物である

「どうしたら…切り捨てるのは論外、突撃は犬死に…どうすれば、どうしたらいいんだ…僕は…」

「ユウ君…私、また…また…」

絶望と緊張がアースラのブリッジを包む…クロノは自分の父が死んだ時の事を思い出し…戦慄する

「魔力反応感知っ！ コレは…オーバーSっ?!」

「何処からだっ!」

「遺跡から観測…なおも増大中っ!」

突如、遺跡から紅蓮の火柱が上がり…バグ・ジツガの群れの半数が焼き尽くす

「これいつたい…」

「映像…出ますっ!」

モニターに写ったのは、バグ・ジツガの群れをなぎ倒す左右非対称の色の鎧を着た女性であった…

事の始まりはほんの5〜6分前に起きたものであった

「マズイな…魔力が足りねえ…」

「どうしたんだ？」

「いや、単純計算でここから地上までぶち抜くまでに魔力が深刻的に足りないんだよ…コアぶち抜かれた一時的な後遺症なんだけどな？」

「う…」

「でだ…大変厚かましいが協力しないか？」

不振な物を見るような目でシグナムは雄理を見る

「まあ、早い話…」

ドライバーを腰に巻く…なんか、重みが違うな…

「手を貸してくれ。」

雄理の腰に巻かれた物を、いつの間にか自分にも巻かれ、驚いたような表情になるがすぐに察したような表情になる

「ふ、敵にさえ手を差し延べるとはな…心が広いのか、図太いのか…」

「あんたの技でも出れないと思ってな…局所破壊は得意そうでも、広域破壊は不得意そうだしなっ！」

赤いメモリを雄理は、シグナムに放って渡す

「全く、図太い方が…」

【Heat】

【Metal】

「変身っ！」「

【Heat Metal！】

情熱と闘士の旋律が遺跡に響く…いつもと違うのは、サポートに回った魔導士の体が見当たらず、雄理は身長が伸びたような感覚になる

「おかしいな、シグナムの体が見当たらない…」

《残念な知らせがある…》

「あれ？何処にいるのさ？」

《私は…体ごと融合してしまっただらしい…現実逃避しないで、自分の現状をよくみる。》

「づぐう…」

シグナムと変身したら彼女のような体になっていた…確かに彼女のソウルが籠ったメモリを俺が使い変身した筈なのに…シンクロ指数が高すぎなのがいけないのか…てか

「なんか、胸デカイ…肩凝る」

《うるさいっ！やるならさっさとやれっ！》

「ヘイヘイ…スタツグっ！」

【Stagg】

【Metal Maximum Drive】

「スタツグメタル…ブランディングっ！」

天井に向けて放った一撃は何故か火柱となった

結果としては脱出は成功…庭園も火柱の割に何ともなく、バグ・ジツガの群れを怒らせただけに留まった

【Luna】

【Luna Metal!】

「ええい…さっさと何処かに行けっ！」

メタルシャフトは、幻想の記憶…ルナの力を受け、鞭のように延び、バグ・ジツガ達を薙ぎ払う

「シグナム…か？」

「ああ、ヴィータか…とりあえず、お互い命は惜しいだろうから休戦だっ！」

「な…よくわからないけど、わかったっ！」

《どっちなんだ…》

「ツッコんでやるな…ちょっと話してわかったけどあいつ天然入ってるだろ？」

《悪い奴では無いのだけどな…》

「同感だっ！」

【Heat】

【Heat Metal!】

【Metal Maximum Drive!】

「《メタルブランディングっ!》」

爆炎を纏ったメタルシャフトで辺りの敵を薙ぎ払っ…

《よくわからないが、懐かしい感じがするな…》

「そうかい…」

辺りの敵が逃走しだし、危険が無くなった為、メモリを抜き取り変身を解く

「…まさか、女体化を経験するなんて…」

「全く、はた迷惑な話だっ！」

「ホントにそう…だ…?」

変身を解き、身長と体が元に戻ったのを確認し、シグナムの声に反応し、振り返ると…

「小さ…」

「あっはっはっはっ?! 何だよシグナム、その恰好っ！」

いつの間にか来ていたヴィータも爆笑していた…19歳位の女性がヴィータ位の年齢の姿になっているのだ…俺のせい?

「管理局もじきに来るだろうし…早く行きな…体力の限界だ。」

「すまない。」

「わりい、あいつの仲間の割にいい奴だな…」

「妹が世話になったな…今度、ちゃんと叩き込む。」

「じゃあな。」

「おう…またな。」

駄目だ…視界が霞む…無理したせいかな？最近、こんなのはつか
だな…

スタッグやバット達が見守る中、雄理はしばしの仮眠を取ること
にした

「寝てる…だけなんだよね？」

「脳波、リンカーコアの一時的後遺症も無い。純粹に寝ているだけ
さ。」

クロノとなのはが見守る中、雄理は幸せそうに寝ていた…その後、
白狐の子供は無事に親元に帰り、遺跡の周りの原生林へと消えてい
った

「それにしてもだ…雄理のレアスキル…謎が多いな。」

「うん、私も初めて知ったよ。」

二人…ユーノを含めて三人の手元には、バットショットが記録し
ていた映像が写し出されているモニターがあり、遺跡の会話を聞いて
いた

「『本棚』か…確か、ガイアメモリを見つけた遺跡によく書かれて

いる言葉だね…」

「遺跡？」

「発掘の時にね、『我らはまだ、記憶を侮っていた…本棚は人の手におえる物では無かったのだ』なんて書いてあるのが大半…使ったことを後悔するほどの力なんて…」

「とりあえず、僕は、ガイアメモリを保管している聖王教会に問い合わせるよ…なにか知ってるかもしれない。」

「お願いします。」

なのははただ、頭を下げるしか出来なかった

「任せてくれ、これが仕事だしね。」

クロノは、部屋を後にする…

【また、会ったわね、私の愛し子…】

「話は聞かないぞ？」

【残念、今回は違うわ】

「何だよ…」

【せっかちな子は嫌われるわよ？】

「嫌われる位なら結構だ…その方が生きやすい。」

【本性を出したわね…素敵よ、そんな貴方にアドバイス】

少女は、特別嬉しそうな笑みを浮かべる

【貴方は逃げられない…戦いの呪いから、闇の運命からは決して…
ね】

「は？」

【バイバイ 次会う時は全てがわかった時…全てが手遅れの時よ】

「待てっ！くそ、させるか…させねえよ…絶対になっ！」

悪意は…ゆっくりと世界に満ちていく
闇をも喰らいながら…

たまに大ハズレな次回予告

【さあ、ショーの開幕よ】

「もう、駄目なのだ…私はまた…」

「もう、嫌だっ！止めてくれっ！…！」

『グオオオオオオ!!』

「あれが、あいつの正体…」

【闇なんていらぬ…悪意の前に飲まれなさい。】

「そんな…リイン、リインフォー…!」

次回…「Aの鼓動／悪意は止まらない」

止めてやる…俺が、俺達がつ!

第二話 爆炎のS/炎に包まれて（後書き）

ハイスピード展開ですね…次回からもう最終決戦（笑）ですよ。書く前に閑話で八神家の日常を書くべきか…なんか、書いた方がいい気がしてきたな…八神的にハッピーエンドかもしれないけど、雄理的にはDead Eng前みたいなの？

とにかく、ライダーファンのに『絶望を絵に描く』ような状況になるのは間違いない。

その分、癒しも書きたいな…夏休みが又ル過ぎたか？

A・S 一話裏…ヴォルケンリッター達の日記(前書き)

補足のつもり…あくまでつもり

A・S 一話裏…ヴォルケンリッター達の日記

この距離なら…確実に意識を刈り取れる、そう核心して打ち込んだ一撃は、鉄棍により防がれた…今おもえば、この一撃の後に離脱していれば、相手のペースに吞まれなかったかもしれない

不意打ちの一撃を…殺気を最大限抑えた一撃をだ、その後は目も当てられない、シャマルが旅の鏡によるコアの強制摘出をしなければ捕まっていただろう…

最も、摘出した後のシャマルの手はまるで壊死を通り越して腐り落ちていた、シャマルいわく

「この世全ての絶望に触れたよう」…だそうだ。

おまけに、闇の書が殺すようにそのコアから魔力を吸い上げたようだ、コアの魔力を蒐集した闇の書には理解不明の言語や、理解したくない…命を弄ぶような内容の学問の事が444頁…たった一人からの蒐集で444頁が埋まったのだ
ヴィータは喜んだが、私やシャマルは警戒しっぱなしである。

シャマルを喰らい、闇の書に書かれた奇っ怪な学問を扱っあの男が何もしないまま私達を放置しないだろう…

ちなみにシャマルの腕は、闇の書を一頁消費で簡単に治ってしまった

わからない事だらけだが、あの時に蒐集したからなのか、主の容態が回復に向かっているらしい…よかった…

12月 ×日

日記記入者：シグナム

はやての容態が回復してから二日後くらいの夜、はやてが散々うなされた後にいきなり起きて私に抱き着いた

どうやら、友人の男の子が真つ白な図書館のような場所で消えてどこかに行く夢を見たようだ

落ち着かせる為に、二人で八チミツホットミルクを飲んで和んだ消えて行った男の子は、二年前にはやてと図書館であって友達になつたらしい…なんでも、剛体力学やら自然現象について勉強していたらしく、はやてから声をかけて友達になつたようだ

どこか、大人びていて、隙が少ないように見えて、甘いものやモコモコした生き物を撫でている時に隙だらけになる、ギャップが良いらしい

その男の子の話をしているはやての顔は、とても輝いていた

興味を持った私は、ソイツの特徴を聞いたら…なんと、この間シグナムを追い詰めた奴と一致するのだ
ソイツに兄弟はいるのとか、当たり障りの無いレベルで聞いてみたら、姉に兄、妹までいるが、その家の養子のように、本性の両親は殺されたらしい…中々ヘビィな奴だった…私は、アイツの妹？と戦っていた時に感じた「黒いナニカ」は、間違いなくアイツから出ていた…注意しないと

12月 日

日記記入者：ヴィータ

あの透明のコアを抽出し、魔力を蒐集してからおかしな事が多発したのよ

私達がある共通の夢を見るようになったの、その夢は古代ベルカの…私達がまだ、未熟な騎士だったこの夢…

シグナムは初代のヴォルケンリッターの舞台団長に剣を学び、ヴィータちゃんは拾われ、ザフィーラは団長から徒手空拳を学び、私は戦況の見方を学んでいたわ

終り方は、バラバラだけと共通している事はただ一つ…団長が私達、聖王騎士団を、ヴォルケンリッターを裏切った事だけ

そして、はやてちゃんが好きな男の子が消えてしまふ夢…なにか、関係が無いとは思えないのよね…

そして、闇の書に記された理解不能の言語…この世界の抽象文字に似てるけど、全然わからない、コアの持ち主のあの子ならなにかわかるかしら？

12月 日

日記記入者：シャマル

「…あいつ、団長に似てなかったか？」

「確かに、不意打ちにさえ反応する反射神経とあの歳で私の一撃を受け止めた腕力…馬鹿力で理不尽な反射する団長に似てなくはないが…」

「ちよつと、まだ…幼い感じ、かしら？」

「そんなに似ていたのか？」

上から順にヴィータ、シグナム、シャマルにザフィーラ…八神家の火燵を囲っており、火燵の中央には闇の書が置かれて四人に白い目で見られている

「いや、知らないぞ？知らないからな」

「「「「「」」」」」」

「うう…」

喋る本をジト目で見る女性三名と犬？一匹という絵は中々シユールである

結局、日記を読み返しながら謎の現象を少しでも説き明かそうとしたが、わからずじまいであった

A・S 一話裏…ヴォルケンリッター達の日記（後書き）

なんで、ヴォルケンリッターが日記書いてるかとか突っ込んではいけない。

だめなものはだめ…禁句さ

さりげなく、シャマル先生の手が御臨終してた…すぐに治ったけど。

ああ、早くぬこ姉妹を書きたい…書きたいたら書きたい

閑話 とある次元航行艦の執務官…と猫(前書き)

言葉は不用か…

閑話 とある次元航行艦の執務官…と猫

「まったく、君達はなんでいつもいきなりやってるんだっ！」

「師を蔑ろにするなんて…私達はそんな風に育てた覚えは無いわっ！」

「プライベートと仕事の間くらいいい加減にわかれこの馬鹿猫師匠がっ！」

「誰が馬鹿だっ！」

「ぐふうっ！」

次元を旅する戦艦、アースラ…

ここは、その中にある執務官という役職の人の為の部屋である

「…たく、いきなり来るなんて、アポ無しで来るなんて、師として恥ずかしくないのかい、君達は？」

「…だつて、クロノだし。」

「ハモるほどかい…」

今にもorzしてまいそうクロノだが、この二人、猫をベースした使い魔…

リーゼロッテ、リーゼアリア姉妹の前でやると追撃されかねない為、我慢した

「それで、君達はあれか？僕を弄り来ただけなのか？」

「ああ、そうだった…久しぶりにクロノにあつたから本題忘れてたよ。」

「これ、お父様からの正式な書類なんだけど…ヴォルケンリッターの蒐集の被害報告を見たくって。」

「…うん、書類に穴は無いし、席にかけて待っていてくれ。今、データを送るから。」

「データ転送…確認したわ、被害数はまだ少ないのね…」

「何々、被害数はまだ少ないのね…」

「魔法生物が十数件に…人間が一人？」

「管理外世界の住人で、【ライダーズ】の関係者だ。余計な面倒は止めてくれよ…9歳とは言え、戦闘力は既に人外レベルだ。」

「クロスケがそんな言葉を使うなんて…」

「9歳で人外レベルって…」

「具体的には、魔力による強化無しで僕のラウンドシールドを砕いて、バインドを力技で引きちぎったんだよ…」

「魔力構成物を物理的に…しかも、9歳児の力で？」

「多分、何かによる強化はしたんだと思う…その何かは不明なのだ

けどね。」

「無意識下の各ブレイク系魔法の可能性は？」

「それも考えたが魔力量的に、そして、体質的に無理な話なんだ。」

猫姉妹は二人共、頬に指を当て、ぼおっと少し考え…

「魔力量はB位だっけ？」

「体質ってなに…クロスケ？」

「彼は、魔力の放出などが出来ない体質なんだよ…代わりに強化のような体内に働き掛ける魔法は得意みたいだけどね。」

「ふうん、ありがとう…大体わかったわ。」

「どういたしまして、今度は事前に来る事は知らせてくれよ…二人共。」

「わかったから、そんなツンツンしなさんな…クロスケ」

「いい加減、クロスケって言うなっ！」

「わーい、クロスケが怒ったあ」

「待て、この…待たんかあ！」

その後、猫姉妹の片割れと黒い執務官の追いかけてこは、アースラ中に及んだ…

「お父様の計画には問題はなさそうね…」

「問題は彼がターゲットと知り合いという事…」

「ライダーの関係者なら、確実に管理局に利益は齎さない…か。」

「彼はまだ9歳よ？何が出来るというの？」

「良くわからないけど…放って置いたら大惨事になる気がするわ。」

「アリアの勘は当たるからね…しかし、化け物だね、6本のガイアメモリと適合するなんて。」

「常識を疑うわ…普通なら一本でも、発狂するような情報量を補助ありであっても二本同時なんて。」

「闇の書とは別に警戒すべき相手だね…」

「もう、誰にも邪魔はさせないわ…」

二人の猫耳の女性は、闇夜に消えていった…顔に白い仮面を着けて…

閑話 とある次元航行艦の執務官…と猫（後書き）

最近、頭が痛いです。

なぜかって？それは、数学の単位習得の危機だからです。

でも、小説は書くよ／＼。／

A' s3話 Aの鼓動／悪意は止まらない（前書き）

最近、ふたつの小説を同時進行で書くという馬鹿をしまして…
もう言い訳をしない、正直、A' sはそんなに好きではないから
ないがしろにしてしまっています…すまん

A's 3話 Aの鼓動/悪意は止まらない

『舞台は整った…』

暗い部屋に男女が三人…内二人の女性は、猫耳を着けているが、実際には生えているのだ

『闇の書の頁は、想定より早く埋まったが…デュランダルが完成した今、問題はないかと…』

大人しそうな方の手には白い槍のような物が持たれている

『計画は最終段階に移行する…どんな犠牲を払ってでも、奴を…闇の書を封印しよう。』

『はい。』

そこにいたのは…目的の達成と手段の選択を間違えし患者者達だけであった

女体化事件（遺跡の原生生物による事件）から約二週間：ヴォルケンリッターとの小さな小競り合いは何度かあったが、どれも小規模な物ばかり…魔導士の被害は俺以外全く出ていない

それから、事件以来、何度か記憶が飛んだが、それ以外はさほど問題なく進んでいた…ある事を除いては

「お見舞いありがとな、二人共…」

「足、大丈夫か？」

「そついいながら人の足を突くの止めたほういいよ…」

社交的な会話を済ませ、早くもいつもの軽いノリで会話する俺とはやて…

何故か回復の兆候にあった筈のはやての容態は突如悪化…現在、海鳴大の病院にいる

来ているのは俺とすずかの二人だけなのはやフェイトは、用事があるらしく来れなかった

コンコンコン

「はやてちゃん、お加減どうですか？」

「ああ、シャルマ…来てくれたんか。」

三回のノックが聞こえた後に入って来たのは、金髪の女性…なんか、どこかで聞いた声だな？

「あ、シャルマさん…お久しぶりです。」

「あら、すずかちゃん。お久しぶりね。」

「ああつと、始めまして…高町 雄理と言います、よろしく。」

レディには最大限のマナーを…師匠の教えである
すずかはこの人は、知り合いのようだ

「…っ?!は、始めまして、八神 シヤマルというわ…よろしくね…」

一瞬、怯えたような表情になったけど…まさか、男性恐怖症？

「シヤマルさん…少しいいですか？」

まあ、聞きたい事があるし、彼女に外に出ないかと扉の外に指を指す

「ええ、わかったわ…」

なんか、死地に向かう兵士みたいな顔をされましても…

「シヤマルを口説いたらあかんよ、雄理？」

「雄理くん…年上が趣味…」

はやての一言により、さすががしょぼんとした感じになり、場の空気が変に盛り上がる…待てやコラ

「ちげえよ…たく、行きましようか。」

「先に行つててね、はやてちゃんの着替えを仕舞わないと。」

「すみません…じゃ、中庭のベンチで待ってます。」

「ええ、わかったわ。」

「さすがも一緒に行くと言ったが、個人的に聞きたいだけだし、はやてと話してなよ…うん、わかったと軽く会話し、はやてにんじゃ、軽く挨拶し、病室を後にした…今覚えれば、もう少し…もう少しだけ話していたらあんな面倒な事にはならなかったろう…いや、遅かれ早かれああなつたか…」

「お待たせ、寒かったですでしょう？」

「いえ、あ、ココアありがとうございます。」

中庭が外にある病院である為、寒いこの時期は辛い…今夜辺り、雪が降るかもな…

「…それで、聞きたい事って何かしら…高町君？」

「実は…」

「実は…？」

「ちょっと俯いた表情の俺にシヤマルさんは息を飲むような表情になる…八神って事は親戚…まさか…」

「ずっと、八神という苗字を聞いてから思っているのですが…親戚の方ですか？」

「ええ、そうよ。」

「じゃあ、彼女の…はやての容態も知ってるんだろう?」

「…え?」

一目見てわかった、はやての身体麻痺は、良くなった後のリバウ
ンドのように悪化している

「ぱつ見程度だが、足以外にもいくつか動いてなさそうな箇所があ
った…肩とかもう動いてないんじゃないのか?」

「…そうよ、私は…私達は無力なのよ…」

やはり…わかっていたのか、シャマルさん達…他は知らないけど、
彼女らは、はやての余生を共に過ごしに来た訳ではない筈…なら

「お願いだ…はやての麻痺の原因、心辺りでも良い…教えてくれ…
頼むっ…!」

縋るように…人生で初めてかもしれない、他人に、本気で縋るな
んて…

「それは…『言う必要はないぞ…守護騎士よ』…貴方はっ?!」

仮面の奴が二人、病院の屋上から見下すようにこちら見ている…

『高町 雄理…君の人生もまた、ここで終わりだ…』

『君の存在は、我らの計画に誤差では済まないレベルの損害が出て

いる…狩らせてもらっぞ。』

いきなり出て来て、死ねという事は…コイツら、まさか…

「ミュージアムの差し金か？ま、関係ないね…馬鹿となんとやらは、高いところが好きって言うしね…」

「貴方達は…はやてちゃんによく最中モナカをもつて来た不審者…」

あの恰好で街中うろついていたのか…アイツら？

「たく…変身、と言いたい所だけど、ここじゃ危険過ぎる…場所を変えさせてもらっつっ！」

敵さんのテリトリーで必要もなく戦っ程馬鹿ではない…振り切らせてもらっぜっ…！

『く、待てっ！後は頼むぞ…』

『ああ、任せろっ！』

「クラールヴィント…シグナム達に緊急通信を…一筋縄ではいきそ
うに無いわ…」

【j.a】

各々が、己の戦場に足を運ぶ…非日常は何時だって向こうから来る…

《なのは、敵の襲撃だ…相手の見た目は男だが、股関節の運びがもろ女だった…油断するなよ。》

《どこ見てるの…たく、何処で合流？》

《この時期人のいない海鳴臨海公園だ…敵さん、俺を葬る気みたいだ。》

《すぐに行くっ！》

軽いセクハラを交えつつ、なのはに救援を頼む…なんか、嫌な予感がする…

『何処まで逃げる気だっ?!』

適当に仕掛けた罠に引っ掛かってくれたようだ…今なら

【Cyclone】

【Joker!】

「変身っ!」

【Cyclone Joker!】

辺りの枯れた木葉を巻き上げながら、風と切り札の二重奏が響き、

碧と黒の衣を身に纏う

「さあ、おまえの罪を数えろっ！」

『ふん、貴様の方が数えているっ！』

敵は閃光を、自分は拳を…空には、鋼糸による呪縛で飛べない
正に、互いの戦闘技術が雌雄を決するだろう

「それにしても、遅いなあ…シャマル達…」

「そうだよね…あれ？メール？」

「あかんよ、すずかちゃん…病院じゃ携帯の電源は、落とさんと。」

「うん、緊急な事があると思うとね…あれ？フェイトちゃんからだ…」

「フェイトちゃんってあの金髪の？」

「そう…内容は、【すぐにその場からはやてちゃんを連れて逃げて…？】」

「どないな事やる？」

「んん…私もわからない。」

突如、送られて来たメールに首を傾げながら、まあ、トイレ行くか…せやねと談笑していると

『その必要はない…』

「あ、最中の人。」

『その覚え方はこちらが悪いにしても止めてほしかったな…』

少々、俯きがちなながらも気を取り直したように背筋を伸ばす…はやてが自然な様子にすずかは、これが普通なのかと呆気を取られていた

『さて、はやてちゃん…一緒に来てもらおうか？』

「いきなりなんて、私入院中なんよ？」

『問題無いよ…すぐに終わる。』

仮面の奴は、淡い光を出す手をはやてに押し付け、はやては気を失うように眠る…

「はやてちゃ…」

『悪いが、寝てもらおうよ…余計な犠牲はたくさんだ…』

下手人は、はやてを肩に担ぎ、病室を後にする…シャルが来た頃には、空になったベットと脇で寝ているすずかしいなかった…

《すずかちゃんは…》

「眠らされてるだけみたい…何故相手は、ハヤテを…まさかっ！」

《ヴォルケンリッターでは無いと思う…ユウ君なら相手がはっきりわかっていたらちゃんと伝えるし…》

「そうだよ…とりあえず、私はハヤテを捜すね。」

《わかった、私もユウ君を見つけたい連絡するね。》

フェイトは、普段の黒で統一された私服姿ではやてのいた病院にいた

以前と違うのは、動き易さを求めてスカートがパンツに変わったくらいだろう

フェイトは、アースラにいるであろうクロノに連絡を入れる…

「《クロノ、ハヤテが誘拐された…敵は不明、残留魔法陣の式からして古代ベルカ式を使うヴォルケンリッターではないと思う。》」

《了解、すぐにハヤテの搜索を開始する…僕は、多分今回の下手人であろう者の所に行く。》

「《気をつけて…敵は未知数だよ。》」

《現役執務官を侮らなくてくれ…遅れはとらないさ。》

この時、すでに濁り水は、ゆっくりと流れ出していたのであった

悪意はもう止まらない…選択肢はいくらでもあったのに…

『残念だが、もう時間のようだ…意外と早かったな。』

「…なに？」

戦闘時間約30分…お互い、決定打はともかく、まともなやり合
つて無い筈…

何処に俺の敗因がある？

『相方が、闇の書の完全起動の準備を終えたそうだ…我らの計画は、
これで完結する。』

「そんなことをしたら…あんたらもただじゃすまない筈だ。」

『ふ、お前には関係ない…さらばだっ！』

「な、逃げやがった…殺すとかどうしたんだよ、たく……………つぐう
っ?！」

仮面の奴が逃げると同時に、体が動かなくなる…?!

「く…そ…」

意識は、この瞬間から途絶えた、俺はふと、なぜか白い図書館を
思い出していた…

【バイバイ 次会う時は全てがわかった時…全てが手遅れの時よ】

・大体あつてる…かもしれない次回予告・

「この世の終わりなのか…」

【あ、はっはっはっはっはっはっ 最高よ、最高よっあんた！
！】

「なんだ、もう諦めるのか？」

「お前は、なるんだろう？『仮面ライダー』に？」

「所詮、夢なんや…夢は、ただ見るものやのうて、かなえる為に見るんや！」

「悪いが…俺も距離だ！！」

次回…AS最終話

A's 3話 Aの鼓動/悪意は止まらない(後書き)

例によって、予告無視…

もう…疲れた、次はモチべの関係もあるけど2月4日以降になり
そう。

ゴットイーター楽しいがPSPのアナログが死んで俺涙目…天罰だ
ろうか？

A's 4話 悲しみはS/悲劇は時を越えて(前書き)

すいません、しばらくSMY(ソードマスター大和)状態が続きます。マジで申し訳ない、技量が足りないばかりに

A's 4話 悲しみはS / 悲劇は時を越えて

朝露が凍り、霜になる12月…妹は、東京の高校に行き、全寮生
活を送っているだろう

正直、いまだに家にいる自分が情けなくなるが、折角家から近い高
校に奨学金で入ったんだ…

文句は言えないな

「おはよう、美少女が起こしに来とんのに。はようおきんかいつ？
！」

「ば、いきなり入いんじゃねえ?!」

そこにいたのは、ボクサーパンツ一丁の雄理…嬉しくない男の生
着替えである

「な、ななな?!」

「ディアボリックは、やm…」

幼馴染が起こしに来る、いつもの日常、いつもの朝…そこは、残
酷なくらいに優しい世界であった

A's 4話 Fは残酷なまでに / 記憶の道

「なんなの…これは…」

「凄く…黒いね…」

病院内ではやてを探していたフェイトとアルフは驚愕していた
仮面の男がいきなり、守護騎士達からコアを取り出し、蒐集を行っ
たのだ

『なんだ、これはっ!!』

『こんなの…見たことないぞ…』

魔力を持つであろう者だけが存在するであろう、何処までも黒く、
何も無い空間…

彼女らの目の前にいる銀髪の女性もこの状況に動揺しているようだ

「これは…どこかと共鳴している?」

「あ、あの…あなたは?」

勇気を振り絞り、フェイトは彼女に問いかけた…名を

「もう、忘れたな…今は、闇の書と呼ばれていたがな。」

「っ?!」

目の前の女性は、悲しげな表情で名を名乗る

「おや、ここにいたのか…探したよ。」

「あれ?雄理…公園で戦ってたんじゃない?」

「ああ、瞬殺したよ…戦闘中に背中向けるとか、馬鹿だよな？」

「う、うん…」

いつもと違う友人の様子に、少し怪訝に思いながらも、目の前の敵に身構える

「私は…また、主を…」

「そう、お前はまた殺したんだ。」

「私はっ!!！」

「主殺しの不忠の騎士だよなあ…あの時も殺したんだろう？彼を？」

「あ、ああ………」

「今、楽にしてやる…」

雄理は、闇の書に近づき、首筋に手を近づけるが

「なんのつもりだ…フェイト？」

「貴方は雄理じゃない…誰？」

フェイトは、バルディッシュを雄理の首筋に当て、尋問をする
まるで様子の違う相手に、底知れない恐怖を感じながらも、彼女は戦う意思を鈍らせない

「…いつから気づいた？」

「あの時もの所から…雄理は、過去の罪を態々えぐらないから。」

「ハハハ…我ながら失言だったな、折角、邪魔なメス猫を狩ってから来たのにこれじゃ無意味だな。」

自嘲するように、額に手を当て、上を見上げる…辺りは闇に包まれているため、空は見えず、わかるのはお互いの位置のみである

「この空間も、封時結界とは別系統とも気づいてるんじゃないか？」

「ええ、さつきから外に救援を呼んでも返事どころか繋がっている手応えすらないですから。」

「くす、もう地を出しても良いかしら？雄理の姿も嫌いじゃないけど、やはり窮屈なのよね…」

フェイトの返事を華麗にスルーした雄理の声が、突如、二次成長に入ったばかりの少女の声になり、姿が闇に溶ける…

「はじめまして、私の名前は『アラヤ』…最も、雄理から貰った名前のだけだね。」

姿を現したのは、肌が雪のように白く闇のワンピースを身に纏う冷酷な笑みを浮かべ、赤い眼差しで見渡す

『お前…猫がどうとか言っていたな…』

「ああ、あの猫？仮面で真理をごまかせる筈無いのに…馬鹿な子よね、バインドで簀巻きにしてやったわ。優しいでしょ？」

人を小馬鹿にした顔で仮面の男を見下す、最も、上下感覚など死んだ空間なのだが

『貴様…』

「はじめましょう…今は私が主役、その名も無き融合騎もかかって来なさいよ。」

アラヤは、手のひらを上に向け、クイクイと挑発するように動きます…

「その前に、一つ良いですか？」

「あら、礼儀正しい子は好きよ。お姉さんなんでも答えちゃう」
女性の表情は、氷のような冷たい表情が一変、愉快そうな笑い狂った表情になる
ちなみにここまで闇の書…中々に空気である

「ぐう…」

「早くして頂戴な…私、その融合騎に預けたものを返してもらわないと…」

「そうそれです、貴方と彼女の関係を知りたいんですっ！」

「いいわ…冥土のお土産に教えてあげる、彼女は昔、私から大切な物を奪った困ったちゃん…しかも、その奪った物に振り回されているおバカよ？」

「え？」

「早い話、彼女がそうやって主人を食べ、殺しているのは私の持っていた物を隠し持っているから『汚染』されているからよっ!!」

「ぐっ…な…」

先程までフェイトの前にいた女性…アラヤは突如、名も無き融合騎の前に現れ、その腹に手を貫通させ…黒い、この空間以上に黒い何かを抜き取る

「ついでに、貴方の主も貰うわ…今までの利子よ。破壊を振り撒くのは楽しいかったでしょう？」

「思い…出して…きたぞ…貴様が、ストルを殺した…」

「今更遅いわ、悪意に溺れて眠りなさい…」

「アルフっ!!」

「わかったよっ!!」

アラヤの手から崩れ落ちた彼女を受け止める為にアルフが飛ぶ

「さて…返してもらうものは回収したし、もうこの結界は必要ないわね…」

パチンと指を鳴らし、愉快そうに上を向くと黒い空間にヒビが入っ
つていき、崩れ落ちていく

『もっ、茶番はいいか？こちらから行かせてもらっぞっ！』

仮面の男がカードを取り出し、アラヤに投げ付けるが…

「私、猫は嫌いなよね…行きなさい、『ワーム』どもっ！！」

それは、地面から湧くように現れた、黒い『虫』のような生き物に阻まれる

「さっさと殺しなさい…興が冷めたわ…」

黒い虫達は、脱皮するよう外殻が溶けていき、人間の体格に近い姿になる

最も、その姿は醜悪な物であるが

「なにこれ…ふざけてるの？」

「なのはっ！！」

「フェイトちゃん…何、この状況？」

「私にも何がなんだが…」

『くっ…なんだこの虫わっ！！』

「人類に成り代わる宇宙人みたいな物よ、簡単に言えば喰った相手に擬態するの…名前は、ワーム…中々素敵でしょう？」

アラヤは、被虐的な笑みを浮かべるが急に曇った、目に光を写さない顔になる

「中々早いじゃない…鳴海 壮吉…」

「士郎に雄理の様子がおかしいと聞いていたが、遅かったか…」

アラヤの視線先には、白い帽子の渋い男性…鳴海壮吉が居た

その腰には、ロストドライバーが巻かれており…臨戦体勢にあった

「「鳴海おじさん…」」

「君達は、下がっている…相手は情けも何もない悪魔だ…」

「ひどーい、ガイアメモリの副作用で感情が消えていつてる貴方には言われたくない台詞よ？」

「「…へっ?!」」

「ふ、関係ないな…」

【SKULL】

「変身…」

【SKULL!】

周囲に重い、重い重低音が響き、彼の姿は燻し銀の装甲を纏う戦士…仮面ライダースカルになる

『さあ、お前の罪を数えろ…』

「流石に二年前のようにには行かないわよ…現れなさい、ストルっ！
！」

「何っ?!」

地面の黒い霧が集まり、ワーム達をも飲み込んで現れたのは、白い鎧に無骨な片刃剣を携えた騎士であった…

「そんな…ストル、何故…」

意識を取り戻した融合騎の表情は、絶望に染まる…まるで、夜天が新月で漆黒の闇夜になるように…

爆破事件が起きているという通報を受け、刃野はいち早く現場に急行した…彼の勘が告げているのだ…大変な事が起きていると…

「現れなさい、ストルっ!!」

「あれはっ?!」

見るものを墮落させるような顔の女性も気になるが、それ以上に驚いたのは地面から湧くように現れた白い鎧であった

「未確認体…一号だっ?!あれは、二年前に倒された筈なのになっ?!」

突如、彼の前に黒い壁が現れ、それが消えると、未確認体も全て

消えていた…

「何だったんだ、一体…」

彼は、ただ状況に翻弄されるばかりであった…終末を賭けた戦いに弱者はいらないと言わんばかりに…

A's 4話 悲しみはS/悲劇は時を越えて(後書き)

おやっさんの登場&ストル(人形)の登場…ストルについては次回から詳しく掘り下げて行こうかと…

A's 5話 覚醒のW/夢は悪夢(前書き)

思い通りに書けないっ!!

うがぁーp)´、(q

A's 5話 覚醒のW/夢は悪夢

坂道を歩く二人の影…青年の歩幅は大きく、少女の歩幅は小さい

「ちよ、まっつてえな…」

「はやて、貧弱過ぎんぞ…お前、本当に高3か？」

「うる、さい…女の子にはなあ、色々あんねん!…」

色々ってなんだよ…と呟きつつ、はやてから荷物をかっぱらう

「ちよ、なにすんねんっ?!」

「重そうだからな…学校まで持っていくぜ?お嬢様。」

待て、何だその驚いた顔は…

「雄理が甲斐性ある…だと…?」

「てめえ…腸抉るぞ…」

「あ、遅刻してまう?!おっ先い…」

俺が凄むと、はやてが楽しそうに駆けていく…おい

「おい、待てっ?!お、重い…何入ってんだコレ?」

学校に駆けていくはやてをただただ追う俺であった

結果として、学校には間に合った…犠牲はデカかったが

「はい、ホームルーム始めるわよって、高町起きなさい。」

「夕呼先生…死人に鞭打つ行為は勘弁してくれ…」

情けない声が聞こえる…が、その体は微動だにしていない…会話はしているが

その姿からは生氣は微塵も感じられない

最も、我らが3・B担任の香月 夕呼は、そんなことは気にしないが

「あんたの事情なんて関係ないわ…これでホームルームは終わりにするわ。」

雄理の姿は、どこか悲しげに見えた…

「よう、大丈夫か？」

「ああ、アンタか…わりい、朝から馴染みにコキ使われて死にそうだったんだ。」

顔が影に隠れて見えない…なんて、ギャルゲの主人公？

「ああ、わかるわかる。」

名前は、思い出せないが…よく似た苦勞性持ちで、結構話す奴…

名前は確か…

「なんだ、また忘れたのか？失礼だねえホント…」

「悪い悪い、で？何だっけ？」

何故か、聞いてはいけない気がしたが…好奇心に勝てなかった俺は、彼に名前を聞きたくてしようがなかった

「たく、名前は、疾風だ…記憶したか？」

「え？」

視界が、暗転した…

「ここは、一体…体が縮んで…いや、元に戻ったのか。」

目が覚めると、燃え盛る本棚が並ぶ空間に出た…ここは…

「何処だよ…此処？」

分かっているのは、ただ一つ…ここは良くない所であり、この場所が俺を縛っている事だけだ

「燃え盛ってる割に暑くないんだな…不思議。」

燃えている本や木片を掻き分けながら進む

「煙さえ偽物か…」

『いいえ…ここでは貴様が偽物だ。』

「え？」

目の前に居たのは、白い甲冑を身に纏った男…名前は確か…

「アンタ、ストル…だっけ？」

『昔、そう呼ばれていたな…本当に大昔だが。』

急に回想モードに入られても困るのですが…

騎士は、剣で周りの本棚をなぎ払うと剣を地面に突き立てた

『ああ、済まない…なんだっけ？』

「おいつ?!そこからかよっ?!」

『君、高校生のノリだねえ…若いっていいねえ…』

「急にジジイぶんじゃねえ!」

白い騎士は、ほう…と関心したようにこちらを見る、何なんだよ…
…一体

『それが君の素かい?』

「…え？」

やれやれと甲冑の仮面ごしにも分かるようなあからさまな態度を取る

なんか、すげえムカつくんだが…

『君は、そんな自制した状態で彼女に…霊長の無意識集合体に勝てるとも?』

「そんなの…やってみないて『判るさ。』…即答かよ。」

『君は、とても大きな勘違いを一つ…している。』

「勘違い?」

甲冑姿で、人差し指を立てらましても…わけわからんねえ

『復讐は、確実に成功しない。』

「っ?!?!?!」

それは、確信…俺の根底を抉り取る言葉だった…

聞き入れてはいけない…理解してはいけないと頭が言ってくるが耳が聞き入ってしまう

『かつて、僕も復讐にとり憑くかれた男の一人だった…』

「…」

聞くな、憎悪を忘れるな…あの情景を忘れるなっ!!!!!!
頭が割れるように痛い…

『まあ、相手はかなりえらい人でさ…その人の懐の広い事、広い事…だってさ…』

やめろっ！それ以上聞くなっ！！
うるさいな…

『私は、王だ…一々、自分の殺して来た相手の顔は覚えていない…』
やめろっ！！
だまれっ！！

『しかし、殺してきた相手が誰かは決して忘れない…ってさ、普通に聞こえるけど凄じいことじゃないか？だって…自分のしてきた事に責任感じてるんだぞ？』

「責…任？」

幼子をあやすように、雄理の頭を騎士は優しく撫でる

『自分がしてきた事がどのように影響していくのか…なぜそうなるか、それがちゃんとわかる人だったんだな、きっと…』

「その人の名前は？」

『名前は…』

「名前は？…っ?!」

普通に会話していて気がつかなかったが、いつの間にか元の白い

本棚が並んだ空間に居た
そして、俺の影から黒い何かが伸びている

『居心地悪くなって、出てきたな…アラヤ。』

「アラヤって…あの女の子?! 嘘お?!?!」

そこにいたのは、20代前半の女性…黒いドレスに白銀の髪が綺麗だった

『おのれ…』

『いつかの決着を付けよう…ただし、外でなっ!』

「俺を置いていくなよっ!」

俺の声は無視され、二人が消える…どうやって出ると? まず、出口を探すところから始めた

「これは…中々辛いな。」

『当たり前でしょう? 意識は無くても、力は古代ベルカ最強クラスよ?』

白い騎士の猛攻がスカルを襲う…が、紙一重でかわし、マグナムを撃つが、鎧に全て弾かれる…

『貴方のちんけな鉄砲じゃビクとム』コレならどうかな?』しまっ
?!!』

スカルに気を取られていたアラヤは、なのはの接近に気が付けな
かったのだ…

ついさつきまで居た護衛のワームは、騎士の維持に回してしまっ
いたのである

「デイバイン…」

【バスターツ!!】

桃色の閃光が敵を包み、殲滅したと思えば…

『危なかったわ…流石に、直撃は痛いものね…』

アラヤの前には黒い霧が舞っている…スカルが相手をしていた騎
士は居ない

『成る程、騎士の実体化を解き…代わりに構築速度の早い怪人を作
り出したか。』

黒い霧を馬鹿食いする騎士の実体化を解き、代わりにデイバイン
バスターを止めるために大量の怪人を作り出したのだ

「そんな…」

『でも、代わりはデカかったみたいね…そうでしょう?W…』

アラヤは、森の方を見、手を掲げる…辺りの黒い霧は再び怪人の
姿になる

オルフェノクにアンノウン、グロンギやミラーモンスターなど節操無く生み出していく
大型から人程のサイズのものが際限無く現れ、それぞれが攻撃体勢に移る

その姿は、見るもの皆を圧巻する…

『やれっ!!』

振り上げた手を振り下ろし、幾千の軍隊に指示を出す…

怪人やモンスター達はプレスや雷などで攻撃を開始する

「逃げてっ!!」

なのはが呆然とした頭を振り、森の奥にいるであろう人物に警告を発する、その顔は涙を流していた

【Cyclone Joker!】

突如生まれた烈風により全ての攻撃が掻き消され、弾かれていく…その勢いは台風のようにであった

「きゃ?!」

「うぐう!!」

風に巻き込まれ、空を飛んでいたなのはと敵を倒していたフェイトも風に巻き込まれていた

スカルは、帽子を抑えて耐え忍ぶ…

風は敵をも吹き飛ばし、黒き灰燼へと帰す

「凄い…」

「なんなの…今の…」

『ようやく、起きたか…馬鹿弟子め…』

「「へ?？」」

魔法少女二人組が綺麗に八モる

二人は、そして、森の中から一人の男が出て来るのを見る…

『やはり、既に出ていたのね…忌ま忌ましい…』

そこには、左右非対称の鎧を身に纏い、左から白いマフラーがたなびく戦士が現れる…

A's 5話 覚醒のW/夢は悪夢(後書き)

とりあえず、死にたい(; ; ;

なんか、上手く文章が書けない…くそお…

A · S 6話 揃うはV / 悲しみの夜想曲 (前書き)

カユ…ウマ… (ガリガリ…)

A・S 6話 揃うはV/悲しみの夜想曲

「誰…なの？」

『悪いが、質問に答える時間は無い。』

冷徹に、底冷えする声で仮面の戦士は答える
左に黒、右に緑…銀のラインで中央を区切り、赤い複眼が敵を見据える

『さあ、お前の罪を数える…』

腰を見れば、なのは達も見慣れた物、ダブルドライバーが据えられていた

男が右足を半歩後ずらせ、臨戦態勢になる…それと同時に右腕の腕輪がほのかに光り、
右半身を中心に風を身に纏う

「う、凄い風…」

「フェイトちゃん、離れてよう…」

「そんなっ?!」

「たぶん、巻きこまれて泣くはめになるだけ…ここは漁夫の利を得る形になってでも安全を取るべきだよ…執務官になるんでしょう？
だったら、冷静さを欠いたら死んじゃうよ。」

「…」

少しでも、前に進みたかった少女は焦っていたのかもしれない
変わる友の様子に、周りに…自分に

『準備は良い?…空気読んで上げたのだけど?』

『助かるよ、レディ…さあ、ケリをつけよう。俺と貴女の宿命に…』

『ホント、ピッタリな言葉を選ぶわね…良いわ、こちらは最強の駒
で相手してあげる。』

アラヤの足元から、黒い霧が結界の足元一杯に広がる、スカルは
意に返さず、なのはとフェイト達は飛び上がる

「何…これ…」

「うそ…」

霧は一体一体、最強クラスの怪人になっていく…蝙蝠怪人やイカ
デビルなど、かつて、人類を幾千と殺してきた怪人が幾千と現れる
…山の方にはキングダークが3体ほど見える

この時、フェイトは、なのはの下した判断は正しかったのだと実
感した

自分達の足元で戦っている戦士はきっと自分達の事は気にせず戦っ
たろう

なにせ、自分達には、戦う『力』があるのだから

「なあ、シヤマル…これ、夢なんちゃう？」

「いきなりなんですか、はやてちゃん…」

シヤマルが作った夕食を皆で食べながら、はやては考えていた…
へたレで甲斐性無し、そのくせに一途と三拍子揃った男である

根は優しい奴だ、確かに荷物持とうか位は言うかもしれない…が、自分からいう事より、こちらが持つてというのに対し、しょうがないとか悪態つきながらに決まっている…この事から察するに

「あれは、賢者タイムやったな…間違いない。」

「はやてちゃん、よくわかりませんが…女の子がそういうのははしたないと思います。」

「シグナム…賢者タイムってなんだ？」

「お前は知らなくてもいい事だ…ヴィータ。」

子供扱いされて喚くヴィータに、それをあやすシグナム、それを見守るザフィーラに台所に非難したシヤマル…そして、足がちゃんと動く私…

「やっぱり、夢は見るものやない…叶えるものや…」

「主？」

「しかし、どないなしたら…」

「あの…はやてちゃん？」

急に電波な事を言いながら悩み出した家主に困惑する守護騎士達
…グイータは何時もの事と我関せずを通して飯を腹に納める

Piriririri…

「お？電話や…ちよつとごめんな。」

皆に一声かけ、リビングを後にするはやてを一同は、ヤレヤレと
見守っていた

「…もしもし？」

『主はやてっ！大丈夫ですか?!』

「声がでかいわ、ぼけっ！…!」

『す、すいません…』

電話の相手は、はやてが知らない人物であった…いや、どこかで
聞いた声？

「とりあえず…どちらさまですか？」

『ああ…と…ええ…と』

「私は八神 はやて、貴女はどちらさま？」

『いえ、その…私、名前が…』

「まさか…」

『はい、無いんです…長い間に記憶領域にまで汚染が広がっていたみたいで…思い…出せないんです。』

予想外の相手の反応にはやては考えざるえなかった…この二年間、探偵志望の友人に付き合つてミステリーやら推理小説などを読み漁つた灰色の脳髄は、フル回転していた

「まあ、便宜上せつちやんで。」

『せ、せつちやん…ですか？』

主に相手の名前を考える事に関してだが…今は、この『不自然なまでに幸福な現実』から脱出する事にもリソースを割り振る事も忘れない

「名前なんて後でいくらでも考えられるねん…今は脱出の事のみ考えな。」

『そうですね…では、今からこちらにある主のコアと私のコアを共振させ、意識をこちらに引き戻します。』

「ようわからんけど、それで起きられるん？」

『しかし、これだけでは主しか起きられません。』

「私しか？」

『現在、守護騎士プログラムも主同様に鹵獲されています…』

「ほづほづ?」

『今は、雄理さんが敵を引き付けてこちらに気づいていませんが、時間の問題です。』

「それってもしかしたらヤバイんか?」

『最悪、主もろとも雄理さんの敵になる可能性が…』

「うつわ、国宝級の死亡フラグやんか…あいつ、目的の為なら人道的な範疇で見境無しやから…」

『はい、今も全力全壊で敵と戦ってます…あ、顔に一撃入れた。』

電話の先の声が若干焦っていた…そろそろ、行動に移そう

「じゃあ、みんなを起こせばいいんやな?」

『はい、特に方法の指定はありませんが…まさか。』

「夢から起こすのはやっぱり、この方法に限るよな?」

電話先のせつちゃん（仮）が溜息をしていたが気にしないことにしたはやてだった

「く、やっぱり数の暴力は偉大だね…」

「これだけの数に引けを取らないなんて…雄理と鳴海おじさん凄い。」

黒い軍勢の中に異色の戦士と銀の戦士が威風堂々と戦っている敵は幾千、こちらは二人…もはや、フェイトとなのはは数に入っていない

なぜなら、敵はこちらに一切の反応をせず、二人の戦士に集中しているからだ

『だんだん、辛くなって来たな…敗色濃厚だな。』

『それでも、戦う…この命が尽きるまで。』

『熱いな…この季節にはピッタリだ。』

《二人とも、先ほど主はやたと連絡が取れた…すぐに起きるそうだ。》

手を休めることなく、戦士二人は拳に根、銃を振るい、敵を消したい

その姿はショッカーが作り上げた生体兵器の姿でもあった

『正直、村雨さん辺りは暇してると思うんですけど、ねっ！』

『最近、またショッカーの動きが盛んになって来てるからな…増援は望むだけ無駄だ。』

『上等っ！…！』

メモリをサイクロンからルナに変え、伸縮自在の腕を振って敵をなぎ倒し

ルナからヒートに変えて、熱に弱い敵に致命傷を与える

『だいぶ、減ったな…』

『すまんっ！！遅れた！！』

『遅いぞ…V3、あらかたWが食い尽くした後だ。』

『あいつが？』

V3…風見がWを見ていると…

「風見さんっ！」

『なのはちゃんか…済まないが、下がっていてくれ。』

「風見さんまで…」

風見志郎は…否、仮面ライダーV3でさえこの状況の意味は痛いほどに理解していた

今、なのは達が敵に挑んでも圧倒的経験値と覚悟の差で圧殺されるのがオチだ…

言い方は悪いがそれだけでは無い…

最悪、精神を奪われ、体なり死体なりを乗っとられ、利用されるのが最悪の状況だ…

『正直、君達は足手まといだ…何と戦って来たかは俺も知らない。だが、彼の…Wの邪魔をしたく無ければ、後方に居てくれ…』

「ちょっとあんた、そんな言い方はナインじゃないんかいつ!」

しかし、フェイトの使い魔のアルフは黙っていない
主人をバカにされたような風見の物言いに腹を立てたのだ

「アルフ、いいの…わかっていたから…」

「フェイト…」

『すまないが、時間が無い。失礼するっ!』

風見は…V3は戦場へ飛んでいく…
守るために、復讐では無く、今度こそ守るために…

「さて、皆…ちょっとええかな?」

電話を終え、廊下からはやてが帰ってくる

戻って来たはやての笑顔はやたら怖かったと後に鉄槌の騎士は語る…

「なんですか?はやてちゃん、急に改まって。」

「なにか、あつたのですか…主?」

「せや、大事件や…とびつきりの大事件や!!」

「な、なんだよはやてっ!それってっ!」

悪人面ではやてが無い胸を張る

「なんか、今失礼なモノローグが流れたような…」

き、気のせいっすよ…気のせい気のせい

「まあ、ええわ…早い話、今この状況は夢なんやっ！」

「「「は？」」」

完全に犬と化したザフィーラを除き、守護騎士一同が啞然とするとうとう、ここまで来たかと…

「だから、歯を食いしばれ」

「待ってくれはやて…意味が…」

「本当は嫌なんよ…でも、停滞は死を意味するんや…だから、えくでえ〜…」

「主…詳しく話を…」

「はやてちゃんタンマっ！！」

「ウオラアア！！」

「「「いやあああ〜?!?!?!」」」

八神家に三人と一匹の姫がこだました…早い話、はやては皆の頭を気絶するギリギリの位置を的確に狙ったのだ…

家族に手を上げるのは心苦しいが、今後の幸せの為、涙をのんで拳を振るった…

「夢は…ですか…これが？」

「せや…そもそも、シャマルの料理が美味い時点でおかしいと気付くべきやったんや…」

「確かに…」

「ヴィータちゃんっ！…！」

「いや、最初よりマシかもしれないけど…たまたに地雷があるし…」

「うう…」

からかうヴィータに、落ち込むシャマル…確かに、これが本来あるべき日常かもしれない、だが…

「やっぱり、夢なら悪趣味すぎねん…」

「はやて…」

「だからこそ、起きなければいけないんや…」

「そうですね…でも、どうすねば…」

Piriririri…

「はやてちゃん、電話なってますよ。」

「ん…ちょっとごめんな、もしもし？」

『主はやて…騎士達の説得はどうなりましたか？』

『ばつちりやつ』

「では、出口へのナビを開始します…気をつけて、未だに敵陣のど真ん中ですから。」

「心配ご無用や…力強い味方が三人と一匹おるんからな。」

『では、まず主が行った学校…白稜柵へ向かってください。敵の妨害も少なからずあると考えてください。』

「了解や、ほな皆行こかつ！！」

「」「」「はっ！」「」「」

「八神家の初陣や…気張っていくでっ！！」

八神家が行く…夜の町を四人と一匹が…

「いきなり、妨害？かい…」

玄関を出たすぐそこに赤い首輪した白い毛並みの小さなけものがいた…

「なんや、この出オチ…」

「なんでしよう…いぬ？」

「もふっ!！」

怒ったのか身の丈の五倍以上のあるライフル二丁を出すのが、慌てた様子ですぐしまう

「違うみたいだな…ザフィーラ、何言ってるかわかるか？」

「ヴィータ…それは私を遠回しに『犬』と言っているのか？」

「ダウン!ダウン！」

「「うああ?!」「」

「「こ、コイツ…やる気かあ?!」「」

しかし、ライフルはしまっ…そして、小さな手を振って何かを訴えている

「なんか…わかりましたっ!きつと、道案内してくれるんですよ。この子。」

けものは、頭を縦に大きく何回も振り、走り出す

「わ、待てよ…にしてもシヤマル良くわかったな…」

「何となく、はやてちゃんが朝に向かった方向に前足?を向けてましたから…」

「「ああ…」「」

なんとも気が抜ける守護騎士達であった…そんなこんなで白稜柊大付属高校に着いた訳だが…

「もふう…」

「なんや…この迷宮、朝は普通やったのに…」

『主、学校に着きましたか？』

「学校の中が某仮面みたいに迷宮化してるんよ…」

『ナビします、指示に従って下さいっ！…！』

「ほら、ポチも…あれ？」

「さっきからいねえんだよ…」

「おい、あれを…」

「なんや…あれ…」

皆が見たのは、校庭で謎の気色悪い宇宙人相手に無双しているけものであった

手から伸びる光の爪で敵の四肢をバラバラにしていく

「いきましよう、主…彼？のがんばりを無駄にはいけません。」

「せやな、皆急いじ…」

せつちゃん（仮）の誘導のいかにもあり、すぐに目的の部屋に來れた
そこには、『科学準備室』と書かれた札が掲げられていた

『そこにある装置なら因果律を部分的に歪ませて、その空間から脱
出できます。』

「とりあえず、中々ノックしてから入りなさい、八神。」はい、
スイマセン。」

物理教師の 香月夕呼先生が あらわれた

「なんのよう？こちら、実験の失敗で弟分がどっか行ってイラつ
いてるんだけど…」

「弟？…どんな、人ですか？」

「アンタのクラス…まあ、私が担任してるクラスなんだけど、私の
暖めていた、『因果律量子論』の実験で…白い、もっさとした生き
物になっちゃったのよ。」

「それって…大変じゃないですか?!」

「何処探していないし…そのうち帰って来るでしょう?」

香月先生は、酔っているのか、頬を赤くしており…焦燥とした様
子だった

「えっと、実は…」

「わかってる、外に居る連中も含めて部屋に入んなさい。『実験』

を開始するわ。」

「じゃあ…」

「アンタのせいでここいら一帯の因果がメタクそなのよ。早くなさい。」

「…はい。」

意外なまでに、あっさりと承諾されたと思つたら、意外な理由に意気消沈とした
はやてだった…

「艦長…なぜ、加勢出来ないんですかっ!?!」

「本局からの通達よ…無駄な犠牲はいらないと、ミゼット提督からの命令なのよ。」

「くそっ…俺達はどうしたらいいんだ…」

次元航行艦アースラのブリッジの様子である…彼らは本局待機が命ぜられていた

現在、不自由ながらも執務官権限でクロノが別の角度から事件を追っており、責任者であり、親であるリンディも歯がゆい気持ちである

「艦長、クロノ執務官から連絡です。」

「何かしら、アレックス？」

「『下手人を見つけた』…そうです。」

「そう、ありがとう。」

艦内は、静寂に包まれていた…嵐の前の静けさではなく、吹雪の中の山小屋のようである

「艦長っ！本局内の全時空航行システムに異常が発生しましたっ！」

「なんですって?!」

「原因は不明ですが…次元を超えられません!!」

「そんな…馬鹿な事があるの…」

これは、時空管理局始まって以来の重大事件である
個人の移動ポーターも封じられているようで、クロノの
所在を知らせるビーコン信号も消滅していた

「クロノくん…」

絶望をここにも及んでいた…闇は、悪意は次元を侵食する…

A・S 6話 揃うはV/悲しみの夜想曲(後書き)

そろそろ、息切れする…

ほのぼのbaso baso書きたいな…

A・S7 Wの決意／黄昏の一撃（前書き）

うわぁい、ご都合主義満載で大変な事になってきたよっ！！

・推奨BGM

*ディケイド・コンプリートフォーム

『Ride The Wind』

まあ、これ聞きながら書いた…って話だっ！

A・S7 Wの決意／黄昏の一撃

どんな、楽しい時間にも終わりが来るように…
絶望にも終わりがあると思うんだ

A・S7 Wの決意／黄昏の一撃

『いい加減、多すぎるんだよっ!!』

「あら、レディに付き合うのは男の甲斐性でしょう?」

『霊長の無意識の集まりに性別とかあるかっ!!』

「ひっどーい…はい、追加入りませーす。」

『うああ?!』

なんとも、緊張感が無いがれっきとした命の取り合いである
敵は絶えず幾千の軍勢を生み出し、従えて此方を迎え撃つ…
ここまで持った持った雄理のスペックがおかしいのである

『不味いぞV3…このままじゃ、押し切られる。』

『スカル…そもそも、正面きって戦うのはおかしいと思うんだが…』

ライダー達は劣勢を強いられていた…理由は簡単、敵の数が多す

ぎる

個々の力自体はたいした事の無い、殴れば消える虚像だらけだ
しかし、圧倒的『数』がそれを補う

視界を塞ぎ、不安や敵の影からの不意打ちの恐怖を煽る
おまけに、魔法も効かないと来た物だ…どんだけチートだ

「ねえ、暇なんだけど…変身も解いたし、帰って良い？」

『お前、ふざけんなっ！！』

【Trigger】

【Cyclone Trigger!】

切り札の左半身を銃撃手の半身に変え、サイクロンの持つ『高速』
の力を借り

怒涛の連射で、敵をなぎ払う…おまけに風の付加効果で黒い灰が再
結合する前に
吹き飛ばす

「凄い凄い やっぱり、闘争本能って奴？貴方の感情が見えるわ」

『うる…さい、その減らず口…黙らせてやる…』

煽るアラヤに、ばてる雄理…中身は知らないが、明らかに疲れて
いる

長時間、ガイアメモリの力を引き出していた影響である

Wは、スカルと違い二つのガイアメモリのバランスで成り立っている
そのバランスをあえて崩すことで、片方のメモリの力を引き出せる
のである

しかし、それは同時に体にかかる負荷の増大を意味する

これこそ、スカル：鳴海壮吉が恐れていた事態の一つである
雄理は、ガイアメモリとの適合数値が確かに高い
かわりに、受ける副作用の度合いも増大するのだ
強すぎるものは淘汰される：自然の掟である

『Wっ！一度下がれっ！！敵のペースに合わせてるなっ！』

『くっ…』

「あらあら、もっと近づいたらまた取り込んでやったのに…残念

」

余裕を見せる事で相手のペースを崩す：戦いの上等手段の一つだ
戦いのゴールがわからなければ、次第に焦りだす
そうすれば、隙が生まれ状況が変わる…という訳だ
《主達が脱出に成功したっ！全力でやれるぞっ！》

『…』

とりあえず、第一目標かクリアした…後は…

『どうするスカル…敵さん、無限回復持ちみたいだぞ？』

『ふ、だとしたら暴走したあの馬鹿の方が10倍質悪い…』

『あの夜…か。』

『思い出話は後だ、Wが作ったチャンスが無駄に出来んぞっ…！』

『ああ…』

ダブルタイフーンが回転し、大気を取り込み、V3の体は高温となり辺りの雪は水になる…

これこそ、仮面ライダーV3の持つ技の中で最強に食い込む技…

『いくぞ、アラヤ…フッ!!』

赤く輝くV3みた雄理が、援護するように風の弾丸で敵の動きを封じ、雑魚を片付ける

『V3…反転キックっ!!』

アラヤにキックを一撃くわえ、更に空中で体を捻り、もう一撃加える

『く、たいしたこと…』

【ScuII Maximum Drive】

『スカル…エクストリームっ!!』

黒い風がスカルに纏わり付き、天高く飛んだスカルが貫通力の高いキックを食らわせる

『連撃ですって?!くそ…』

アラヤの変身態…黒いドレスは、所々ひび割れ、中の本体…醜悪なドロドロした何かが除く

【Trigger Maximum Drive】

『トリガー…シューティングっ!!』

台風を圧縮し、それを撃ち出したような風の弾丸がアラヤを包み、その装甲を全て引きはがし、本来の姿であるドロドロとした…この世全ての悪意を集めたような姿になる…

『貴様がアラヤ…ふざけるな、貴様の正体はアンリ・マユ（この世全ての悪）…そのカケラが俺が居た本棚に寄生しただけの存在だろうが…』

『おのれ…ぐっ?!がああ?!?!』

『マジカルはやてちゃん…ようやく復活やつ!』

形勢逆転という状況で大きな白い帽子を被り、金髪の蒼眼となつたはやてがアンリマユの中から飛び出す…その手には茶色の本を持ち、金の杖を携えて

「嘘っ?!はやてちゃんが魔法少女になってるっ!私聞いてないっ!」

魔法で透明になり、空に隠れていたなのはが飛び出る…まあ、この状況でこうなったら誰でもツッコミたくなるだろうが…

「なのは…危ないよっ!」

「で、でも…」

「逃げるよ、ほら…ハヤテも急いでっ！」

「じゃ、邪魔者は退散するわ…勝つんよ、W。」

『ああ…任せとけ、夜天の王。』

杖と銃を打ち付け、約束する…これでまた…俺は負けられなくな
った

『貴様…手を抜いていたらつけあがりやがっつてっ!!』

泥の中から女性の上半身が出て来て、W達をを睨み付ける

『全く、スカルの力を叩き込んだのに封印のふの字も起きないとは
な…』

『相手が違いすぎるんだ…俺の時は、俺という蛇口を閉める感じだ
っただけ…今回はほとんど出て来てるし。』

スカルの概念…『封印』は、骸骨…死から連想させる『終焉・停
滞』を方向性を持たせたものである

過去、『始まりの夜』に雄理の暴走をとめたのも一重にこの力があ
ったからである…今は関係ないから割愛するが

『さて、どうしたものか…』

「なんだい…このドロドロしたものは、凶々しいにも程があるぞ…」

『クロノ…どうやって…』

「何、溜まっていた『有給休暇』を使って、『観光』に来ただけさ……」

クロノは、得意げに腕を組み、手に持つ白いカードをチラつかせる

『強かな奴め…まあ、良いがほとんど終わってるぞ。』

「分かってる、後はあいつを倒すだけみたいだけど…あれは？」

『大体はしよると、闇の書であり、過去に様々な世界を滅ぼし、数々の高名な魔導士を死に追いやった犯人。』

「成る程、管理局としても見過ごせない…が、あくまで休暇で来ただけさ。好きにやらせてもらう。」

『後でどうなっても知らんぞ。』

「知らないな、そんな事っ！！」

クロノは、白いカードを同じような感じがする白い杖に変え、それを構える

『なんだよ…それ。』

「休暇のついでに氷結魔法の練習用にね…ギル・グレアム提督に託されたのさ…」

『あの野郎、粹な事を…』

二人の戦士は違いに得物を構える…Wは銃を、クロノは白き氷結

の杖…デュランダルを

「『さあ、お前の罪を数えろっ！』」

戦いが佳境に入った中、海鳴臨海公園に非難したなのは達は、本にいる守護騎士を起こす為に準備をしていた

「細かい事は抜きや…今は、この戦いに勝たなあかんのや…」

《わかっています、主はやて…では、始めます。》

「（ゴクリッ…）」

アンリ・マユ（ごく一部のカケラ）が放つ結界の影響で人が三人しかいない公園で、白銀の三角形の魔法陣が現れ、バリアジャケツト姿のはやてが白い球体にのまれる

「全守護騎士のリンカーコア…送還、構成体を再構築…ヴォルケン・リッター再構築っ！」

白い球体の周りに、赤い球体、桃色の球体、翡翠の球体、蒼の球体が現れ、仮面の奴に破壊された守護騎士達が再構築されていく…

「湖の騎士…シャル…」

「鉄槌の騎士…ヴィータ…」

「盾の守護獣…ザファイラ…」

「烈火の将…シグナム…」

「」「」「我ら、群雲の騎士…主の命に従い、ここに推参っ！」「」「」

それぞれの球体から守護騎士達が現れる…
なんか違う気がするが…この際はスルーしよう

「お帰り…皆…ぐすっ」

「その、ごめんなさい…はやてちゃん…」

「主…もはや、言い訳のしようがございませぬ…」

「ごめんな…はやて…」

「守護獣として失格です…」

「ええねん…別に、よく帰って来てくれたな…みんなあ…」

「「はやて(ちゃん)ー!」「」

「」「主」

八神家は、今ここに復活する…色々な悲しい事があった…人は死に、世界が滅びる事もあった…しかし、その悲しみも今、終わりを迎えようとしている

「よくわかんないけど…よかったね、はやてちゃん…うっ…」

「ハヤテ…よかったよお…ヒグツ…」

「二人にも、迷惑かけたなあ…言い訳のしようがあらへんわ…」

「良いよ…今は、最高のハッピーエンドの為に戦おうっ…！」

「そうだよっ！鳴海おじさん達も戦ってる…雄理はどこにいるかわからないけど、それでも行こうっ…！」

「…うんっ！皆、ほないこかっ…！」

「…はっ…！」

7人の魔導士が空を飛ぶ…今こそ、幸せの…ハッピーエンドの為に

「お父様…！」

「良いのだ…これで、老兵が足を引つ張てはいけないのだよ…リーゼロッテ、アリア…」

「でも…ライダー達に丸投げなんて…」

「何、あの子が行くさ…彼に託したものがどこまで役に立つかはわからないが…私達…闇の書の被害者達の意味を継いで彼は戦う。」

ギル・グレアムとその使い魔のリーゼロッテ・アリアは、モニターに写る惨状を見ていた…この状況を作り出した彼らには、それを納める権利すら今はないのだ…今はただ、身勝手に勝利を祈るのみ…

「勝てよ…クロノ、ユウリ…」

「…クロスケ…」

「艦長っ！モニター、写りますっ！…！」

「映像、急いでっ！」

管理局本局を襲う謎の現象は収まり、現在、先発隊としてアースラが現場に向かっているのだ

「間に合わないかもしれない…でも…」

「間に合います…間に合わせますよ、艦長っ！皆っ！」

「………ああっ！！（おうっ！）」「………」

様々な受け答えが入り交じり、アースラは現場に飛ぶ…

「クライドさん…クロノ…」

その呟きは…嘆きか、勝利への祈りか…それは本人にはかわからない

「凍てつけっ！エターナル・コフィンっ！！」

氷結魔法に特化されたストレージ・デバイス、デュランダルはその氷結魔法を自身で増幅をし、絶対零度の一撃を放てるのだ

【Luna】

【Luna Trigger!】

『ウオォー！！！！』

幻想により自在に軌道を変える金色の弾丸が、凍てついた泥を砕き、削り取る

「やるじゃないか……」

『当たり前だ…俺を誰だと思っただやがる？』

蒼い銃より放たれる弾丸がクロノにかかりそうな泥を撃ち落とし、蒼い杖より放たれる、絶対零度の光弾がWにかかりそうな泥を凍てつかせる

「聖王騎士団…第十三舞台を仕切っていた、裏切りの騎士『W』だろっ?」

『違っな…俺は…』

緑のメモリと黒のメモリに差し替え、風と切り札の二重奏が悪意の泥をはねのけるっ！！

『仮面ライダー（見習い）…Wだっ！』

拳を天高く振り上げ、竜巻が泥を天に巻き上げ、その身を守る

「ディアボリック…エミッション！！」

呪文が紡がれ、黒き球体が泥を吸い、それらを消滅させる…

『美味しい所持って行きやがって…』

「身長伸びて、念願のヒーローになった雄理さんに言われとうないわ。」

『ふん、豆狸が…どうやら魔法も効くみたいだし…なのは、出番だぞ。』

「ふえ?!え?!」

【マスター…ここいらで役立たずの汚名を返上してやりましょう！】

意外な展開になのは付いていけないが、血気盛んな相棒に押されノリで自分が使える得意の一撃を放つ

「ディバイン…」

【バスターっ!!】

桃色の閃光が泥を穿ち、風穴を開ける

「バルディツシュ…私達も…」

「Yes Ser」

「サンダー…」

【Sandal rege】

フェイトもまた、降り注ぐ雷を出して泥を払いの除ける

「レヴァンティン…」

【ja】

シグナムが手にもつ剣から、三発薬莖が飛び出し、剣が鞭のよう
に延びる

「くらえっ!!」

炎が泥を焼き、鞭が焼いた泥を砕いて破壊する

【Heat】

【Heat Trigger】

『喰らえ…』

【Trigger Maximum Drive】

『トリガー…エクスポージョン…』

凄まじい程の炎が泥を焼いていく…既に容赦は無く、せめてもの慈悲なのか最大級の一撃がアンリマユを襲う

『何故…何故、我を否定する…何故…』

『別に否定している訳じゃない…ただ、お前は俺の友を、家族を、仲間を傷付けた…所詮、これはただの八つ当たりさ…』

「同感だ。僕はただ…悪の存在を否定したいんじゃない。君は僕の父を殺し、母を悲しませた犯人みたいだから…その八つ当たりだよ。」

しれっと、クロノは言い放つ…今此処にいるのは管理局所属の執務官ではなく、一人の魔導士…一人の悲しい事件の被害者であると自分に良い聞かせるように

「貴女は…私の兄的な人を泣かせた、それだけでいい…理由はそれ以外にいらないっ!!」

なのはは、決意を固めたように杖を握り直し、構える…

「貴女が何をしてきたかは、私は知らない…けど、だけど友達が泣いているのに黙って見過ごすなんて私には出来ない。」

フェイトは、その胸の内を晒すように言葉を紡ぎ、杖を構える…

「言葉は…不要やつ!!」

長年、自分の家族を苦しめた相手に言い訳もせずに、はやてはその金色の杖を構える…

『全く、同感だ…』

黒き銃にメモリを差し込み、スカルは…鳴海壮吉は、銃を構える…その黒き瞳には、感情を写さずにただ冷酷に己の信念に従い引き金に指を構える

「ああもつ…ぶつ飛ばすだけだつ!!」

【ja】

巨大化したハンマーを構え、鉄槌の騎士ヴィータは、敵を見据える

「今までの…あの時のつけを返してもらおうぞっ!!」

【ja】

シグナムは、レヴァンティンの剣と鞘を繋げ、弓のようにする

「レヴァンティン、第三の姿…今ここにっ!!」

「轟天爆砕…」

【Sculi Maximum Drive】

「響けっ!終焉の笛っ!ラグナロク…」

「疾風迅雷…プラズマザンバー…」

「全力全開…スターライト…」

【Joker Maximum Drive】

ここで余談だが、必ず殺すと書いて、『必殺』という単語が生まれる…もしもだ…もしそんな技が幾つも重なったらどうなるか…考え見て欲しい

「翔ろ、隼!!!」

「ギガント・シュラーク」

シグナムとヴィータの一撃が硬質化した泥を砕く…

『スカル…フルバーストつ!!!』

スカルの放つ、漆黒の弾丸が中から漏れる泥を吹き飛ばし、時間を作る

「…ブレイカーつ!!!」

できた時間で最大レベルで収束された魔法を…なのは、フェイト、はやてが放ち、残りの泥を消滅させ、泥を払いのける

『ジョーカー・エクストリームつ!!!』

Wの…雄理の体が銀のラインを境目に半分に分かれ、露出したアン

リ・マユのコアにキックをそれぞれ当て、ヒビを入れる…Wはコアを足場に天高く飛び上がる…

『来い…ファング、最高の出番だっ！！』

『グオオオオンっ！！』

雪が降る夜…Wは結界を突き破り、空からファングメモリが時空を突き破って降ってくる…

【F a n g】

【F a n g J o k e r！】

Wの右半身は、白くなり…全体的に鋭角な意匠に変わる…
Wは、ドライバーにあるファングメモリから伸びるタクティカルホーンを一瞬の内に三回叩き、その野性の力を解放する…

【F a n g M a x i m u m - D r i v e】

『これで…決まりだっ！ファング・ストランザーっ！！』

Wの体を恐竜の顎 アギト のようなオーラが包み、左足のファングアンクレットからマキシマムセイバーが伸びる…
Wは高速で右回転しながらコアに近づく…アンリ・マユは、残った泥を弾丸のように飛ばすが、全てオーラに阻まれて弾かれる…

『…ありがとう、これで…誰かを憎だりしなくてすむ…』

コアにFの文字が刻まれ、粉々に砕け散る…この時、初めて人類

はカケラとはいえ、悪意に打ち勝ったのである

「…安らかに、闇の中に眠れ…アラヤ…」

ドライバーから、メモリを引き抜き…Wは変身を解く…その姿は、黒い帽子を被り、黒いコートを羽織った黒髪の青年だった

「成る程、帽子が似合う男になってるじゃないか…雄理。」

スカルも変身を解き、何時もの白い帽子に白いスーツの姿…鳴海
壮吉に戻る

「嘘…」

「かつこ…いい…」

バリアジャケットを解いた、なのは達の反応は上記の通りである…

「あかん…反則や…あつ…」

足が弱いままなのを忘れたのか、はやてがバリアジャケットを解くが、案の定倒れそうになるが…

「全く、大丈夫か？」

黒髪の青年…大人になった雄理に支えられる
はやての顔はマツハで真っ赤だ

「どんなからくりかは知らないが…色々と段階を飛ばしてないかい、君は…」

呆れた様子でクロノが普段着姿で歩いてくる…紺のパーカーにジーンズ姿である

「まあ、どうせそんなに長く持たないだろうし…大目に見てくれよ…」

「構わないよ、僕は観光客のクロノ・ハラウオンさ。」

「ククク…」

「ハハハハハハっ！」

男二人が笑い会う…遠くからシグナム達が駆けてくる…最後の一撃でみんな吹き飛ばされたみたいだな

「嘘だろ、おい…」

「そんな…」

「運命とはなんと皮肉な…」

ヴィータ、シャマル、ザフィーラは、大人雄理の姿を見て絶句する…何故なら

「そんな…ストル隊長…」

かつて、裏切った恩師に似ていたから

A・S7 Wの決意／黄昏の一撃（後書き）

次は、敵の正体と何故か大人になった雄理の話…意外と壮大だった敵の正体とは？

次回、【The Final of Childhood / Winter memories】…

直訳は、【子供の頃は終る／冬の記憶】です。

残り少ない雄理達の子供時代をお楽しみに

（・・・）ノシ

雄理の幼少期は、一先ずおしまいです
ビギンズ・ナイトと花見を書いたら、次は高校編…どこかは読めば
わかります

雄理の幼少期最後の闘い…始まります

「あの…えっと…」

「とりあえず、家にいこか…今の時間じゃこの人数を迎えてくれる店は開いてないやろし…」

「そうだな…とりあえず、行こうか…」

時刻が午後の10時…どこの店とかの問題ではない時間である

A · s F i n a l T h e F i n a l o f C h i l d h o o
d / W i n t e r m e m o r i e s

「あかん、暖かいなあ…雄理の背中…」

「寝るなよ…この寒さじゃヤバイ…それに石田先生に連絡入れなきやな…」

「「「「「あ…「「「「「」

そういえば、コイツ病院で入院してたんだと思い出した皆であった自分は自分でこの姿を家族にどう説明すべきかと考えているのだが…

「「「「「」

なのはとフェイトは、もじもじしながら俺の隣を歩く…

「どうした？二人共？」

「あ、いや…なんでもない…」

二人共、赤面して顔を反らす…ほほう…

「とりあえず、二人共…ごめんな…」

「…え？」

「いや、事実上の戦力外通告しちゃったし…怖かったろ？だから、ごめんな？」

「ふえ？！はえっ？！（はわはわ…）」

おお…慌てる慌てる…未来の俺は、女垂らしの才能があるよ
うだな…

いや、『ベース』がそうなのか？

「雄理が女垂らしな件について…」

「全くだな…ハードビルドじゃないぞ…馬鹿弟子？」

「…すみません。」

はやてのツツコミ+バイクを押しながら師匠が咎める…
調子に乗りすぎたな…守護騎士達は、主ほっぼって会議してるし
…中々カオスだな

「それにしても、流石にでかいな…」

「今の俺19くらいみたいだし…まあ、クロノは後に伸びるタイプだからセーフだろう？」

「170越えが確定している君と違って僕は、切実なんだが？」

クロノはパーカー姿だから寒いだろうと俺のコートを貸している…がデカすぎてブカブカなのだが

俺自身は、Heatの『副作用』で寒くない…悪い事ばかりでは無いみたいだな…副作用って

「そろそろやな…この鍵で玄関開くから…はい。」

「ありがとう、えっと…ただいまあ？」

「うん、お帰りい」

雄理は、俯き…玄関前で佇む

「…どないしたん？」

「いや、変な感じしてよ…わりい…言葉に出来ない…」

「とりあえず、中はいろか…皆さんもどうぞ。」

「すまないね…お邪魔させてもらつよ。」

皆は、そろそろと八神家に入っていく…たまたま通り掛かった、アリサとすずかは、何事かと見ながら夜遅いと歩き出す…子供の夜

間の独り歩きは危険である

皆でリビングに集まり、火燵などに集まり、思い思いの場所で冬の寒さで冷えた体を暖める

守護騎士達は、はやてに寄り添い…

なのはとフェイトは雄理の膝の上にいる

「とりあえず、お茶しかないけどどうぞ…」

「いや、助かるよ…温かい。」

雄理の体は、微かに震えている…肌は少し朱がさし、体は冷え切っている

「無茶をし過ぎたな…力を引きだし過ぎだ、馬鹿弟子。」

「はい、すみません…」

鳴海は、雄理にタオルケットをかけてやり、火燵に押し込む

「大丈夫…？」

「ああ…ちょっと、寒いけど平気だ。」

「我慢はするな…副作用は馬鹿に出来ないからな？」

呆れた様子で、風見が部屋に入って来る…やれやれと雄理に近づき、抱き起こす

「お前、眠いだろっ?」

「ああ…すごく眠い…」

「シャマルの部屋に寝かせてください。あそこなら、温かいし。」

「そうか、いいのかい?コイツ、中身はガキだが一応二十代だぞ?」

「彼なら…構いません。早くしないと、寝ちやいますよ?」

「そうか、ありがとう…ほらいくぞ。」

「んん…おやすみ…」

「完全に地が出とるな…おやすみ。」

雄理は、風見の肩を借りて部屋を出ていく…ザフィーラが部屋まで道案内しにいったようだ

「さて、本題だが…当事者がな…」

「そや…なんで、雄理がいきなり大きくなっただん?そこがまず、疑問や。」

【それは、僕たちが説明するよ。】

突然、はやて達の前に現れたのは6本のガイアメモリ…フェイトは少し悲しそうな顔になる、彼らが話す時は、雄理に関してはいつも悲しい話題になるからだ

そんな中…クロノは、あえて静観を貫くようだ

【俺達は、あいつの体を騎士甲冑で覆って守りを固めた…それだけの話さ。】

なのは少し考え、答えを見つけたのか手を挙げて発言する

「それって、ようはバリアジャケットの延長って事？」

【そうだが、それだけじゃない。】

「どうゆう事？」

メモリ達からプレッシャーが滲み出る…なのはやフェイトは息を飲み、手から汗がふきでる

【理想の投影…あの姿は、あいつの理想の姿でもある。皆を守るために、力が最大限に高まる理想の姿があれなんだ…】

「理想の投影…？」

「ようは、あいつは『最強の自分』をあの場に自らの体を依代に送還したんだ。」

「でも、それならなんでストルに姿が似るんだよ…もう、うん千年前の人間だと思ってるんだよ？」

【それは、俺が説明しよう…】

棚の影からファンングメモリが現れる…

普段と違い、強いプレッシャーを感じる

「お前は…」

【覚えているかは知らないが…久しぶりと言っておこう。】

「頭が冴え渡るように思い出して来たぞ…ストルの鎧だったろう、お前。」

【多少、変わったがな…】

「多少って…あれ、あいつは？」

ヴィータは、先程まで居た白い髪の女性…現状、せっちゃん（仮）をさがすが…リビング内には居ない

「彼女なら、雄理の所にいった…やはり心配なんだろう。」

「そうか…」

ヴィータの疑問にシグナムが答える…

その時、辛抱ならないとなのはが質問する

「あの、いいですか？」

「ん、なんだ？高町？」

「雄理…さんの事、ストルって呼んでるけど、それってベルカの人ですよ…どんな関係なんですか？」

「そうだな…どこまで、説明した物が…」

「正直、事実と言い伝えはまるで違う人ですよ…天然だし。」

「自分勝手でもあるな…そのおかげで、アタシは助かったんだけどな。」

「以下同文だ…」

守護騎士達のベターな反応に、なのはは混乱する…ようは、どんな人物なのだろうと

「それで、シグナムの初恋の相手だったよな」

「な、ヴィータっ?!」

ヴィータの発言に一同…主に、なのはとフェイトが反応する
クロノは、面白い事を聞いたとニヤリと笑いながらお茶を啜る…

「確か、シグナム…ストル隊長に会うまで負け無しの新人騎士だったんですよ?」

「そうだな…負けた時、かなり悔しかったがな。」

「その割に、かなりストーリーキングしてたみたいですけどね…よく相談されましたよ?なんか、命狙われてるって。」

「な…」

守護騎士の謎の団結により、シグナムの過去が赤裸々に告白され

ていく

例えば…

- ・ ストルの自主朝練を木陰でストーキング
- ・ 技を盗むと称して、ストルが根を上げるまで練習を強要
- ・ 病気で倒れたストルを看病し、病み上がりの時に模擬戦を申し込む
- ・ レヴァンティンをストルから譲られた夜、レヴァンティンを抱いて寝た…
- などなど…

「な…」

「恋する乙女だったわぁ…シグナム。」

【悪いが、話しを進めるぞ…】

「あら、ごめんなさい。」

ファンゲから感じるプレッシャーが強まり、イラついているが肌で感じたのかシャマルは、暴露をやめて台所に引っ込む

【さて、あいつの正体から話すべきか…】

「正体って…雄理さんは、雄理でしょう?」

いきなりの展開になのはは驚く…高町雄理と言う存在を否定されるようで…

「まさか…あいつ…」

ヴィータは、何かを悟ったように俯いていた顔を上げ、驚愕を隠

せないでいる

【そうだ…あいつは、ストル・ヴォルケインのクローンだ…最も、足りない遺伝子情報は他人から持ってきているようだけな…】

「なぜ、そんな事を知っているんですか？」

空気が重く、唇が渴く…

【雄理は昔から見ているからな…生まれた時から、あいつがこの世に生ずる時から…ずっと、側に居た。】

「生まれた時から？」

【クローン元となるストル・ヴォルケインの遺伝子情報は私が提供した…それだけの話だ。】

「嘘…でしょう？」

「何故、そのような死者を冒瀆するような…」

【時代が、世界が彼を…雄理を望んだのだ。ストルは、跡付けみたいな物だがあいつ違う…明確なターゲットを持って生まれた、いや、生み出された『兵器』だ。】

「それは、俺達仮面ライダーに言える事だな…あるものは理不尽な暴力から人々を守る為…あるものは、復讐の為に…あるものは自然に、何かの意志に選ばれて…等、理由は様々だがな。」

風見が、スーパーの袋を持ってリビングに入って来る

肩が微かに濡れている所をみると買物してきたようだ

「ほら、鍋の材料買ってきたぞ。俺は、雄理を起こしてこよう。」

「それなら、私が起こしてきますね。」

「頼むよ…フェイトちゃん。」

「はい。」

フェイトがリビングを出ていく、足音が小さいところを見ると、雄理に気を使っているようだ

「そういえば、壮吉のバイクがなかったが…どこに行ったか知らないか？」

「彼は、次の仕事があるから行ったぞ…」

「でも、明日のなのはちゃんちでやるパーティーには戻るらしいで。」

「そうだった、すぐに帰らなきゃ?!」

「俺が送ろう…雄理は置いていけど。今動かすのは体にさわるからな。」

「ありがとございます。そうだ、フェイトちゃんも…フェイトちゃん、風見さんが送ってくれるって…フェイトちゃん?」

いつの間にか、リビングに戻っていたフェイトが部屋の隅で体育

座りをし、のの字を書いていた

「な、なのはあ…」

「ど、どうしたの…凄い、顔になってるよ?」

フェイトの目からは大粒の涙が流れ、顔はぐちゃぐちゃになっている…

「雄理が…雄理があ…」

「ユウ君がどうしたのっ!!」

「お…」

「…お?」

「女の人を抱いてるう…」

「…へっ?」

部屋の空気が凍り付く、それも絶対零度に…過去稀にみる修羅場である

「ほおっ…どれ、少し見にいこか。」

皆を促すはやての肩をクロノが掴み、デバイスを起動してモニターを出す

「待て、わざわざリスクを侵す必要は無い…映像、出るぞ。」

「便利やなあ…魔法、割とノリで使ったけど…これ、盗撮にならんの？」

「楽しむ為なら、多少のリスクは侵すさ…何、バレ無ければいい。」

「それでいいんか…現役執務官…」

それでも、視線は真剣である…その目はまるで、浮気調査を依頼する女性のようにだと…鳴海がいたら思ったであろう

「嘘…」

「ほう…」

「…」

「大胆だな。」

「これが魔法か…便利だな。」

【ああ、これは…しまったな…】

モニターには、ベットにスーツを脱ぎ…軽目な服装の雄理が、せつちゃん（仮）を抱いて寝ている映像が流れていた…

「修正が必要みたいなの…」

「ハイジヨハイジヨハイジヨハイジヨ…」

「シグナム、怖ええぞ…」

「みんな、鍋食べて落ち着きましよう…ね？」

土鍋を持ったシャマルと受け皿を持ったヴィータがリビングに来る…よくわからないが、放っておくと取り戻した我が家を失いそう
で本気でシャマルは止める

「シャマルが…作ったん？コレ？」

「そうですね…何か変ですか？」

「あれ、正夢だったんか…」

皆の胃袋の心配をしたはやてがつまみ食いをするが、意外な事に
美味くて驚愕する…

「とりあえず、食べてから考えよか。」

「そうですね主、原が減っては戦は出来ないといえますし…」

とりあえず、問題の先送りを選択した一同であった…

「ん…俺は、そうか…寝てたのか…ん？」

雄理は、疲労から来る深い眠りから目が覚める…彼をファンゲが
兵器と断じたのはこう言った事もあるのだろう

「ん…むう…」

「なんで、リインが隣で寝てるんだよ…訳わからねえ…」

額を抑え、頭を振る…眠気で麻痺した頭を回転させるが原因は…
一つだけ思いあつたた

「俺があいつに似てるからか…受け入れていたとは言え、こちらへんに影響あるとか予想外過ぎるぞ。」

雄理は、手早くかけてあつたスーツと帽子を被り、ドアノブに手をかけるが…

「行くな…ストル…」

せつちゃん(仮)…リイン・フォースの寝言に足が止まる

「悪いな…俺はストルじゃないし…それに全部、俺のせいだからな。けじめはつけるさ…」

雄理は帽子を深く被り直し、部屋を出ていく…

「ユウ君がいない？」

「さっき、サーチャーを見たが彼女しかいない…家の近くに反応が無いがそう遠くに行っていない筈だっ!!！」

【あいつ、まさか…】

「ファングは、何か心辺りがあるの？」

【崖だ…あいつ、よく崖の上で町をみるのが好きだった…最悪、死ぬつもりかも知れない…くそ、責任感だけは一人前かつ！】

ファングは、時空にヒビを入れ、そこからどこかに行ってしまった…

「どうせ、海鳴山の方の展望用の崖だ…俺はバイクで先行するっ！」

「私もっ！」

「本気で行くから無理だ…じゃ！」

ヘルメットを引つつかみ、愛車に跨がり風見は走り去る…

「私達も行こうっ！！！」

「はやては、私が押してくぞっ！」

「助かるは、ヴィータっ！」

皆、崖に向かって走り出す…原作において、悲しみの別れがあったあの舞台に…

「全く、しつこい奴は嫌われるって知らないのか？」

崖の上で、長い黒髪をたなびかせる女性が白いメモリを無言で構える

【Fang!】

女性の姿は、白い騎士甲冑…かつて、古代ベルカにおいて最強の名に近い男…『ストル・ヴォルケイン』の騎士甲冑であった

「だんまりか…まあ、悪くないけどな…」

腰にダブルドライバーをセットし、メモリを差し込む…帽子を脱ぎ、左手に持つ

【Cyclone】

【Joker】

「変身…」

【Cyclone Joker!】

風と切り札の旋律が響き、帽子が分解されて白いマフラーとなる
雄理は、Wサイクロンジョーカー…風の戦士の姿になる

『さあ、お前の罪を…数える…』

『いくぞ…Wっ…!』

『ハアアアアっ!!』』

騎士が左手に持つ剣で凧ぐと、Wはそれを屈んで避け
Wが足払いをすると騎士は跳んで間合いを取る

『やるな…アラヤ。』

『わかっていたね…でも、コレで全ておしまい。勝てば、貴方は悪
意の呪縛から解放される。』

『そうか…』

【J o k e r M a x i m u m - D r i v e】

風が吹き、Wは天高く舞う…本来ある威力の範疇だが、その力は
絶大である

対して、騎士…アラヤは、剣に光を集め、下段に構える…

【ジョーカー…】

『破牙…』

【エクトリームっ!!】

『一線っ!!…』

剣からほとばしる閃光と風の一撃がぶつかり合い、辺りの雪が飛
ぶ…剣の閃光がWを二つに割ったが…

『いけえ!!』

『ぐ、アアアアアっ!!』

二つに割れたWが、それぞれ別々に騎士の鎧にキックを叩き込み、
反転し着地、再結合する…

『すまないな…介錯…たすかったぞ…』

『気にするな…忘れないから、忘れないからな。』

『ふ、お前も変わった男だよ…しかし、お前は悪意に打ち勝った…
コレで、君は苦しみから一先ず解放される…もう、あの悪夢も見な
いだろっ。』

『そう、か…』

『じゃあの…仮面ライダー…W。本棚でお前の生き様…見ているか
らな…』

『ああ…』

雪のように白い鎧は砕け…女性は…冬の夜空に霧散した…その姿
はまるで、粉雪のようであった…

ドライバーからメモリを引き抜き、変身を解除する…戻った姿は、
大人ような姿では無く、元の子供の姿だった…

「ふう…やべえ、腹減った…」

近くのベンチに腰をかけ、息を整える…短い戦いだったが、辺りの雪が無くなる程の戦いだ…疲れないはずが無い

「君、少し良いかい？」

「はい？」

白髪頭で眼鏡をしている男性が話し掛けて来た…身のこなしが、一般人のものではないが殺気は殺しても漏れるもの…だから、殺気は無いから気にしない

「僕は、高畑つて名前なんだけど…ここで『花火』をしていた人達はいないかったかい？危ないから注意しないと。」

「眼鏡のお兄さん…こんな寒空に花火なんて粋だけど、そんな人達はもういないよ。」

「そうかい、ありがとう…助かったよ。でも…」

「…？」

高畑は、雄理の隣に腰掛けて空を見る

「君から漏れてる魔力が明らかに普通じゃないし、こんな雪の無い場所で一人ぼつんと居てそんな事いうと、説得力のカケラも無いよ？と行っても君なら平気そうだ…じゃあね、少年君。」

高畑は、ベンチから腰を上げて歩き去る…どこと無く、ハードボイルドだ…

「なんか、色々とすごい人だったな…」

「雄理っ！！」

「あ、風見さん。」

「お前、無事だったのか…」

「そことなく人を殺さないで下さい。まだ、10にもなってないのに死ぬとか有り得んですよ?」

「よかった…よかった…」

「風見さん…苦しい…ファングは頭に乗るんじゃない…」

【知るか…馬鹿野郎が…】

バイクから下り、駆け付けた風見は雄理を抱きしめる
ファングは、雄理の頭に陣取りしがみつく

「けりは…付けたのか?」

「…うん。」

「そうか、帰るか?」

「ああ、帰るよ。」

「よし、行こう。」

「雄理…バイクってな、早く走ると何も聞こえないらしい…」

「…え」

「さあ、いくぞ…みんな待ってる。」

「うん…」

雄理は風見からヘルメットを受け取り、跨がる…風見はエンジンをふかしてバイクを走らせる…走り去るバイクからは、キラリと光る何かが飛んでいた…

「お帰り、雄理。」

「ただいま…父さん、母さん。」

「ユウ君、目が赤いけど大丈夫？」

「ああ…平気。」

翠屋まで送られた雄理は、目が少し赤かったけど…男なら、ツッコんではいけない

「雄理、泥だらけじゃない…お風呂沸いてるから行ってきなさい。」

「はい。」

「私も行くー」

「いや、待てよ。」

風見に事情を聞いた高町夫妻は、涙ぐんでいた…雄理は過去に決着を付けた…それだけで、雄理はこれから前に進める…それだけだ

「なのはズルいつ！私も…」

【Bat】

「足止めよろしく。」

「「うわ、眩しっ?!」」

雄理は、バットショットを起動して足止めさせる
部屋に戻って着替えを持ち、風呂に駆け込み鍵を閉める

「は、はやい…」

「父さん、あれ…神速じゃ…」

「才能があるなあ…後が大変そうだろうけどね。」

「雄理、明日筋肉痛だな…」

「しょうがない、明日はパーティーだし…朝の鍛練はおやすみだな。」

「わかった、美由紀には俺が伝えておく。」

「よろしくな、恭也。」

高町家の男二人が笑い会つ…末っ子二人の成長を気にかけてながら

「ああ…疲れた…」

浴槽に浸かりながら考えていた…

自分の事を…本棚の事を…

「繋がるようになったのかなあ…なったらなつたで困るけど。」

体中の力を抜き、極限までだれる…

意識を虚空の彼方に追いやり、自分を無くす…

「ああ…いい湯だ…」

何も、考えないようにしているのに…頭が勝手に考えてしまう…
…どうして、彼女を救えなかったのかと…

「どこぞの自称正義の味方みたいな事を考えてもしかないか…所詮、
卓上の空論、無い物ねだりだからな…でもまあ、忘れないようには
するかな…」

雄理はその日、風呂から出た後明日の準備を手伝い、夕食を食べ
て寝た…

途中、甘党提督が来て色々大変だったとここに記す

「ん…ああ、朝の鍛練の時間だよな…体いてえ…」

とてもではないが、9歳児の発言とは思えない台詞を吐いて雄理は起きる…

「筋肉痛には、運動だな…一走りしますかな。」

【無理は体に触るぞ…雄理。】

「フアングおはよう…一緒にくるか？」

【話聞いてないだろう…】

雄理は、部屋の箆笥からジャージとマフラー、手袋を出して着替える

「さて、行ってきまーす。」

走り始めて5分、臨海公園に差し掛かる

「む？雄理か？」

「シグナム…さん、おはよう。」

臨海公園の前にある八神家から、赤いジャージ姿のシグナムが出て来る

「さんはいらぬい…今更、畏まった態度も疲れるだらう?」

「じゃあ、遠慮なく…シグナムはやっぱり落ち着いてられない感じ?」

「半分当たって、半分外れてるな…今までちゃんと出来なかった生活習慣を取り戻せるんだ。寝るのも少し勿体ない。」

「成る程…じゃあ、一緒に走るか?」

「おもしろい…ゴールは、海鳴山の展望台だ。」

「OK、早く行こう。」

身長は大分違う筈のに、雄理はシグナムと楽々と着いていく
そうこうしてる間にあっという間に展望台に着いてしまう

「凄いな…その歳でそれだけ…走れるなんて、脱帽したぞ…」

「今日は軽目のコース。何時もの休みなら、山頂まで行くよ。」

「スパルタだな…」

「命かかってるから、弱音を吐くなんて出来やしないさ…」

「パーティー、10時頃だから…じゃ、また後で。」

「わかった、主達に伝えておこう。それではな…雄理。」

「またなっ!!」

雄理は、元気よく山を下っていった…
途中、足を滑らせてドリフト気味だったのはご愛嬌？

「……メリークリスマスっ！」「……」

過半数の男性諸君には、悲しい日がやって来た（うp主も該当する）

翠屋は、何時もと違いCloseの看板が立てられ、貸し切りの貼紙がされている

アリサやすずか、はやてにフェイト、なのはは集まって楽しく談笑し

桃子にアリシア、プレシア、リンディのママさん組は子供・孫達について話し合い

士郎、鳴海のパパさん組は娘自慢をしていた

ヴォルケンリッターとクロノは、今後について話し合っており、管理局の一部の人達は死刑にしたいようだが、クロノのとしては、罪を憎んで人を憎まず、そもそも闇の書は雄理達が完全に破壊してしまったので管理局が今更首を突っ込むのはおかしいとすら考え、賛同者を集めているらしい…

雄理とフアングは…

「…」

【…】

外のテラスで雪を眺めていた…それに気付いたフェイトは、雄理に近づく

「寒くないの？」

「ああ…ちよつとな、二年前を思い出していたんだ…」

「…二年前？」

「そう、二年前…俺にとっての始まりの夜…『ビギンズ・ナイト』を…」

「ビギンズ…ナイト…？」

「中に入ろう…プレゼント交換始まるみたいだ。」

「う、うんっ！！」

フェイトと雄理は店に入っていく…ファンクもそれについていく…

少年の苦難は、生きていく上で幾つもあるだろう…もしかしたら、その中で死んでしまいかもしれない
しかし、彼は逃げないだろう…何故なら彼は仮面ライダーを目指すもの

例え孤独でも、命有る限り闘い続ける呪われた戦士だから…

この次は、始まりの夜…ビギンズ・ナイトです。

彼が戦う理由、彼が何をしてしまったかがわかる筈です。

始まりの夜…ヒギンズ・ナイト(前書き)

駆け足気味だけど、これで本編は完結…後は、自己満足くらいに花見を残すだけになりました…ご愛読、ありがとうございます。

次回作、W 異界と記憶の物語 (暫定のタイトルの為、変更あり)となり

雄理達は高校生から始まりますが、流石に飛びすぎなのでワンクッション置いて受験戦争から始まります…

推進BGM

・Movie対戦2010テーマソング

始まりの夜…ヒギンズ・ナイト

「表情が冴えないね…ユウ君…」

「うん…二年前の事、思い出してるみたい…」

空を見つめる雄理をなのはとフェイトが心配そうに見つめる…

「あ…そう、なんだ…」

「ねえ…二年前、何があったか知らない？」

「私も、聞いた事ないよ…」

雄理はコートを羽織って外に出る…

「あ、外に出ちゃったっ?!」

「追っよ、なのは。」

「うんって、鳴海おじさん…そこどいて下さい…外出れません。」

鳴海は玄関に続く道におり、外に出れない

「あいつは、墓参りに行った…そっと、しておいてやれ…」

「」「」

そう聞いたなのは達は黙るしかなかった…

「さ、まだパーティーの途中だ…俺の妻が娘を連れて来るんだ。仲良くしゃってくれ。」

「はい。」

「鳴海おじさんの娘さん…どんな子だろう？」

「元気だけが取り得の子だか…自慢の娘だよ。」

とりあえず、ここは矛を収める二人だった…

「さむっ…そういえば、あの日もこんな天気だったよな。」

【そうだな…雪もちょうど降っていたな。】

ファングがコートの中において、こちらの問いに答える…

あの日もちょうど、こんな天気だった

「おはよう、調子はどうだね。」

「…」

「だんまりか、別に構わんがね。」

いつもの部屋、いつもの天井…この場所には空が無かった
かろうじて、月が見えるくらい…

父が居た頃は外にも出れたし風もよく感じた
でもここではずっと、宝石みたいなカプセルの中で一人、浮かんで
いた…

「これより、新ガイアメモリのデータ抽出実験を…なんだっ！この
揺れは…！」

『B1区画に侵入者っ！こちらに向かっています…！』

「くそ、せめて司書だけでも「それは困るな…」だれだっ…！」

広いホールのような部屋に緊張が走る…奥の暗がりから
白い帽子に白いスーツを着た男が現れる

「何、その子に用のある…通りすがりの探偵さ。」

「ぶざいやがって…」

【Triceratops】

『コイツで蹴散らしてやるっ…！』

研究員は、トリケラトプスのガイアメモリでドーパントになる…
後から、マスカレイドのドーパントも沸いてきて
白い帽子の探偵…鳴海壮吉は取り囲まれる

「仕事でガイアメモリは使わない主義だったが…矢も得ないか。」

『それは、ロストドライバーっ！なぜ貴様が?!』

【Skull】

「変身…」

【Skull…】

執行者の旋律が響き、研究施設は不吉な風で荒らされる
風が止み、発生源に立っていたのは白い帽子を被った
燻し銀の戦士…仮面ライダー・スカルである

『さあ、お前の罪を数えろ…』

それは、明確な刑の執行宣言である…スカルをマスカレイド・ド
ーパント（M・Dと略す）が取り囲み、トリケラトプス・ドーパ
ント（T・Dと略す）がカプセルを弄り、中から少年を取り出し腰に
抱える

『ここは任せた。』

『ほう、だが前がお留守だぞ?』

『何?!があっ!?!』

逃げようとするT・Dをスカルが蹴り飛ばし、少年を奪い取る
少年は気絶しているようでピクリとも動かない

も見れない。」

少年は、そう言って本に目を落とす…青年はどうしたものかと考えていると

遠くから黒い羽衣の女性が近づいてくる

「そう…なら、貴方に力を貸してあげる。」

「あんたは？」

「この本が全て知っている。これさえ読めばわかるわ。」

「ふうん…タイトルは…「アラヤ」？人類の無意識集合体の事か？」

「博識ね…ほら、早くしないと取り上げるわよ？」

「わ、読むっ！！！」

本のタイトルを聞いた青年が止めようとするが、一足先に少年が本を開いてしまう…

『さあ、絶望が始まるよ…』

「え？」

白い退屈だけど楽しい図書館は、黒い炎と泥で覆われた

『喰らえっ!!!』

『見境ないか…あの小僧は。』

スカルは、少年を担いで施設内を走っている
一般人も居る為、人が少ないルートを選んで進んでいる

『当たれこのっ!!!』

『しまった!』

T・Dの放つ角飛ばしの衝撃で少年を取りこぼす
それだけではなく、攻撃のせいで床が抜けて穴に落ちていく

『く、間に合え!』

スカルも穴に飛び込み、追うが穴の奥そこに居たのは
両足で立っていた少年を白い恐竜のようなガジェットだった

【F a n g】

「…」

【F a n g】

少年を青白い球体が包み、白い鋭角的な鎧を姿を現す
左手には無骨な片刃剣が握られていた

『また、未確認のメモリか…やはり、司書h『失せる…』かは?!』

『うざつたい男だ…自重も出来んのか？』

『敵では無い様だが…味方でも無さそうだ。』

近づいたトリケラトプス・ドーパントを持っている剣で一閃…それだけでメモリブレイクしてしまった

他のドーパントも、ただ剣を振り回すだけでブレイクしていく

『準備運動はこの程度で良いかな…他いくか。』

騎士は、剣を一閃して時空を切り裂く

『貴方も、止めたくば追ってくるの良い…もう、俺は止まらない。』

『まてっ！』

騎士はそのまま引き裂かれた時空の彼方に消える…スカルは匍匐になってくれた仲間に転位先の座標を教えて後を追う…

『1111は…地球か？』

スカルが現れたのは、森のようだが舗装された道が目立つ場所…海鳴臨海公園であった

『ふんっ！』

『ガアアアアアっ!』

そこで目にしたのは、ドーパントを狩っている白い騎士だった。切り裂かれたドーパントは、人間に戻り衰弱した体からメモリが飛び出し砕け散る

『あらかた片付いたか…メモリを引き付ける電波で誘い出すのは正解だったか。面白いようにドーパント共が引き付けられてくる。』

『お前…何をしている?』

騎士の回りには、気絶した人間の山が出来ていた…この町にこれだけのメモリ使用者がいた事に驚くが、短時間にこれだけのドーパントを倒した騎士にも驚きである

『何、この町のゴミ掃除さ。コピーメモリはこの世にあってはならない害悪だ。あんたもわかるだろう?』

『確かに、コピーメモリは人を傷つけ、貶て破壊する…だが、お前がやっている事はただの虐殺だ。断じて正義の行いでは無い。』

『…何?』

『さあ、お前の罪を数えろ…』

スカルと騎士が激突する…騎士は剣を振り、スカルは手に持つ銃で剣の起動をずらす

スカルは、気絶した人に被害が出ないように騎士を誘導している挑発に乗り、冷静さをかいた騎士は誘導に面白いように着いていく…

『くそ…何故当たらないっ！』

剣撃が当たらない事に焦りを覚え、騎士は居合のように剣を構え…

『破牙…一閃っ！！』

空間を一閃する…切り裂かれた空間は細かい粒子になり、散り散りになって分解される…

『これは危ないな…』

『消え失せるおっ！！』

呆然するスカルに容赦無く剣を振る…その姿は、誇り高い騎士の姿では無く復讐する者…アヴェンジャーのようであった

『俺は…俺は両親を殺した奴らドーパントを倒し尽くす…』

『崇高な目的だが、何か勘違いしてないか…小僧？』

スカルは、銃を構え…傷ついた帽子を深く被り直す

『踏み付けにしてきた奴らの分だけ、お前も傷つくんだぞ？』

『知るかっ！』

『く…』

聞く耳持たずの騎士にスカルは苦戦する…こちらの説得に応じてくれれば御の字だと考えていたがここまでとは予想外であった…

『やはり、司書故の僻害か…闇に吞まれているのか…』

原因はスカルにはわからない…しかし、司書の力を持つ者は人以上に悪意にさらされやすいと依頼人に聞いた…なら、やるべき事はただ一つ…！

『もう一度言う…お前の罪を数える…』

『ウオオオオツ…！』

【Skull Maximum-Drive】

『スカル…フルバーストっ！』

何事も、終わってみると呆気ないものである…執行者の銃から放たれた黒い弾丸が騎士を貫き、骸骨のシルエットの『S』が胸に刻まれる

『くそ…くそ、くそ、くそ、くそ、くそ、くそ…』

『少し、頭を冷やせ…』

鎧が碎け、病人服のような少年の姿に戻る…それを確認したスカルは、ドライバーからメモリを引き抜き、変身を解除する…

「なん…で…」

「坊主…名前は？」

殺されると思っていたのか、少年は呻く…鳴海は少年を抱き抱えて仲間に連絡をする為に電話を取り出す

「…覚えて…ない…」

「そつか、なら…」

「…？」

鳴海は、少し考えて…

「娘がいるんだけどな…もし男だったら付けようと思っていた名前があるんだ。」

「…」

「雄理…英『雄』（えいゆう）の『理』（ことわり）と書いて雄理だ…それが、お前の新しい名前だ…」

「ゆう…り？」

「そつだ…さて、今後の事を考えなければな…おい、刃野…見てるんだろつ。出てこい。」

「流石、鳴海さん…向こうの広場で倒れていた奴ら…みんな、殺人に強盗を繰り返す凶悪犯ばかりでしたよ。」

「まあな、この子供の今後を考えなければいけない…手伝え。」

「喜んでっ…！」

二人の男が闇の町に消える…少年を連れて…

「まあ、こんなところか…あいつが戦う動機の夜なんてこんなもんだ…」

鳴海は、これ以上は語らないと語外に語るように席を立ち、娘がいるテーブルに戻り、奥さんとイチャイチャします…普段のハードボイルドな雰囲気は無く、一人の父がそこに居た

「あ、そやつ！せつちゃん（仮）の名前が決まったでっ！」

「ほ、本当っ?!」

やや強引だが、湿っぽい空気を変えるにはこれしか無いとはやてが切り出す

色々と聞きたいことはあつたが、それは本人に聞けば良い…

「ちなみに、これを決めたのは雄理だったりします…本人に自覚は無いかもしれへんけどね。」

「はやて…勿体ぶらないで教えなさいよっ！」

勿体振るはやてに、アリスが苛立ちを隠せない…相手が人間？であり、ペットみたいに気軽に名前を付けるものではないが、せつちゃん（仮）本人が望んだ事なので今回に限っては構わないだろう

「まあ、その前に皆に見せたいものがあるんや…」

「な、なによ…」

はやてが急に出した、修学旅行で深夜の男子の出す危ない話するオーラに免疫の無いアリサ達はたじろぐ…

「雄理がな、女の人を抱いて寝てたんよ…添い寝レベルなんやけどね？」

「……（ノノノ）……」

はやてが携帯を開いて見せたのは、銀髪の女性を抱きしめる長身の男性…幼さを感じるが全体的にまとまった容姿に驚く一同…どこと無く、高町恭也に似ていなくもない顔である

ちなみに、プレシアに元にはクロノ リンディ経由で送られており、その姿を見る…以下、お母さんズの感想

「ここまで来ると芸術ね…」

「あらあら、こんなに大きくなっちゃて…女の人を抱くなんて大胆ね…フフフツ」

「まあ、中身は9歳みたいだし…女の人も嫌がってる素振りもないしセーフかしら…」

三者三様とはまさに、この事…

プレシアは関心し、桃子は黒くなり、リンディは司法の立場で見る写真を見た上の高町兄妹+ は…

「うわぁ…まんま、恭ちゃんみたいだ…」

「美由紀…喧嘩売っているのか？」

「いや、これは間違いなく恭也でしょう…恭也程の荒々さは感じないけどね。」

「忍っ！！！」

「だってえっ！！！」

弟？の会議をしていたが痴話喧嘩に発展してしまった…元祖工口ゲ主人公が…

一方、お父さんズ感想

「全く、大きくなってしまっ…愚息が迷惑かけました。」

「本当に、馬鹿弟子が迷惑を…申し訳ない…」

酒が回っているのか、せつちゃん(仮)に頭を下げる…せつちゃん(仮)はあたふたして止めようとする…シユールな絵になった…

「で、そんな危ない画像はともかく、名前はなんなのよ？」

「あら、もうちょい遊ぶつもりやったのに…」

あーあとはやてがうなだれ、携帯をしまっ…

「それじゃ…発表するな。」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

その時、一同に電流が走る…

「リインフォースやっ!!」

何故なら、書き初めのような紙にその名前が書かれている

「ちなみに、これがその証拠なっ!!」

『なんで、リインが隣で寝てるんだよ…』

「なんか、声からしても雄理っぽくないというか…」

「もはや、血の繋がらない親戚って感じだよね…なんと無く…」

否定的な声がる物のなのはが間違いなく雄理だと言うと渋々納得した感じになる

「リイン…フォース…それが、私の名前ですか？主？」

「そや、あんないかにも悪そうな名前はもう捨ててまえ…祝福の風、リインフォース…それが貴女の新しい名前なんよ。」

「ありがとうございます…」

呪いから解放された融合騎とその主は抱き合う…白い雪が降りしきる中…その場にいる皆が祝福した…新たな家族の門出を

「寒い…ホカ ン持ってくるべきだったな…」

【ガジェットにはわからないな…】

「お前…だつたら表出るよ…」

【人もいないし、そうしよう。】

雄理とファングは、自分が消した木々の広場に来ていた…今は、
舗装された道ができ、ベンチが置かれている

「もう、二年か…」

【踏ん切りはついたのか？】

「ああ…」

【とりあえずは、何をする？】

「とりあえずは…出てきなよ。木陰で見られると怖くて堪らないん
だけど？」

「すばらしい、木陰から見ているだけのつもりだったのに気配で察
するとは…流星は自慢の息子だ…！」

「ドクター…声が大きすぎます。」

木陰から現れたのは、黒い服装の男女…彼等は…

「嘘だろ…お袋に、親父っ?!」

「ふむ、それが君のけじめの付け方か…悪くは無いが、確かに私は君の遺伝子的に父のジェイル・スカリエツティだ…大きくなって。ウーノ、私達の息子はここまで成長したぞっ!」

「そうですね、ドクター…久しぶりね、セルシオ。ごめんなさい、今は雄理ね…ごめんなさい…」

「おふ…くる…」

紫の髪をアップにした女性、ウーノは雄理を抱きしめる…

「何で…お袋はともかく、確かに親父は目の前で刺されて死んだ筈だっ!」

「何、天才ジェイル・スカリエツティに不可能は無いのさ…クローニングをすれば同じ固体を作るなんて訳無い。」

「反則だろっ…」

紫の髪に金色の目の男のジェイルは得意そうに腕を組み、自慢する

「雄理…今日はね、お話があつて来たの…」

「本当は、君の今のご両親に話を通すのが筋なんだが…話だけでも聞いてくれないか?」

ジェイルとウーノは、畏まった態度になり二人を見上げる雄理の肩に手を置く

「もしも、よければ今からでも良い…一緒にすまないか？」

「都合が良いとは私たちも思っている…でも、貴方が良ければ最大限の努力はするわ。」

二人の話…それは、雄理にまた一緒に住もうという復縁の話だった…

「トーレも会いたがっているぞ…お前に妹も沢山増えるし…それから…」「ごめん…」雄理…

雄理は、二人の手をやんわりと掃い、俯いて一步下がる…

「俺、今の家族の所にいるよ…大切な物…沢山増えちゃったし。それに、トーレ姉達には大人なってからも会えるしっ！」

「それが…答えだね？」

「うん…ごめん、親父。」

ジェイルは、雄理をそつと抱きしめ囁く…

「いや、良いよ…信念のある言葉が聞けてなによりだ。何、敷居を跨ぐなどと言わない…いつでも、会いにおいで。」

「待ってるわ…雄理。」

「うん、じゃあまたね…お袋、親父っ！」

雄理は、ジェル達から離れて走り出す…ジェルとウーノも雄理が見えなくなるまで手を振る
彼の沢山の思い出が出来た、新しい『ビギンズ・ナイト』はこうして終わった…

この後、様々な追求はあったが…私が語るべき物語では無い…テンプレすぎてつまらないのもあるが、なにより彼に追い撃ちをかけたくないからだ…機会があれば、何れ書くだろ…例えば、それが笑い話で済む頃などにだとか…

全ての仮面ライダー好きに…この作品を捧げる願わくば、雄理少年の未来に光がある事を私は願うばかりだ…

自重を捨てた次回予告

「レテイ、脱ぎますっ!!」

「リンディっ! 阻止しますっ!!」

次回…Sの咲く頃にノ花より団子は伝統だ
これで…決まりだ…ぶっ（おかしくて吹き出した

始まりの夜…ヒギンズ・ナイト（後書き）

楽しめて頂けたでしょうか？

これが私の全力全開…後は自重を池にこつして…こつして…こつだつ！…つてぶん投げた感じの花見と作者と主人公達の座談会でございます。

m
さいごまで、お付き合いくださるようお願いします（m——）

Sの咲く頃にノ花より団子は伝統だ 【本編完結】（前書き）

これで最後：次回の本編から違うのを立てます

そういえば、25ってアニメ一期と同じくらいですね

Sの咲く頃にノ花より団子は伝統だ 【本編完結】

「雄理、そっちはどう?」

「大体出来た、後は詰めるだけよ。」

サクラが咲き乱れる季節：今日は、高町家恒例の花見の日である
何でも、今回はリンディさん達が来るらしい
それに、すずかやアリサなどいろんな人たちが来る大規模な花見になるようだ

「はやてちゃんの料理も楽しみね。」

「あいつ、料理上手し…心配の必要が無いのが嬉しいね。」

「あらあら」

なんか、お父さんとイチヤイチャしている時の表情になっている…
こういうときは逃げるに限る

「詰め終わったし、行く準備するのに戻るね。」

「後はやっておくわ。遅れないようにね。」

「はい。」

部屋に花見に行く為の用意を取りに行く
小さいレジャーシートに各ガジェット達を取りに行く
今日は知らない人がいないからファンングも連れていける

花見の場所は管理局側が用意するらしい…クロノが認識阻害がどうか、海寄りがどうか言っていたが…アイツ、休むの結構上手いよな

14くらいで休むの上手いとか俺は言われたくないけどな

「フアング、そろそろでるよ。」

【すぐ行く…】

窓際でけづくりい？をしていたフアングがこちらに跳ねてくる
小さい鞆を背負い、玄関に駆け足だ

「よし、じゃあ出発だ。」

「「「「おー！」「」「」

父の号令に皆が答える…兄は恥ずかしがって、明後日を向くが
一先ず、家の前で月村家を迎えに行く兄とは離れ、俺達はテストタロ
ツサ家と合流し、花見会場に向かうことになった…俺にとっての地
獄の始まりと気付かずに…

「はやてちゃん、卵焼き出来ましたよ。」

「なら、これで最後やな…よし、出来たっ！！」

オオーという歓声と共に拍手が起こる…その主な発生源は料理が
まだ不慣れなシグナムとヴィータだが

「シグナムも料理覚えなかったん？好きな人おったんやる？」

「いや、シグナムはなあ……」

「ある種、禁断の恋だったんですよ……はやてちゃん。」

シグナムな明後日向き、狼形態のザフィーラを弄っていたリインは固まる

「……どないな事なん？」

はやてはその微妙な空気を察し、すかさずツッコム

「実は……」

「実は……？」

シャマルの矯めにはやても乗る……止めようとするシグナムをヴィータがグラーファイゼンで器用に止める

「ストル隊長……既婚者なんですよ。リインのモデルになった方と結婚してたんですよ……最も、当時のベルカでは重婚は認められてたんですけどね。」

「え、えええー？！」

信じられるだろうか……大人雄理がそっくりな人物は既婚者だったのだ

「主、そろそろ時間です。」

「ん、ホントやっ?! いそがなあかんっ?!」

しかし、ザファイラの一言でお開きになるのであった

弁当を詰めたバケツトを持って、八神家は花見会場に急ぐのであった

「それでは、第四回…高町家主催の花見をはじめまあすっ」

開始宣言は母さんが勤めた…大人達は酒を飲み、子供達は団子を食べる

ちよつとしたお祭り状態だ

「はじめまして、レティ・ロウランです! よろしくね」

紫の髪にメガネの女性が、酒を片手に挨拶をする
頬は酒の影響かほんのりと赤く染まっている

「君が雄理君ね? 息子に近い年齢だけど…なにこの子可愛い」

「うわっ?!」

「…あっ?!」

レティの豊満な胸に雄理の後頭部が埋没し、雄理は顔を真っ赤にしてオーバーフローしていた…顔から湯気が出ている

「ちょっと、レティ…いい加減にしないと」

「おまたせーっ！って、なんや…この状況。」

遅刻した八神家の皆さんが到着する

「あら、未来のお嫁さん到着ね。」

「お、お嫁さん?!」

酔った桃子の先制攻撃にはやてが怯む…雄理は現在気絶中で木の根に寝かされている

起きたときは既に地獄だろうが、回避不可の惨劇だ…ドンマイ少年

カシヤツ

「ん、ん…」

「ん？起こしちまったか？」

マゼンタのトイレカメラを構えた、これまたマゼンタのシャツに黒いジャケットに黒いパンツの男性が居た…なんだ？

「悪い、木陰で寝ていたお前が絵になってな…俺は門屋 士、通りすがりの写真家だ。」

「俺は、高町 雄理…聖祥大学付属小学校の…今年4年生。」

とりあえず、自己紹介した…挨拶は重要だと思う

「良い町だな…ここは。」

「この時期の風が一番気持ちいいんですよ…風に舞う桜も綺麗だし。」

「全くだ、旅の途中で寄っただけなんだが…そうだ、さっきの侘びにこれをやろう。」

男を懐から一枚のカードを取り出し俺に渡す…カードには白と黒の左右非対称のライダーが描かれ、『仮面ライダーW ファンング・ジョーカー』と絵の下に書かれていた…何これ？

「アンタ、これ…え？」

顔を上げた頃には男が居なく、変わりに散った花びらを舞わせるつむじ風が吹いていた

「なんだったんだ…どうしようコレ？」

とりあえず、貰ったカードを懐にしまい、元の場所に戻った最初の感想は後悔しただった

「なにこれ…」

「レティ、ぬつきまーす」

「いい加減になさい、レティ！」

酒池肉林という言葉は聞いた事はあるだろうか？

今俺はそれを見ている…兄は倒れ、父は母に膝枕され、ザフィーは現実逃避している

クロノの野郎は逃げやがった、ユーノはりニスと楽しげに話している一方、プレシアさんはフェイトに何かを力説しており、母さんはなのはに何かを話している

逃げよう、さあ逃げようか、逃げるべき…

「まで、ストル…私と戦え…」

「え？」

何故か、後ろから覇気を纏ったシグナムがレヴァンティンをこちらに向けている

「お前はいつもそうだ…無用な戦いはしないと私からいつも逃げて…今日こそ倒すっ！」

ただし、顔は赤く染まっていた…酔っ払いかよ

【Cyclone】

【Joker】

「酔っ払いとは言え、やるしかないか…変身！」

【Cyclone Joker!】

風と切り札の旋律が、桜を舞わせて翠と黒の戦士が姿を表す…

『ほんと、安定しない力だな…これ。』

「おのれ、ファングはどうした!!」

『逃げた、以上…やるんならさつさとしろ。』

やれやれーと外野がうるさいが聞き流す…プレシアさんがなんか言っているが気にしなーい

「いくぞっ!」

シグナムは、普段の鋭い剣戟だけではなく、酔いから来る乱れた剣戟をはなってくる

俺は、それを拳でいなしていく…技を特化しているジョーカーだからこそ出来る戦法であり、力技では回避できない相手にジョーカーは最適だと再認識した

そうこうしている内に、有効打がシグナムの腹に決まり、気絶させる

「決まったー!勝者、W!見事なTKOだあ!!」

いつの間にか、司会のポディションを獲得していたユーノがウザイ…あいつ、死ねば良いのに

「次の挑戦者は…高町　なのはとフェイト・テストロッサのコンビだー!!」

ユーノの変なテンションはそのままいきなり始まったこのイベントに…なんでこんなに順応してるの?なに?俺だけハブ?

「勝たせてもらっつから…」

「…」

『いやに真剣じゃないか？別に構わないけどな…さて、お熱いのかますかっ！！』

【Heat】

【Heat Joker!】

風の右半身が、情熱の右半身へと変化する…

先の事件から有効活用が出来ようになった『本棚』が正常に使えるようである

『本棚』…その星の記憶が持つ演算能力の間借りができるのも司書の力の一つだ

最も、本人は意識せずにやっているから自覚は無いだろうが

「いくよ…デイバイン・バスター！」

『悪いが、効かないな…当たらないのだから。』

なのはの誘導弾と直射砲をたやすく避け、余裕なのかステップすら刻んでいる

「まだまだ、私を忘れないでっ！！！」

【Photon Burst】

フォトンバースト…広域攻撃型の魔法で、プレシア・テストロツ

サの得意魔法の一つである、彼女は研究の合間にフェイトの修行も付けていたようだ…思わず、強くなる友人に仮面の下で微笑んでしまうが…

【Metal】

【Heat metal!】

情熱の闘士がその鉄根でフォトンバーストを地面に逃がす…フェイトの持つ魔力変換体質が仇になったようだ

「むう、少しくらいなびいてもいいと思いますっ!」

「雄理…硬すぎるよっ!」

『手加減抜きの攻撃喰らったら死ぬとも思っただが…』

「「非殺傷設定だから大丈夫っ!」」

『それは免罪符じゃないぞ…たく…』

【Joker】

【Heat Joker!】

彼女らの過激な攻撃をさばくにはジョーカーを維持しないといけない…しかし、装甲が薄いから広域攻撃をされたらメタルにならざる得ない…やるなら、一撃で決める!

「ごめんね…次で決めるから…」

『これは、バインドっ?!』

「痛くないから…ね?」

『痛いに決まってるだろうが…どうすれば…』

【手を貸そうか?】

良いタイミングでファンゲが戻ってくる…が

『平気だ…下がっている。』

右手のバインドを引きちぎり、メモリを右の腰にあるマキシマムスロットに叩き込む

「全力全開…」

「疾風迅雷…」

「「ブラスト・シュートっ!」!」

【Blast Calamity】

なのはとフェイトの放つ最強の一撃が放たれる…暴力的な雷と光が俺に迫る

普通ならここでコレを喰らってお陀仏…ギ・エンド、だがっ!

【Joker Maximum Drive】

Wなら出来る！この状況を技と力で打破できるっ！！

「やったかな…？」

「直撃はした筈…でも、油断h『ジョーカー・グレネイド！』」

「「きゃあ?!」」

ブラストカラミティ…その火力はもはや、アルカンシエルと遜色ないレベルの大魔道レベルの魔法…しかし、切り札の記憶…ジョーカーメモリは伊達ではなかった

マキシマムドライブの発動によりバインドを破壊、拳から上に向けての推進炎を放出し回避

そのまま、魔法の爆発に乗って分裂してジョーカー・グレネイドを二人に叩き込む

この状況下でこれ以上の戦術を組み立てるのも実行も無理だったろう

切り札の力は、『打破』…どんな困難な状況も打破する力を秘めている

それを引き出せるかは、俺次第だが…

『やべえ、さすがに辛いぞコレ…』

メモリを引き抜き、変身を解除する…体は縮み元に戻る

「おつかれ、まあ飲みたまえ。」

「サンキュ、クロノ。」

クロノから飲み物とねぎらいの言葉を貰う

「それにしても、良くあんな化け物砲撃避けたな…関心を通り越して畏怖に値するよ。」

「畏怖…か。それが正しいと思うぞ、俺は。」

なんか、変な気分になってきた…頭グラグラする…

「ぐ、むう…」

ダメだ…眠気が…ぐう…

「全く、酒を飲ませるなんて…何を考えている？」

「出てきたな、ストル・ヴォルケイン…いや、そのガイアメモリに潜伏していたんだろうけど。」

「最初はな…しかし、コイツが本棚とのつながりが確立された以上、本棚に間借りしている感じだが。」

いつの間にか、子供の姿から大人の姿になる…帽子はないが、この前と同じスーツ姿だ

「本棚は…ベルカの時代よりずっと昔、人が生まれる前から、生命体が生まれる前から、星が世界に生ずるときに生まれたんだ。さしずめ、星の歴史を蓄積される場所だ。」

「そんなもの、ある筈ない。」

「あるぞ、ここに…」

そういつて、青年は頭を指差す

「本棚は、星の構成する全てに刻まれている…もちろん、人間にもな。」

「ありえるのか…そんな事…」

「Wは、星の守護者や抑止の守護者と違い、世界の守護者なんだ。」

「世界…だと？」

悲しみに瞳を染め、己の宿らない素のファンクメモリを撫でる…

「世界が何らかの要因で根こそぎ、理不尽に破壊される場合のみ、生み出される力。災厄を滅ぼすための力…」

「なら、管理局にいたほうが…「それはない。」「なぜ？」

クロノは自分を自制して、ストルに問いかける…

「原因が…管理局にあるからだ。」

「何っ?!」

驚愕の事実に出すクロノ…周りが何だと反応するが、なんでもないクロノは言い返す

「で、原因って？」

「知れば、お前は消される…」

「何？」

「それだけ、管理局の闇は深い…雄理を作る要因さえも管理局にあるからな…」

「雄理を…作る？」

「それは「ユウくん、弁当食べよう！」また今度にしよう。」

「雄理は、俺が起こしておこう…先行って彼女らを落ち着けてくれ…雄理死ぬ。」

「ああ…わかった、善処する。」

弟を思う兄の気持ちに感化されたのか、クロノが疲れたような顔をして答える

「モテる男は大変だな…」

「破滅しかない奴に…何を求めてるんだか…」

「早着替えってレベルじゃないぞ君…」

自虐的台詞を吐いて、懐からカードを取り出す

「俺は、いずれ消滅する…悲しみも残さず。」

「消滅？」

「俺は…作られた存在だから、役目を果たせば消える定めさ。」

メモリを強く握り、瞳に決意の闇を宿す

雄理の顔には、変身時に出る文様が浮かびがる

「もう、後戻りできない…命ある限り、俺は戦うさ。今がそのときじゃないだけだ。」

「なら、私はそれを支えるよ。」

「違う形でも、私も。」

「以下同文やな。」

「お前ら…」

いつの間にか、近くに来ていた三人が居た…けど

「ごめん、無理だ…復讐に誰かを巻き込むなんて、できやしない。」

「」「あ…」「」

踵を返して、酔いつぶれた大人たちの下へ向かう…その背には、
拒絶を物語っていた

「これは重症やね…」

「どろどろ…」

「もう、縛っておこうか…」

色々と酷い良いよつの三人娘だった…

「…消滅、か…」

時刻は午前1時…子供は眠る時間帯だ

「やっぱり、あのヴィジョンは真実なんだろうな…」

本棚で見た、自分が消える未来…みんな、俺を忘れてしまう未来

「むしろ、良い事なんだろうな…俺が居て良いはずない。」

本棚は、コピーメモリにも力を与えている…その経路を作っているのは、紛れも無く俺だ…だから…

「いずれ、自殺も視野に入れるべきだな…」

復讐の対価ならいくらでも払おう…俺の命でさえも…

「そいえば、穴ぼこだらけのあそこを元に戻すのたいへんだったな…」

100%なのはとフェイトせいだが、まあいいか…

「楽しい時間ってなんでこんなに早く過ぎるんだろう…」

春が近づく夜…自分はいずれ消えると言っ未来を見ても、家族の
…友の為に戦う事を決めた夜だった…

Sの咲く頃にノ花より団子は伝統だ 【本編完結】（後書き）

シリアスで終わってしまった…しかし、今度は主人公と作者を交えた

座談会ですよ。

シリアスで終わらせる筈が無いっ！！

【これで】完結記念座談会【いいのか…】（前書き）

なんか、ネタバレしかなない座談会ですが…これで一応の完結とさせていただきます…短い間でしたが、ありがとうございました。次回作も早めにあげる予定ですが、暫くはマブラヴとGEがメインになります。

【これで】完結記念座談会【いいのか…】

「おつかれえ…」

「お疲れ様、青少年…」

某都の学園都市にある小さな喫茶店…

そこに眠そうな目をした白い学ランの青年と白い制服を着た少年
そして、いかにもダメそうな青年に成り切れない少年が居た…

「いやあ、死亡フラグ立てれちゃったけど、気分は？」

「最悪に決まってるだろう…馬鹿作者…」

「そつだぞ、現代文3の馬鹿作者…」

「まあ、事実だからな…反論はしないっ！」

「「おいおい…」」

緩い空気が喫茶店に流れる…作者を名乗る少年は怠そうにテープ
ルに伏せる

「で、作者と雄理は分かるとして…なんで俺まで…最近、名前バレ
したから嬉しくて出したいと推理しているが…」

某K1のよく出すババーンと言う効果音と共に指をピシッと突き
出している

「まあ、名前バレは最終話のラスボスとの殴り合いで出る予定なのを俺が苛々したから登場予定を繰り上げただけ。」

「あら?!」

ステーンと芸人のように転ぶ…この空間…作ったの俺だがゴジマ汚染ばねえ…

「君、雄理とはやての夢で出たよ…姿は違うけど。」

「え?」

〈青年熟読中〉

「雄理はわかった…設定上は雄理と中の良いクラスメイトだろ?」

「うん。」

「なら…はやては?」

疾風は戦慄を禁じ得ないという表情で見ている…

「もふっ」

「やっぱりかーっ?!」

キャラ崩壊起こしてますよ…疾風君…

「もふって何だよ…もふって…」

「説明しようっ！もふっとは、首輪付きけものと呼ばれるACFAの非公式マスコットキャラの事だ。首輪付きけものは、カーパルスで水没王子の台詞を発端に生まれた生き物で、見た目はACWIKiで見てね。」

「説明乙…で、なんで俺がけものになったんだよ…そのままいいだろう？」

作者は落ち込み、表情を陰に落とす

「実は…」

「「実は？」」

「疾風のオルタード・フェイブル参加は無くなりました。」

「待て…待て待て待て待て待て待て待て待てっ！…どういう事だっ！」

「何だよ…オルタード・フェイブルって…」

オルタード・フェイブルとは、オルタネイティブ後を描くファンディスク…武が純夏の描いた元の世界に帰還するというなんとも珍妙そうな世界に行くというある意味幻想入りより質の悪そうな感じだが、実際は楽しく馬鹿をやる学園生活コメディーだ…が、作者はやった事が無い…しかしっ！

「やった事が無いからかけない？作者の妄想力舐めんなっ！やった事がないならやった人の感想を元にオリジナルに書く…それだけだ…」

「なんで、俺だけコメディ入り出来ないんだよ…理不尽だ。」

「はい…これ。」

「これは…プロットっ！しかもマブラヴの後かつ！」

「そっだ…君には…ずばりっ！スパロボ入りして貰うっ！！新型A C…しかも作者の魔改造モデルでなっ！」

「スゲエ…全ACが出ないの分かってるけど出てるのみたいという願望を…」

「詳しくは最初しか出来ていないが…まあ、マブラヴfAが書き上がる前には7割出来る筈…残念だが、レイヴン…リンクスの登場は予定してないが…主人公機は黒百合をモデルにするからこうご期待っ！」

「自分からネタバレたよ、この人…」

「次っ！」

雄理は、おかわりの紅茶を持って帰って来た…空気読んだのね

「今後の俺の展開は？」

「1・5期…つまり、空白期を書く訳だが…舞台は熟読者の方は察しがついているだろう…」

「さりげなく出たあの人に気付くかがポイントか…」

「魔法と学問の街…麻帆良だっ！」

「思い切ったな…何、ネギに喧嘩売れと？」

「舞台は原作一年前だから問題無い…まあ、入れ代わりだな。」

「なら、デンジャラスな学園物語か…」

「そう、始まりは受験戦争から始まる。空白期最大のテーマ…ずばりっ！」

「なのはの中毒が直せるか、か…」

「その通りっ！これ以上は、出来た新作をお楽しみにね それでは…」

「」「さよならっ！」「」

【これで】完結記念座談会【いいのか…】（後書き）

締まらない終わり方だな…俺らしくて良いかな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9510i/>

W 魔法と記憶の織り成す物語

2010年11月1日20時21分発行